とある天使と幻想殺しの苦悩

傍観者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある天使と幻想殺しの苦悩

【Ｎコード】
Ｎ５７７０Ｗ

【作者名】
傍観者

【あらすじ】
ある日突然俺の日常が消えた。そして、生き残ったのは俺だけだった。なぜ、俺だけ生き残ったんだろう。だけどその時からこう思ってしまったんだ。死んでしまった人達の命を一生背負おうと。そして、強くなりたい。もう俺は、大切な物を失いたくないから……とある魔術の禁書目録を題材とした二次創作です。幻想殺しと継承者…。魔術と科学が交錯する時、二人の波乱に満ちた苦悩の物語が始まる！　基本的にギャグを推したいのですが、中々難しい。

頑張って、２２巻までは進めたい。

終わりと道標（前書き）

初心者で操作ミスありですいません
とりあえず　はじまります

終わりと道標

神様。俺は何か間違ったことをしたのかな？　いや、みんなが何か間違いをしたのか？
今、俺の眼前には廃墟が広がっている。ついさっきまで、賑わっていたのに…。
発端は現状を遡る
俺はいつものように学校が終わって、みんなと一緒に下校していた。
「今度の日曜僕の家で遊ぼうよ。新しく買ったゲームがあっ「なにぃ！俺は行くぞ」うん！」　テンション高いなぁ、こいつら。肩を少し竦めると「まあ、勇治も海斗もいつもこんなんじゃないか。な、高貴」　今話しかけてきたのは、クラスで俺と同点トップの信二だ。何かと話しのわかる奴で、コイツとは結構仲がいい。
「俺は元気はいいことだと思う。が、騒ぎすぎはどうも苦手だ」「僕もなの！？」
「元気なだけだけだぜ！」　「見解の相違だね」　「高貴は元気がねぇだけだ！」　「体は特に「そっちじゃねぇ！」冗談だよ」
いつものように軽口を言い合っていたら空がいきなり暗くなった。
そして、幾何学的な模様が空に浮かび上がった。
俺達は呆然としていた。それがいけなかったのか、いや、何をしてもおそらく意味はなかった。次の瞬間、光が俺達を襲った。正確には、光が町を飲み込んだ。
光の中、体がとても熱かった。苦しい…、つらい…。意識が薄れる中、体が光に飲み込まれていくがわかった。そうして、俺は意識を失った。
そして、目が覚めるとこのようなことになっていた。あちらこちらに原型を留めてない肉片がー
吐き気がした。血生臭さと見るも無惨な死体を直視出来ない。体に力が入らない。倒りこむと、何かにぶつかった。そこには、

人の腕だった。しかも、ついさっき話していた友人の……。「うわあぁぁぁぁぁ！」絶叫するしかなかった。信じられなかった。俺はそこから逃げた。恐ろしくて、嫌で。だが、肉塊になってはないが、俺も体とか頭にけっこう怪我があり、うまく動けなかった。そうして、ゆっくりと辺りを探索しても死体しかなかった。しばらくすると、立ちくらみがした。出血量が激しく、今度こそ動けなくなった。死ぬのかな。理不尽なことに巻き込まれたはずだが、なぜか、落ち着いていた。そうして俺は目を閉じた。だんだん痛みがなくなっていく。これが死なのかな。だが、意識は逆に強くなる。目を再び開けるとそこには一人の男がいた。出血が止まり、骨が治っていた。緊張がとかれ、今度こそ、意識を手放した。目が覚めたら病院だった。あれは夢ではないことを実感した。俺のすぐ横に何かがいた布団を剥がすと……

うん？　これはどういうことだ？

目の前の少女もとい俺の妹である上野紫穂は学園都市とかいう場所の常磐台中学の寮にいるはずだが…。

「う、ううん、」

問題の方が目覚めたようだ。

「お兄ちゃん。起きたんだ。」

「ああ、布団の中とは少し驚いたがな。」「…ごめん。……お母さんとお父さん、死んじゃったんだ。」

「……」

「何が起きたの？」

涙目になりながらも聞いてきた。

とりあえず、状況を説明した。

全てを話し終えた後紫穂は我慢できず、泣いてしまい、泣き止むまで抱きしめた。「……紫穂」

「…お兄ちゃんはいなくならないでよ。」

「当たり前だ。」

ああ、そうだ。生きられなかった人を背負わないといけない。多分

それが俺の役目の一つだと思う。
そして、もう大切な人を失わない為にも強くなるんだ！
　その後、俺達は親父と交流のあった上条家に引き取られることになった。俺は困惑したが、そこらへんは紫穂がいろいろと話しを付けたという。俺には勿体ないぐらいしっかりしてる。そして、上条当麻が通う学校に入学することになった。

主人公設定とオリキャラ（前書き）

紹介です

主人公設定とオリキャラ

主人公　上野高貴
１６歳　１７５ｃｍ　血液型　Ａ型
容姿　黒髪　ＢＬＥＡＣＨの修業後の一護
性格　比較的温厚　友達思い　物事を多角的に見る傾向にあり
　災害後少々妹に過保護な一面をもつ
能力　Ｌｅｖｅｌ３～５
能力解析　トレースマスター
能力を解析し、その演算パターンを読み込み、使用出来る。
どんな能力かをただしく認識できなければ、使用不可。しかも、使用限度があり、鍛えれば伸びるが他の能力者に比べ脳に負担が大きい。

上野紫穂
１４才　１６５ｃｍ　血液型Ａ型
容姿　ＢＬＥＡＣＨ　茜雫　能力Ｌｅｖｅｌ４　パイロキネシス　炎をじざいに操る能力

ブラコン　人あたりがよく、真面目で、成績優秀だが、兄のことになると壊れる。典型的なお兄ちゃん大好きっ子にみえるが、原因は兄と同じ。だが、時々黒いときがある。

電撃姫との遭遇（前書き）

修正版です。

電撃姫との遭遇

やあ、こんにちわ。
上野高貴です。なんだかんだあったが、俺は今、学園都市にいる。
隣にいる上条当麻は、ただいま絶賛不幸中である。

いや本当にこれは才能なのかな。それとも、狙ってるのかな？

入学式早々に遅刻とか…。事情を聞くとなんか不良に追い回されたそうだ。何がどういい仕組みで不幸になるのは分からんが、これは自業自得だろ。

ただ……俺を巻き込むなあぁぁぁ～！

話しは少し遡る。不良共が常盤台の女の子にちょっかいを出しているようだ。紫穂に手を出すならなぶり殺しだが、とりあえずやばくなったら助けるか、と様子見を決めていた矢先、

「上条！？」

あろうことか、奴は突撃していた。

馬鹿野郎～！　どうする気だ？と思っていたが、

「ああ、いたいた。いや～連れがお世話になりました～。だめだろ～勝手にはぐれちゃぁ。」

は？　その瞬間、時間が止まってるように感じた。

やめろ上条ぉ？

痛いぞその発言はぁ～！

不良共が唖然としてるだろうが。

「じゃぁども～」

「誰あんた？」

「ゑ？」

阿保共がぁ～！あいつもＢＡＫＡなのかぁ！？

「おま、うまく合わせろよ！知り合いの振りしてうまくこの場から連れ出す作戦が台なしだろ！」

自爆してどうする。

「なんで、そんなことしなきゃいけないのよ」

暴君かコイツは。

「何だてめぇ！嘗めたことしやがって」

「やんのかぁ！」

「はあ、お前ら恥ずかしくないのかな。最近は囲むことがブームな

のか。なさけねぇ。……」

割愛したい。長いからホント。

「だいたい、お前ら誰に声かけてんだ。まだガキじゃねーか」

バカヤロォ～！

さらに馬鹿発言をする暴走状態の上条。

周り見ろよ～。

不良があぜ・ん？

バチバチィィ～！

「……アタシがムカつくのは、お前だぁ！」バチバチバチバチィ！！！

やべぇ！

とっさに俺は上条以外の不良のまわりに風の能力を使い、真空領域を作り、電撃を誘導した。

ハアァ～。何か当初の目的と違う。

「ヒィィ」

不良は逃げていった。だが、

「…あんた達、なにしたの？」

「「答えたら帰らしてくれますか？」」

「無理ね」

「「不幸だぁ！」」

鬼ごっこが始まった。そして、今に至る。何とか撒いたが、顔を覚えられてしまった。不幸だ。

「あんなにヤバイ奴がいるとは…」

紫穂、だいじょうぶかなあ～。あんなふうになったら、俺立ち直れない。

上条め、厄介ごとに首をツッコミやがって。厄日か、今日は？

電撃姫との遭遇（後書き）

過去編も考えないとな。

騒がしい日常（前書き）

修正版です。

騒がしい日常

長いようで、短いようで、夏学期がもう終わりそうだ。いつものように学校に行く。いつも通りに。

だが、何を間違えたのだろう。（間違わないと誓ったのに）

上条が珍しく早く出たからか。それがたまたま俺の時間帯と重なり、ビリビリ中学生こと御坂美琴と遭遇。

なぜだ。とりあえずスケープゴート（上条）を残し、風の力で翼を作り、この場から離脱する。

下から「裏切り者～」とか「逃げんなあ～」とか言っているが、無視だ。俺は、逃げる！

「フハハハハハアァァ！さらばだあ！」

俺は華麗に戦線離脱する。

場所は変わって学校。本当はテレポートで行きたいのだが、風能力を使ってしまったので、複数の能力を人前で使えば、とんでもないことになる。最悪モルモットだ。だから使えない。

空間把握のほうがよかった。なんで不良を助けたんだろ。まあ、Ｌｅｖｅｌ０で名を通しているが、脳の開発をサボってるからなんだよな。いくら小萌先生のお願いでも無理なもんは無理。ただ、今は何事もなく平穏で心地いい。

「コーヤン、カミヤンはどないしたん？」

「フラグを早朝に建ててると思う」

「にゃに～！？またかカミヤンはぁ！」

「まあでも、高圧電気を放たれるとか嫌だろ？」

「なんやて？」

「…今回は少なからず同情してやるにゃ～。カミヤンには」
青髪と土御門に殺されはしないだろうが……。

「上条がまた遅刻だと！？またなのか！」

吹寄にスイッチが入ったようだ。彼女は本当に厄介だ。真面目だよ、それでいて仕切ることがうまい。でも何故、こんなにも上条にはきついんだろう？

「勘弁してやってくれ。あいつはホント大変なんだ。」

多分意味がないがフォロー。

「貴様は上条に甘い。私はね、不幸とかを理由にして頑張らない奴は嫌いなのよ！」

「「「……」」」

もう説明がだるい。

上条が学校にきたのは、1限が終わった後だった。何かもう可哀相なくらいひどい。朝なのに真っ白になっている。

うーむ、当麻では、荷が重いな。やられはしないだろうが、日常生活に支障が出てる…。俺ならあしらうことも容易だ。

次会った時、挑発したりしてこちらに目を向かせるか…。でも、紫穂とは同じくらい年齢なのだろう。…話し合いでなんとかならないかなあ？

……　ああ気が重い。この時、俺は思いもしていなかった。都市伝説に纏わる大事件に巻き込まれることになるなんて。

思わぬ再会と思わぬ事件（前書き）

修正第三弾。

本当にすみません。

思わぬ再会と思わぬ事件

7月18日
俺は当てもなく、町をふらふらしていた。成績は勉学はトップ独走中、能力はＬｅｖｅｌ５だけでも目をつけられるのにこのトンデも能力はまずい。

なので、能力開発カリキュラムは上条と同じ成績だ。まあ、やることやってるんで、補習は回避した。（上条は土御門らと小萌先生の補習を受けている）
だから、俺は一人でセブンスミストで時間を潰しているわけだが、うん？

目の前に紫穂よりも幼い女の子がいた。よく見るとどうやら迷子のようだ。

「…大丈夫かい？」

「……え？」

「迷子なのかい？」

「……うん」

どうやらホントに迷子のようだ。

「…親を探すの手伝おうか？」

「……知らない人についていったらダメっていわれてるからダメ。」

まあ当然だよな。だけど、

「……じゃあこの店の迷子センターに行こう。君のような可愛い女の子を傷つけるなんて万死に値するよ。」

「……え？」

あれ、なんか俯いたけど変なこといっちゃったのかな？

「……お願いします。」

「わかった。よろしくね俺は上野高貴っていうんだ。」

「私は美衣っていうんだよ。よろしくね、おにいちゃん！」

それから俺達はセンターに行くのだが、途中洋服売場で止まった。やはり、女の子は女の子だね。とういうより俺は年下好きなのかな。そんなことを考えてると　目の前で年に似合わないパジャマを合わせてるビリビリがいた。

……関わるべからず、ここから離れて……　。

「ちょっ！見たわねアンタ！」

鏡にバッチリ写っていた。　く、不覚…。

「なんでここにいるのよ！？」

「フラフラしてたんだよ」

ヤバイ、逃げないと。
「おにいちゃん～！！」
「美衣か。気に入る服はあったかい？」
「ああ～！常盤台のおねえちゃんだ！」
「！！…あの時の！まさか妹！？」
「美衣じゃないけどいるよ。ちょうど君と同級生ぐらいかな」
「おにいちゃんにね、迷子センターまで連れてってもらってるの。」
「それで今は寄り道中かな」
「へぇ～そうなんだあ」
「そういえばお互い自己紹介がまだだね。俺は上野高貴よろしく。」
「私は御坂美琴よ。って上野って紫穂さんの兄！？」
「！！…紫穂と知り合いなんだ。元気にしてるか？」
「えっと今一緒にここに来てるんだけど……。」
「おにいちゃん」
「そうだな、じゃあな御坂。後、あいつをあんまりいじめるなよ～。

」

「べ、別にいじめてるわけじゃ……。」

「じゃあな」

俺達はここから退散した。

彼女を母親に送り届けたあと、またフラフラとしていた。

「お客様に連絡します……。」

また物騒なことになってるなあ。なんかみんな外にだされたが……。
電気系統に異常は空間把握を使ってもなかった。事件か……。

あ、さっきの母親だ。

「あの子を見ませんでしたか!?」

「!!……一緒じゃないのか。」

「あなたにお礼がしたいからって走っていったの……。」

「外にはいない。まさか中に!?」

その瞬間俺は駆け出していた。

「何をやってんのよ!」無視だ今は!

「待ちなさい!」

彼女の場所へ最短距離を空間把握で検索し、風の翼で　目的地まで飛翔する！

そこには風紀委員の女の子に美衣ちゃんが……あの持ってるものは爆弾か！？

まずい！

風で真空を作りを圧縮させる！

キュイィィーン！！

爆発物は圧力によって押し潰され、不発に終わった。

「……誰がこんなことを」

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

やっぱりアイツは力を隠していたんだ。あの時、狙いは完璧だった。あの馬鹿は打ち消す能力だけだからあんな芸当は出来ない。Ｌｅｖｅｌ３～４の爆発を抑えるなんて　何者なの？

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「そこの風紀委員、知ってることを全て教えてくれないか？」

犯人がどんな奴かは知らない。だが、こんな卑怯な手口を使うとは…。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

なぜ爆発しない！

計画通りにいったはずだ。なぜだ、力も強くなってきたのにどうして……。考えられるのは、自分より上の能力者の介入。いつもそうだ、強い奴が俺を捩伏せくる。次はもっと…

「がはあ！？」

いきなり吹き飛ばされた。いや、蹴りでこんな…一体誰だ？

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

彼か、連続爆弾魔は。なんだろう、とても辛い感じかする。彼がどのような人間かはわからない。だが、こんなことは許されるはずがない。

「……なぜ爆弾で人を傷付ける？」

「な、なんのことかな」

シラをきるつもりか

「あの爆弾は俺が消滅させた。」

「馬鹿な！あれは僕の「認めたね」あ、」

単純だ。

「…いやすごい威力だから中の人もただじゃ済まないな、とおもってえぇ」

バチィーン！！

爆弾魔が能力を使おうとしたが、電撃が弾き飛ばした。

「……御坂か」

「おまえらみたいなのが悪いんだ。力のある奴なんかみんなあぁぁ！」

「……それでも彼女を傷付ける理由はないよ。彼女は風紀委員たけど、Ｌｅｖｅｌ１だと言っていたしね。彼女はそれでも見ず知らずの人を守るため体を張ったよ。……力の有る無しじゃないんだよ、彼女にとって重要なのは。君にはそんな度胸もない。結局の所、お前を虐めた奴らと同じだ。貴様は…奴らになりたいのか？…能力を振りかざし、優越感を持って他人を見下す人間に。」

いいたいことは言った。彼に届いたかどうかはわからない。だけど、彼はこんなことをするべきじゃないんだ。力に固執した生き方は、きっと苦しいのだろうから。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

こいつってこういうところあるんだ。めんどくさがりやかと思っていたけど、本当は熱いのねアイツ。

私なら、喧嘩腰で、殴ってたと思うし……。でも、たら、ればの話

をしても意味はないし。はい、この話はおしまい。みんなのところに戻ろう。

けど、あいつは風使い。ならどうやって犯人を見つけたのかしら。

荒れる学園都市（前書き）

白井さんと関わらせました。

修正第四弾

やあ、上野高貴だよ。何やら最近能力者による傷害事件が多発しているようだ。なんでも、事件の大半は能力のＬｅｖｅｌがあわないものばかりらしい。

え？　何で知ってるのか？　そりゃハッキングしたからに決まっているだろ。

犯罪？　バレナケレバイイノダヨ。

俺がこのような事件を調べる理由はいくつかある。

一つは、Ｌｅｖｅｌがいきなり上がるという事象に対する興味だ。

脳に負担が掛からずに力を上げるとは驚いたよ。

二つめは紫穂だ。まったく、紫穂に手を出すとは万死に値する！そう簡単にやられはしないだろうが、やはり許せん。…おっと少々取り乱してしまったようだ。

現在俺は独自のルートを使い、調べているのだが、なかなか尻尾が掴めん。

ピリリリリ！

電話か、

「はい、もしも「何であの時会いに来てくれなかったの、おにいち

ゃん！」ゐ？」

さて、記憶を遡ろう。俺はなにか約束をしただろうか、いやしてない。約束もせずに来てほしいなんて無茶は言わないだろうし、

回想

「上野って、まさか紫穂さんの」

「今一緒にいるんだけど」

とか言ってたような……。

現在

あ、あの時かあ！

盲点だった。あの時はあんまり意識してなかったな、そういえば。

（一刻も早く御坂から逃げることだけをかんがえていたからなあ）

「悪いな、少し用事があ「だから、今日久しぶりに会いたいな」ゐ？」

何を言っているんだ。今日はデルタフォースと遊びに行くのにそれは

「い・く・の・よ・ね・お・に・い・ちゃん？」

ブァァァ！

得体の知れない焦りが生まれた。紫穂なのかな。紫穂はもう少し優しいはず何だけど？こんなに黒くは……。

「いや、今日上条達と遊びに行くんだが」

「じゃあ、当麻お兄ちゃん達も連れて来てもいいよ。」

「は？」

男子高校生三人（旗男、守備範囲の広い変態、義妹一筋）と女子中学生数人はまずい。嫌な予感しかない。

「え～と、パスはまだ有効？」

「失効しました♪」

「いや、変態が二人いるし、やめたほうが……。」

「気にしないけど」

兄のことになると本格的に壊れるな…。

「はあ、わかった。やるだけやってみるよ」

「うれしい！」

まあ、久しぶりに会おうかな。

「それは本当なんコーヤン？」

「ああ」

「まあ、俺は義妹一筋だから気にしないにゃ～」

「そういやここんとこ会ってないな。いいんじゃねえの？」

「最初にいっておく。変な真似はするなよ、本当に。」

「「「わかってる（にゃ～）（っていうてんねん）」」」

大丈夫かな？

そして、約束の時刻。

「ここか」

指定されたライアルボストンとかいう店　には女子中学生３人がいた。一人は紫穂、セミロングの子、御坂がいた。

「……」

当麻が固まった。御坂は獲物を見つけたような獰猛な目つきをして黒く笑っていた。

紫穂を見る。御坂以上に黒い笑みを浮かべてこちらを見ている。電話の比ではない圧力を感じる。終わった。何をしたのかわからんが終わった……。

テーブル席、一見和やかに見えるが、二人の圧がすごい。

開始早々に紫穂がおれに小言タイムを展開、

理由を問いただされ、御坂から逃げるためとは言えん。でっちあげで、

「どんな服を買おうか迷って「嘘、」……」　鋭い、「お兄ちゃんはファッションには興味ないはずよ。それともいいかっこしたい人がいるのかしら。」

　詩菜さんがいる。いや口調は違うが、これは間違いないなく母さんだ。もろに影響受けてるじゃないか！

上条詩菜は優しい女性だが、怒るとドス黒いオーラを放つ。だから、俺達は逆らえない。怖いから。

一方上条は御坂に勝負を挑まれそうになっていたり、フラグの疑いによる制裁を変態二人にされており、カオスだった。

佐天さんが引き攣ってるぞ。ていうか佐天も何かぶつぶつ言いはじめたぞ。

うわあぁぁ！　もう帰らしてくださいぃぃ！

今日の会合はカオスな展開で始まり、上条と俺の逃亡によってお開きになった。

現在

迫り来るは焔と雷の円舞、今まさに大ピンチである。

「御坂はともかく、なんで紫穂まで～！」

「つうか近所迷惑だろ！」

「安心して当麻お兄ちゃん、他の人には当てないから」

「不幸だァァ～！」

その後、俺が陽動している間に上条が離脱し、俺は空に逃げ、高速でその場から離脱した。

晩飯は上条と共に食べよう。いろいろと愚痴りながら……。そう考えていると、

一人の女の子が不良数十人とやり合っていた。しかも、あいつら能力者か！

言うまでもなく、女の子に加勢し、風の衝撃破を集団にぶち込む。数人地面にたたき付けて意識を刈り取り、襲い掛かった奴の右ストレートを捌き、カウンターを腹に入れ、壁にたたきつける。

俺を囲んだ連中は小規模な竜巻で薙ぎ払った。残りは、彼女が倒したようだ。

「加勢していただき、ありがとございます、おかげで骨をあまり折らずにすみましたわ。」

「どう致しまして、ただ、…彼等は能力者ですよね？しかも高Ｌｅｖｅｌばかりで、軽く見積もっても3は越える」

（これがレベルアッパーの力か誰だかしらんが、末恐ろしいものを作るものだ）

「そのことについては答えられませんの。しかし、貴方は何者ですか？」

（ただ者じゃありませんわ、確実にＬｅｖｅｌ５クラス…いや、レベルアッパーを使ったから？）

「……他言無用なら構わない、俺は生粋とはいえんが、Ｌｅｖｅｌ５だ。安心しろレベルアッパーなどに頼ったわけではない。」

「……（レベルアッパーまで！）どういう所が生粋ではないのですか？」

「脳の負担が通常より大きいんだ、使いすぎると動けなくなる、だからだよ。」

「はあ、ではアンチスキルに連絡をしますので、お帰りになられたほうがよろしいのでは、風紀委員ではない貴方がここにいると都合が悪いのでは？」

「助かる。では、失礼するよ」

「あのお名前は？」

「上野高貴だ」

「私は白井黒子と申しますの、では、ごきげんよう」

「またな」

俺は早く家に帰るため、風の翼を広げ、飛翔した。上条はまだ帰ってきてない。……考えないことにしよう。そして、すぐ寝た。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「上野、高貴」

いろいろと怪し過ぎますわ。彼は一体何者なのですの？　７人しかいないＬｅｖｅｌ５とは別の存在…。またわからないことが増えてしまいましたわ。今日は早く寝ましょう。お姉様はまだお帰りになられていないのが残念ですが。

禁書目録（前書き）

ステイル、そしてインデックス登場！

禁書目録

朝起きると、異様に部屋が暑かった。エアコンをいれたはずなのに……。

直感だが、また上条かなと思った。

おそらく御坂が何かしたのかな。はあ、どうしようかな。どっかでまた暇を潰しつつ、涼もうかな…。と考えてると上条の悲鳴が聞こえた。

ベランダから見てみると白い修道服の少女に腕を噛まれて絶叫する姿をさらしていた。

彼女の名前は禁書目録というそうだ。長いほうは説明するのが面倒だ。どうやら魔術師という存在に自身が持つ１０万３千冊の魔導書の知識を狙われてるそうだ。当麻は信じられないという感じだが、彼女の服が魔法で出来ていたため幻想殺しが作用し、通称　歩く教会が壊れ、彼女の肢体が丸見えになった。

……信じざるを得なかった。…うん、あの時は焦ったよ。上条は噛み付かれ、俺は引っ掻かれた。理不尽窮まりないとも思った。

だが、彼女は着痩せするタイプなのか……。いかん破廉恥だ！　忘れろ俺～！

結局、安全ピンで止めることで直したようだ。効力はないがな。

彼女は迷惑はかけられないと言い、出ていってしまった。魔法という馴れない単語を聞いたため終始混乱していた俺達はたちつくしていた。

上条は補修に行き、俺は部屋を出ようとしたが、なにかが落ちているのが見えた。それは彼女のフードだった。

「地獄のそこまでついて来てくれる？」

……冗談でいう言葉じゃない。思い立った俺は一日中彼女を探した。だが、彼女は見つからなかった。

帰り道、当麻と合流した。なんか家の前に機械が集まっている。

そこには、血だらけの状態であの時の彼女が倒れていた。俺達は一瞬頭が真っ白になった。そして、悔やんだ。どうして彼女を止めなかったのかを。

不意に気配がした。振り返るとそこには怪しげな服装の男がいた。

「誰だ！」

「うん、魔術師だけど」

やはりか…。最悪のタイミングだ。

「神裂も派手にやってくれたね、あ、それを持っていたのは君だったんだ。あの子が探していたんじゃないのか？」

言葉がでない。俺がやったことは、裏目に出てしまった。危険を冒して探していたんだ……。

「何が目的なんだよ！」上条が吠える。

「回収だよ」

「え？」

「……彼女の魔導書か」

「そこの君はツンツン頭より賢いようだね、「彼女の頭をどうする気だ」…初見でそこまで分かるとはね、なに、殺しはしない、使える連中に使われる前に保護するだけだよ。」

ものように彼女を扱う、行動を起こすには十分だった。

「てめぇ、何様だ！」

「Ｆｏｒｔｉｓ９３１」

「魔法名であり、」

「殺し名ともいえるかな？」

次の瞬間、炎と鎌鼬がぶつかり合った。しかし、炎は切り裂かれ、鎌鼬は原形を留めていなかった。

「……少しは出来るようだね」

「舐めるな！」

炎と風の円舞、だが、次第に風が炎に飲み込まれていく。

「……俺が操れるのは普通の風だけじゃない！」

炎にのまれたはずの風…熱風を操り、男に向ける。だが、これでは、膠着状態だ。どちらも決め手がない。その場での戦闘が、その余波が上条が飲み込んでしまった。

「…しまった！」

上条を巻き込んで…

だが、俺達の力が霧散した。

これが上条当麻の力。あらゆる幻想を打ち消す人の身に余る能力。

「……魔法にも作用するのか！あいつは」

「一体何が！？」

「……上条！？」

動揺している俺達をよそに、当麻は好機とばかりに魔術師へ突撃した。

魔術師は炎を何度も繰り出すが、当麻の右腕は、存在することさえ許さない。

……勝った。

だが、その油断が戦局を変えてしまった。

ここからではわからなかったが、何かを唱えながら炎を繰り出していたのだ。唱え終えた瞬間、焔の巨人が姿を現した。

上条は迷わずに右手で消し飛ばす……いや、確かに消し飛ばした、だが、消されたはずの焔が当麻を襲う。

「っ！、マズイ！」

慌てて俺は風で相殺する。

「どういことだ？」

「嘘だろ、消したと思ったのに…」

「……ルーン」

「……『神秘』『秘密』を指し示す二十四の文字にして、ゲルマン民族により二世紀から使わる魔術言語で、古代英語のルーツとされています」

彼女の、いや、ぞっとする声が聞こえた。

彼女…なのか、なんで、そんなに冷静なんだ？

「『魔女狩りの王』に効果はありませんこの区域に存在する『ルーンの刻印』を破壊しない限り、何度でも再生します」

「お、おまえ……インデックス、なのか？」

「はい、私はイギリス清教内、第零堂区『必要悪の教会』所属の魔道書図書館です。正式名称はＩｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｎｒｕｍですが、禁書目録でかまいません」

「灰は灰に…」

しまった！意識を

「塵は塵に…」

今は距離を…

「……吸血殺しの紅十字！」

多方面からの攻撃か！

今までとは火力が違う！

巨大な焔が俺達を襲った。

「……まったく、どんだけ危険なんだよ。魔術師は…」

使わない訳には、いかなかった。

三千度の炎をアブソリュート、絶対零度で氷漬けにした。

「な！？」

「…高貴!?」

「……この区域に刻印があるなら全てを取り除けばいい。」

空間把握能力を行使し、目標の数、座標を確認、結果紙製のものと判明、

「くっ！」

巨人がこちらに来る

「させるかぁ!!」

右手で足止めをする上条。

真空刃を形成し、さらに空間移動をさせ、全目標を同時攻撃する！

その瞬間、巨人は霧散した。

「馬鹿な!、能力者は一つの系統しか使えないはず、何をした!」

……今の彼は丸腰だ。だが、力を行使しすぎたせいか体が動かない俺には止めはさせない。

そして、上条の渾身の右ストレートが決まり、魔術師はついに屈した。

禁書目録（後書き）

ダブル主人公体制にしていきたい。

一方通行や世紀末帝王ＨＡＭＡＺＵＲＡも後々出てきます。

ばれていく、いや隠してない、けどきにしないでくれ、出来心なんだ。（前書き

紫穂が風紀入り

前回のは矛盾してました。すみません

ばれていく、いや隠してない、けどきにしないでくれ、出来心なんだ。

俺達は、そのあとインデックスを治療した（使うつもりはなかったが、手遅れになる出血量だったので）。

「……上条、何やらとんでもないことに巻き込まれたようだが。」

「ああ、でも見捨てる理由はねえ」
ここは聞いてみるか。

「……助ける必要はあるのかい？」

「……多分、はっきりした理由はない。けど、インデックスを助けたい、それだけだ。」

「……なら、彼女と話をするんだな、魔術とは何かを」

「……お前はどうなんだ？」

「無論助ける、だがこの町で別のなにかが起こってる、そっちも何とかしないと……」

「……わかった、能力については他言しないし、聞かない」

「すまない」

「気にすんなって、あん時はありがとうな」

「そっちもいいストレートだったぞ」

そんな感じで、次の日を迎えた俺達。

当麻は彼女と話をするため補習をサボるという。まあ、だめだが、それだけ彼女を守りたいんだろうな。あまり他人事に深く関わらないアイツがここまで……。

いい出会いだったかな。だからこそ、あいつらは必ず守る。絶対に！

さて、こちらの問題も何とかしないと。何やらレベルアッパー使用者達が意識を失ったそうだ。

まるで副作用だな、代償がやはりあったか。脳波が矯正されてる形跡もあり、意識が体にない状態らしい。……知ってる理由は聞くまでもないよね。

とりあえず、怪しいポイントを虱潰しに探していくか。

するとビンゴ。
何やら怪しい男共が二人組の女の子に絡んでるではないか。
よく見ると、佐天さんに白井さんじゃないか！

「何をしている」

「！！……上野さん？」
「貴方はあの時の…（なぜここに！）」

「なんだてめえ、ヒーロー気取りか」

鉄骨を超能力で飛ばしてきた。

ザシュッ！

俺は鎌鼬？（鉄を紙のように斬るのはもはやそうとはよばないんじゃ）で斬った。

「高Ｌｅｖｅｌ能力者か」

「……じゃなかったら、死んでるよ。……レベルアッパーに手を出さないほうがいいよ。後悔するから。」

「うるせぇ！てめえに何が分かる！」

「レベルアッパー使用者が次々と原因不明の意識消失で倒れている。それは危険なんだ。」

「うるせえつってんだあぁァ！」

なりふり構わず、物体を投げ飛ばす。

だが、それらを切り刻み、神経活性、肉体強化で高速移動をして一気に距離を詰める。

「な？」

蹴りで壁にたたきつけ、一人、

「あああぁぁ！」

肉体強化が突撃して来るが、腕に纏う突風で薙ぎ払う、

「ぐはあ…」

後一人、

「面白い能力を使うじゃねえか。」

「…そいつはどうも。」

やつが突進してくる。風で薙ぎ払う…。外れた？

後ろに気配がした。振り返ると奴は振りかぶっていた。

「おらあ！」

奴の死角からの蹴りを防御する。

「ちっ！」

どうやら認識をずらしているようだな。頭に作用してないから恐らく、偏光能力者。

「気をつけてください！なぜか、攻撃がズレます！」

「…そうか、なら」

俺は目を閉じた。

「何をしているのですか！目を！」

「馬鹿かてめえは！？」

奴が襲ってくる。視覚を惑わすなら、空間で奴を捕らえる！

ドゴオォ！

「ぐはあ！？」

奴は俺のカウンターで吹っ飛び、意識を失った。

「……大丈夫かい、二人とも？」

「あ、はい！」

「大丈夫ですわ。……一つ聞いてもよろしいでしょうか。」

「…なんだ？」

「あの情報はまだ公表されていません。なのになぜ、貴方は知っているんですの？」

「それは言えない。だが、レベルアッパーなんてものは作れないし、使う気もない、にわかに犯人扱いはやめてほしい」

「……」

「……あの上野さん？」

「うん？」

「……上野さんは能力者なんですか？」

佐天さんが聞いてきた
「……隠していたのはすまないと思っている。」
「……そうだったんですか」
彼女の顔が暗い。まさか怒らせたかな。
その後、アンチスキルが着たので、俺は早々に退散した。厄介なことになりかねない。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　白井

「白井さあ～ん」
上野さんが声をかけながらやってきた。
なぜ、彼女がここにいるかというと、風紀委員に入ったからだ。適正試験に合格し、新米である。
「心配しましたよ。まさか偏光能力者がいるなんて…」
「ええ、でも貴方のお兄様が能力を使って助けてくださいましたの。」
「ええ！お兄ちゃんここにいたの？」
「……ええ、そうですが。風の能以外の力を使ったような……」

「ええ！どんな能力だったの？」

「口外しないでくれませんか、それが約束なので。後、報告書にも書かないように」

「はい」

「……少なくとも能力はＬｅｖｅｌ５クラスの肉体強化と神経活性、後……」

「どうかしたの？」

「いえ、体の動きが妙でしたし、相手を見ずに攻撃しましたの、まるで知ってるかのように。（おそらく空間能力か）」

「そんな……」

「この件は後にしましょう、それよりもこの事件を何とかしないと」

「……はい」

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　紫穂

お兄ちゃんは多重能力者。しかもまだこれら以外に能力を持ってるかもしれない。お兄ちゃん何を隠してるの？

わからない、レベルアッパー事件にお兄ちゃんの部屋の前の火災、そして、お兄ちゃんの力、この町で一体何が起こってるの？

ばれていく、いや隠してない、けどきにしないでくれ、出来心なんだ。（後書き

つかれた

決戦！　デュアルスキル対マルチスキル！　そして……（前書き）

若干御坂が弱くなってる、木山が強くなってるけど、あっけないかも。
御坂ファンのみなさんごめんなさい！

決戦！　デュアルスキル対マルチスキル！　そして……

7月24日いつものような、いや、あんな突拍子もない事件がおきるなんて、想像していなかった

夏休みなので、久し振りにゆっくりしていた。たまにはこういうのも悪くない。レベルアッパー事件の犯人、というか首謀者が何を考えてるかはわからない。木山春生か……。なんか眠そうな顔だな。俺はコーヒーを飲む。あ、ストックがない。はあ、買いに行かないと。外に出て買い溜めしてくるか、夏休みを満喫してないな。そう思いつつ、俺は外に出た。

すると、遠くの方で爆音が上がった……

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ御坂

「早くあそこまで！」
私は運転手に無茶な事を言った
「ええ、お客様？」
慌ててるけど、今はそんな場合じゃない。早く初春さんを……。

ドゴオォォーン！

爆発が聞こえた。何か嫌な予感がする
橋の上で見たのは……。
全滅したアンチスキルと、
静かに佇んでいる木山がいた…。

「驚いたわ、本当に能力を使えるのね、しかも多重能力者」
「その呼称は適切ではないな。私の能力は理論上不可能とされるアレとは方式が違う。いうなれば多才能力者(マルチスキル)だ」
そういって木山はこっちに向かって地面を切り裂いた
「呼び方なんかどうでもいいのよ。こっちがやる事に変わりはないんだからぁ！」
そういって私は木山に向かって電撃を落とす
しかし木山はシールドのようなものでそれを防ぐ
「どうした、複数の能力を同時に行使する事は出来ないと踏んでいたのかね？」

「拍子抜けだな・・・レベル5とはこの程度のものなのか？」

そういって木山は突風に乗せて、凄まじい切れ味の氷の刃を放ってきた。

マズイ、防ぎきれな…

ドゴゴゴゴオォォーン！

視界が真っ白になりながらも、何とか意識を保つ。

橋は破壊され、私達の戦いは橋の下に移った。

「たいしたことがないな・・・レベル5とは本当にこの程度のものなのか？」
その台詞を聞いた私は怒りながら磁力で瓦礫を飛ばす
しかしそれはライトセーバーのようなものに簡単にあしらわれた
「アリ？」
そのあとすぐ木山は私の張り付いていた柱にビームのようなものを撃つ
すると柱の表面が崩れ私と一緒に落ちてきた
「えええ～！？」

やば、足場が……！

落ちる、と思ったら誰かが私をお姫様抱っこしていた。

目を開けてみるとそこには、あの時の風使いがいた。
ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「大丈夫か？御坂！」

「ええ、ありがとう、助かったわ、って、早く下ろしてよ！」
まあこの格好はいかんな。

「すまない」
そうやって彼女を下ろす。

「さて、貴女が木山春生ですね」

「……何者だ」

「ただの学生だよ」

「……なら、ここから立ち去ったほうがいい。」

「残念だが、それは無理だ、知り合いが戦ってるんでね」

「そうか、なら無事に帰すわけにはいかないな」

「だったらこちらは貴女を捕まえ、アンチスキルに引き渡すだけだ」

木山が雷撃を放つ。俺は真空に誘導し、その攻撃を無効化する。

「風使いか、厄介だな」

「気をつけて！ソイツ、複数の能力を使える！」

木山が水圧を使って攻撃してくる。風のバリアを展開する。

水の波状攻撃か、まさか！

「……遅い」

電撃を放つ、水流を防いでいる時に真空は作れない…！

「ぐっ！」

雷撃を少し喰らい、体が痺れる……。

「……もう止めにしないか？」

木山がそんな事を聞いてきた

「私はある事柄について調べたいだけなんだ。それが終われば全員解放する」

木山は続ける

「誰も犠牲にはしない・・・」

「ふざけんじゃないわよ！誰も犠牲にはしない？あんたの身勝手な目的にアレだけの人間を巻き込んでおいて、こんな事をしないと成

り立たないロクなもんじゃない研究なんて見過ごせるわけないでしょうが！」
すると木山がため息をつく
「レベル5とはいえ所詮は世間知らずのお嬢様か」
「あんたにだけは言われたくない台詞だわ・・・」
「そちらの君はどうだ？」

「事情は後でしてもらうよ。だから…」

「もう、出し惜しみはしない！」
一気に終わらす！

バチバチバチィ！！
「え？」

御坂には後で説明するか、彼女は能力もだが、油断もしてない。本当に厄介だ。

雷撃＋突風＋水流！
力で押し切る！

木山は防げないと見て、グラビトンの爆風で威力を和らげ、バリアでダメージを軽くする。ダメージはあまり通ってないが、これが俺の本当の狙い、瞬間俺はテレポートで一気に間を詰める。
「くっ」

驚いた木山は風の刃で俺を攻撃する。だが、刃ごと転移させる
「そんな!?」

「とどめだ、」
右手に雷を集め、スタンガンのように突く。
「うわあぁぁぁ!」
悲鳴を上げながら、崩れ落ちる。

その瞬間俺の頭にビジョンが浮かぶ、なんだこれは……。木山がいた。今より髪が短く、隈が出来てない。……これは学校か？　子供達との交流か……。変わって研究所…。子供達かが実験体になって……なんだこれは!?次々に苦しんでいく子供。
怯える木山……。俺は怖くなって手を離した。

「観られた・・・のか・・・!?」
そう言って能力を使い炎を出そうとする。
だが、もう能力を使える状態ではない。
「ぐっ!」
というううめき声をあげ能力は解除される

「なんだあれは……実験?」

「あの実験の正体は暴走能力の法則解析用誘爆実験・・・能力者のＡＩＭ拡散力場を刺激して暴走の条件を探るものだったんだ・・・あの子達を使い捨てのモルモットにしてね」

「そんなことを…だがアンチスキルは?」
「２３回」

「え？」

「あの子達の回復手段を探るため、そして事故の原因を究明するために樹形図の設計者の使用を申請して却下された回数だ・・・統括理事会がグルなんだ。警備員が動くわけがない」

「それでも！」

「君に何が分かる！」

「なっ！」

「あんな悲劇、二度と繰り返させはしない！そのためならなんだってする」

木山は叫んだ

「この街すべてを敵に回しても止まるわけにはいかないんだッ！！！」

その瞬間

木山に異変が起きる

「ぎっあぁ・・・あああああああああ」

木山は断末魔のような悲鳴を上げた。

「ガッ……ぐ……ネットワークの暴走？いやっ……これは…ＡＩＭ…の」

木山が今度こそ倒れた。

ドクン、寒気がした。何か、まがまがしい感じが……。

木山の背中から胎児のようなものが出てきた。

「あ、ああ、ああ」

「……なんだあれは、グウッ！」

頭に激痛がした。く、こんな時に！

「え、ちょっとどうしたのよ！」

「力を使いすぎた……だが、まだいける。」

本当の戦いが始まった。

決戦！　デュアルスキル対マルチスキル！　そして……（後書き）

あの胎児です。大分乖離してしまっている。

天上の力の片鱗（前書き）

ついに天使の力発動。

天上の力の片鱗

状況は最悪だ、正体不明の胎児にこちらは手負いの状況、御坂は見慣れないものを見て少し動揺している。

「キィィアァァァァ！」

木山の比ではない衝撃波が俺達はを襲う。

「くそっ！」

「ちょっ！」

俺は御坂を掴んで、テレポートで離脱した。

が、怪物の近くに女の子がいた！

「マズイ、」

「初春さん！」

「おいっ？！」

御坂が前に出て、初春に迫る触手を雷撃で焼き切った。

すかさず、俺は二人を掴んで肉体活性で飛び上がり、その場から離れる。

だが、

「何としてもここで食い止めろ！」

アンチスキルが満身創痍であるにも関わらず、行動を起こしている。

だが、

「ぐわあぁ！」

リーダー格の女がたたきつけられる。

隣にいた女性に触手が迫る！

反動で、うまく体が動かない……

ズキュゥゥーン！

御坂が間一髪、雷撃で焼き切った。

「……て、なんで一般人がここに危ないで「それ、貴女が言うの？」う、」

「ここは私達に任せて逃げてください！」

「黄泉川先生！？」

「小萌んとこガキじゃん……だが、それがそういう訳にもいかないんじゃんよ。あれは見えるか？」

「え、何？」

「……原子力発電所だと…」

青ざめてしまったあんな得体の知れない奴が行けば……。
「……ここは私に任せてください！」

「御坂！」

「あんただって立ってるのがやっとなんでしょ、だったら私が行くしかない。」

そういって彼女は向こうにいってしまった。

「くそっ」

「フラフラじゃんよ、無理したら…「御坂を一人で行かせる訳にはいかない！」」

動けよ、俺の体だろ……。

足がまともに動かない、能力を出そうにも全身の激痛でうまく出来ない。それでも、
「無理したらいかんじゃんよ！」

黄泉川先生が俺を抑える。

助けて、
え？なんで声が、怪物の中から？

またビジョンが浮かぶ、それは、力を得られずレベルアッパーに手をだした人の記憶が流れてくる……。みんなの悲しみと怒り…。

能力によってこの町に格差が、差別が生まれていた。

彼等は、その被害者。ある日突然力が使えるとなれば、手を出さずにはいられない。

しかし、それは仮り初めのまがい物だった。

俺には、彼等の苦しみの、断片しか理解はできてないだろう。

だが、

目の前で誰かが泣いてる、それだけで十分だ。俺は立ち上がった

「なにを「黄泉川先生」」

「あそこで大勢の人が泣いている、悲しんでいる、だから俺はいくんだ」

「だが！」

「それでも、傷ついてる誰かを助けることは、絶対に、間違いなんかじゃないんだ！！」

誓ったんだ、あの時、俺は！

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ御坂

アイツにばかり負担をかけるわけにはいかない。今度は私が！

電撃を放ちながら、原子炉から離させる！

電撃は当たるが、その度に再生し、大きくなっていってる。

「！！……効果が薄いなら、無理矢理退かすまでよ！」

「ガアアアァァァ！」

レールガンを乱発し、怪物を吹き飛ばす、距離は離れたけど、決定打には至ってない。

「ただ攻撃しても意味がない！」

木山が叫んできた。

「ちょっと、危ないわよ！ここにいちゃ！」

「かまわない……アレを生み出した責任は私にある。私はどうなっても」

「私は見ていないからわからないけど、あんたはよくても教え子たちはどうすんのよ。仮に回復してもそのときにあんたが居なきゃ意味がないわ」

「……力場の塊を自立させている核のようなものがあるはずだ……それを破壊できれば……」

でも、実際問題それがどこにあるかわからない。相手の弱点がわからないうえでの戦い、これじゃ消耗戦じゃない……っ！！
触手に足を捕えられてしまった！

「しまっ！」

そのまま地面にたたきつけられ
「がぁっ！」

マズイ、攻撃が飛んでくる！

やられる……！

その時、突風が怪物を襲う。

後ろを振り返ると、立っているのも苦しいはずのアイツが立っていた。

なんで？

なんでであなたが頑張るのよ、貴方はこの事件で力を使う理由はないはずよ！それにもう限界なのに……。

「どうして…」

「え？」

「どうして、アンタはそこまで頑張るのよ！アンタはもうボロボロ

じゃないの！そもそも、アンタが関わる理由はないはずよ！」

「…そうだな、ただ俺は、目の前で傷ついてる誰かを助けたい、ただそれだけだ」

何も言えなかった、そう言ってアイツは化け物の前にたった。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ

「……力を得られず辛かったんだな、悲しかったんだな、でもな、力だけが、全てじゃないんだ！だから、世界を恨むな！　自分を責めるな！　例え力がなくても、世界にはまだ、救いがあるってことを今から教えてやる！」

「行くぞ！歯を食いしばれよみんな！……すぐに質の悪い夢からたたき起こしてやる！！」

「キイィアァァァ！」

「うおぉぉぉ！」

風を使う、すると痛みが走る、だが、それがどうした、俺は彼等を助ける！　絶対にだ！

膨大な風でできた嵐で、彼らを抵抗すら許さず動きを止める。

さらに激痛が走る、

だが、止まらない。
完全に動きを止める！
絶対零度！

「ぐはあ！？」

吐血までか、それでも！
ヒュオォォーン！

彼等は完全に動きを止めた。

「だが、どうやって彼等を救う？核を壊せば解放されるかもしれない、だが、あれは彼等の思念体だ傷つけしまえば…」

「安心しろ、手はある」
根拠はあった。だが、言葉でうまく表現出来ない。

「ｄｐａ.ｊｇｍｄｂｕ.ｊｇｍｗｐｕ.ｊａｇｍ」

何をいってるのか自分でもわからない

俺の背中に白い翼が顕れた。途端に痛みが消えた。

「ｐａｇｍｐｇｄａ．ｍｐｘｔｋｇｐｔ.ｊｇａｆｍｐｗｇｋｗｐ、届けぇぇ！」

翼をはためかせ、彼等のもとへ！

彼等に触れた瞬間、彼等が光り輝いた。そして、粒子となって、だんだんと霧散していった。

「よかった……。」

全てが終わったんだ。

そう思ったら、力が抜け、激痛が再び襲う。そして俺は、意識を手放した。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　御坂

何が起こったのかわからない、

彼の生き方も、力も、理解できない。だけど、なぜか綺麗と思ってしまった。

「アンタは逃げないの？」

「・・・いや、ネットワークを失った今警備員から逃れる術は私にはないからな」

そう答えた
「だがあの子達を諦めたわけじゃない。もう一度最初からやり直すさ。どこだろうと私の頭脳はここにあるのだから・・・」
ただしと最後に付け加える
「今後も手段を選ぶつもりはないぞ?気に入らなければそのときはまた邪魔しに来たまえ」
あんたねぇ・・・
と御坂は呆れていた
そして木山を警備員に引き渡してこの事件は解決した
そのあと黒子と上野さんがタクシーでやってきて

「お姉様!」

「御坂さん!」

と駆け寄ってきた。

「ケガはありませんの?」

「大丈夫ですか?」

「ええ、でも、アイツが……。」
私は倒れてるアイツの方を指す。

「お、兄ちゃん?なんでここにいるの!?」

「あの方は……」

上野さんは、アイツの方へ駆け寄った。生きてはいるけど、その顔

が死んでるかのように白くて、直視出来なかった。

結局、私は何も出来なかった、Ｌｅｖｅｌ５だから大丈夫だとどこ
となく思っていた自分が嫌になった。

だけど、なんで他人のために頑張れるんだろう。でも、なんか、か
っこいいな。

彼女は、知らない。なぜ、彼がそのような生き方を選んだのかを。
そして、その生き方が、どれほど歪んだものかを後に知ることにな
る。

天上の力の片鱗（後書き）

御坂のキャラがおかしくなっている。

何とか違和感をこれから消していきたい。

幕間　計画者の思惑（前書き）

今回、黒幕思考の彼とにゃーが討論会をします

幕間　計画者の思惑

ここは、窓のないビル。その建物はあらゆる兵器の攻撃を防ぎ、超能力を行使しても侵入が難しい場所。そこに二人の人影があった。片方は、巨大な容器の中に入っており、逆さの状態で存在していた。何やらチューブなどを付けていて、人間の形をしたものともいえる。容姿は、大人とも老人とも、いや子供と見間違えるのかもしれない。

もう片方はどう見ても場違いな格好をしていた。髪の毛がツンツンしており、金髪で、アロハシャツを着ている。端から見ると、こちらも変わっている。しかし、前者ほどではないが。

「……アレイスター、あれはなんだ？」

「あれとは？」

「決まっているだろう！上野高貴が使ったあの力についてだ！」

「アレか……そうだな、彼は能力者だよ」

「ふざけるな！通常、人は能力を複数持つことは出来ないはずだ。だが、アイツは複数の能力を行使し、使うものは、全てＬｅｖｅｌ５クラス、しかも最後には正体不明のテレズマに似た力を使った！これで聞くなというのが無理な話だ！」

あの四大天使に似た力。そして、それらに同等の力と純度。あれは一体？

「…君も少しは想像出来ているのだろう、ならば、その答えに近づく為にヒントでも提示しておこう」

「……」

「そう睨まないでくれ。そうだな、彼が普段行使している力は真の力においてはただの副産物であり、取るに足らないものなのだ、寧ろ力の使い方が非効率であり、不安定なものでもある」

「……お前の前では、Ｌｅｖｅｌ５の力さえ取るに足らんか」

「事実だから仕方なかろう、」

「……」

「四大天使を超えた、神にも等しい力を持ったものと言えば分かるかな？」

「っ！……まさか、『光を掲げる者』か？」

「ふむ、」

「……こんなことが知られたら、魔術側は黙ってないぞ、世界を容易にとれる存在が学園都市にいるとしったら……」

「あれが力を制御出来るようになれば、魔術師も聖人も相手にはならんよ、今の段階でも、一握りだろう」

「今回、俺が結界を張らなければ、戦争が起こっていたぞ、知っているだろう、俺があまり魔術を行使出来ないのは。」

「まあな、だが、君がそうすることも計算出来ていた。戦争の危険性を前に君が躊躇わないはずがない」

「……貴様の掌で俺も奴も躍らされていたわけか、だが、またアイツは目覚めるぞ、その時はどうする？」

「それこそ愚問だ、私が、他の勢力に、彼が捕えられることを許すはずがなかろう、まあ、Ｌｅｖｅｌ５のデュアルスキルならたとえ聖人でも、遅れを取ることはありえんだろうしな。」

コイツやアイツの前では、聖人は足元にも及ばんらしい。

「だが、プランを瓦解させるかもしれんぞ。」

「その心配はない、彼は幻想殺しのスペアだ、さらに彼は行動パターンを予測することが容易だ、少し事件を起こせば、彼は迷わず飛び込むだろう、その時に自然と力の制御も覚えていくだろうしな」

「他勢力になびく可能性は？」

「心配ないだろう、足枷に幻想殺しに禁書目録、この学園の学生とも交流を持っている、なびこうにもなびけないだろう、彼の信念が邪魔をするのだからな」

「……あくどいな、アレイスター。だが、この先どうなるかはわからんぞ、そのことを肝に命じておくんだな、」

そう言って俺は、ここから出た。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

side

「……確かに万が一ということもある、だが、」

世の真理とはそういうものなのだが、彼の意志は固いのだ、血によってな。

「彼が自分の信念を曲げない限り、それはない」

私は笑みを浮かべ、

「他者を救うため、自分を省みずに迷わず行動する、か、本当に滑稽な道化だ」

くだらない考えだ。そんな幻想はいつか壊れる。その先の運命で待っているのは、

「……絶望と破滅、君はどちらの運命を辿るのかな？」

幕間　計画者の思惑（後書き）

やばい、主人公のモデルがまるわかりだ。

彼は好きだが、どうハッピーにさせよう？

というかどうすればいいんだ？

次は、病院からかな？

堕天使の願いとある魔術師（前書き）

やっと禁書です。
神裂さんがでます！

長いです

目が覚めると、ここは病院だった。目の前には、……

うん？

布団の中に紫穂がいた。

「うわあぁぁぁぁ！？」

なんでだ、ベッドで寝るのは、椅子じゃしんどいからそこは認めるとして、布団の中に入るんなんて……。

こんなとこ誰かに見られ・た・ら？

俺の前に義妹一筋と電撃姫、その後輩と友人がいた。

終わった。社会的に俺は殺される。

「やはり、コーヤンは俺の同類かにゃ～？」

「違う！」

「じゃあ、なんで上野さんが中にいるのよ？」

御坂が黒いぃぃ～！

「紳士だと思っていましたが、」

うわあ～！　信じてくれ～白井～！

「男の人って……」

佐天さんも信じてくれないのかァ！

「佐天さんはこんな人に助けられたの？」

とどめキタアァァ！

「なんかもう、起きた早々死にたい、なんで紫穂が布団の中にいるんだよ、どうして本人の主張を聞かずに決め付けるかな？こんな雰囲気嫌だ、ああ、もう、これは夢だ、寝たら大丈夫、全てなかったことに……、」

「……本当に何もなかったの？」

御坂が聞いてきた。

「当たり前だろ、なんで妹に手を出す兄がいる……」

「疑って御免ね。」

「何もないのかにゃ～、つまなんないにゃ～」

「「疑ってすみません」」

「正常な方でしたの」

最後は余計だ！

「みんなで揃って見舞いか？」

「ねえアンタ、もう大丈夫なの？」

「痛みはないよ」

「あの、あの時はありがとうございます」
花飾りの女の子がお礼をいってきた。
……この子は、あの時の。
「どういたしまして」
「私のことはすぐに思い出さなかったのにね。電話も出なかったし、」
黒い笑みを浮かべた紫穂がいつの間にか起きていた。あの時の可愛い彼女は何処へ……
「申し開きもありません」
だが、あのあとは…
「……あのあとどうなったんだ?」
花飾りの子が説明してくれた。

「えーと、君は…」

「初春飾利です！」

「へえ、珍しい名前だね、……そうか、みんな元気になったんだね、……本当によかったよ」

ホントによかった。彼等もちゃんともう普通にくらせるんだな。

「他人のことなのに家族を心配するようですのね、」

「そいつは言い過ぎだよ、ただ俺は、彼等が無事であることを喜んだだけだよ」

御坂と白井、初春さんに佐天さんが何か、やはりという顔をしていた。

どうしたんだろう？

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　御坂

やっぱり、なのね。この様子を見る限り、あながち間違いじゃないのね、上野さんの話は、

回想

「なんでアイツは他人のためにここまで……」

「御坂さん……」

「お姉様……」

「上野さん、どうしてなの？」

「それは……」

「本人の口からは酷ですよ、御坂さん」

「え？」

「……私から言うわ、初春さん」

「え、でも」

「…貴女に負担はかけたくないわ」

「……わかりました、」

彼女の口からは、信じられないことばかりだった。

ある日突然自分の町が消滅、妹以外の家族を失い、友達も目の前で死んだなんて……。

私は多分堪えられない。

「ここからは、あくまで私の推測なんだけど、…」

彼が死んだ人の命を背負おうとしているのではないか、この身は誰かの為にあらねばいけないとか。なぜなら、自分だけ生き残ったから。正確には、自分だけ生き残ってしまったから……。そんな風に考えたから、ここまで……

「そんな馬鹿なことを……」

黒子が信じられないという顔をしている。

「おかしいですよ！そんなの…」
佐天さんが声をあげる

「彼のせいではありません、でも、そうでも思わないと心の整理が出来なかったのかも、」

初春さんが付け足す。

「……でも、こんな生き方をし続けたらいつかは……」

現実は空想ほど優しくない。だから、

上野さんが口を開いた。
「……限界がくるわ、誰かを救えずに絶望するのか、救ったとしても彼が破滅するか、はたまた両方なのか……」

人を救えば救うほど、人数も増えていく。だから、いつかは絶対数に届いてしまう。そして、無茶をして誰かを救い、傷ついても、またすぐに誰かを救うのだから。そして、傷付き続ける。

そんな救えない人生なんて……

「上野さんは止めないの？」

「こんなことで悩んでるそぶりを今まで見せなかったんです。ですが、これからは言い続けますけど、」

私たちは呆然とするしかなかった。

現在

彼の笑顔は女の子なら、ドキッとするだろう。でも、喜んでる内容と彼の過去を考えると不気味だった。

何か言いたい、でも何を言えば……

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ

何かみんな様子がおかしい。また俺は何かまずいことでも言ったのかな？
人の幸福は喜ぶものなのに。
ここは突っ込まない方がいいのかな、そうこうしているうちにドアがからノックがした

「どうぞ」

「目が覚めたようだね」

「はい、おかげさまで、」

「君の場合は特殊だったからね、脳と身体へのダメージがイマイチよくわからなかったよ、まあすぐに回復したのにはもっと驚いたけど」

「じゃあ退院出来るんですか？」

「君が望めばなんだけどね、医者としては、もう少し休んだほうがいいとは思うんだけどね」

「お心づかい感謝します、しかし、俺はもう大丈夫です」

「そうか、なら私は何も言わないよ、お大事にね」

「はい！」

みんなは、まだ変だ、

「……心配すんなって！俺は大丈夫だよ、それに何辛気臭い顔してるんだよ、」

「あ、御免ね、ちょっとね、無事だったから少しほっとしたたけ…」

「コーヤン、またか」

「……またとはなんだ」

「この無自覚ジゴロがあぁ！」

「知るかあぁぁ！」

「……それそろ私たちは帰るね」

「……そうか、またな」

「「「さようなら」」」

「またね、お兄ちゃん」

「ごきげんようですの、」

彼女らは帰っていった。

あれ？
なぜ土御門は帰らないんだ、

「土御門？」

「……コーヤン、無茶だけはすんなよ、みんなが悲しむんだからな」

「だいじょ「その自己犠牲精神をどうにかしないと安心出来ないんだかな」え？」

「多分彼女達も気づいているんじゃねえか？」

「……そうか」

「わかっているだろう、行き着くところは…」

「限界はあるよ、でもそれまでは確かに誰かを救え」バキッ！！「っ！！」

土御門が殴ってきた。怒った顔で、

「自殺願望者かお前は。残された人はどうなる、お前ほどじゃないが、同じ思いをさせる気か？」

「……」

「おまえに一つ教えといてやる、自分を省みない奴に人は救えない」

「だが、」

「あれはお前の自己満足だ、本当に助けたいなら、助けようとしている奴の事を考えるんだな、」

そう言って出て行った。

「自分を大切にしろ、か」

でも、俺は、下手だから。そんな風にいろいろと考えれないんだろう、だが、俺にも土御門の言う事は分かる。……それでも、全力で誰かを救う事は間違いではないはずなんだから。
俺はその後、退院し、家に帰るため病院を出た。

その帰り道

なんだ？　この感じ…　気配が消されてるような……
っ！！

そこには、肩で息をしている上条と、

「……また魔術師か、」

独特の、いや、恥ずかしいジーンズの形に白シャツ、ずいぶんとふ

ざけた格好だ。

「……魔術師ってこんなんばっかだ。」

基本痛い人ばかりなんだ……。あ、インデックスは違うよ。というか、俺が認めん、あんないい娘があんなふうになってたまるか！

聞こえたのか、斬撃を飛ばしてきた、

「恥ずかしいとは何ですか！それに痛いとか！」

「高貴！？ダメだ！逃げろ！」

ただ漏れだったか。気をつけよう、

「……またインデックス絡みか、」

「はい、彼女を保護しに「よく言うよ保護対象の背中を斬ったのにね」……」

「こちらは穏便に事を済ましたいのですが…」

「いや、無理だね、そちらの穏便がこちらでは意味を成していないように見える、……貴女は信用出来ない、」

「……使いたくないのですが、」

「なに？」

「魔法名を使いたくないのですが、そちらの少年には行ったはずなのですが、」

「聞く耳持たんな、」
ザシュッッ！
斬撃がくるがサイドステップでかわす。肉体強化と神経活性は使うまでもなかったが、

「……一つ聞くなら、ならなぜ、当麻を殺さなかった、あの神父もどきは躊躇いもなく殺しにきたが、」

「私は不殺を信条としています、だか「だったら、なんでインデックスを狙うんだよ！？」」

「てめえは俺と違って強いんだろ、それに、人間らしいとこをまだ持ってんだろ?なら、彼女を救うために使えよ、テメエは、なんでそんなに無能なんだ!?」

「当麻……」

「私だって、」

「え?」

上条の動きがとまる

「私だって、あの子を傷つけるつもりはなかった、結界が作用してると思ったから……」

彼女はナニヲイッテイル?

「私だって、好きでこんなことをやっているわけではありません」

「けど、彼女はこうしない生きられない、」

「何を言ってんだ?インデックスが死ぬ?」

「完全記憶能力を知っていますか？」

「インデックスの知識の事か」

「だが、完全記憶能力だけで、っ！」

まさか……

「はい、魔道書の知識が彼女を蝕んでいるのです、通常とは違う知識だから、」

「……貴女は、一体、彼女の何なんですか？」

「彼女は必要悪の教会の私の同僚にして、……私の……親友です。」

堕天使の願いとある魔術師（後書き）

主人公での無双は避けたいので、こんなふうになりました。

上条は無事に乗り切るのか？

堕天使は彼を救えるか？

偽りの真実と終焉（前書き）

一巻が終わる。長かった。

さあ、上条達は、インデックスを救えるのか！

彼女は今、何と言った？　親友？　同僚？
ならなぜ、インデックスは彼女は覚えてない？

「まさか、記憶を！？」

「はい、私が消しました」

なんだって！？
「どうしてそんなことを……」

「彼女は一度見聞きしたものを忘れることが出来ません、だから知識によって脳が圧迫されるのです、
脳の容量は意外に小さい。魔道書の知識に全体の８５％を使い、１５％しか日常生活で使用出来ない身体になっているんです、彼女は、」

「……」
なんだ、それは？

なら、
「……彼女の限界はいつなんだ？」

「三日後です、一年周期で、それを行います。…ちょうどでないと、消せないんです」

……もう時間が残されていない。

「何か方法はないのか？」

すると、彼女は目に涙を浮かべて
「私だって！ステイルだって頑張りました！でも、だめだったんですよ！あらゆる手を尽くしても……でも責めて、あの子には生きていてほしい！、だから！」

何かないのか？　解決策を……

「学園都市の技術なら……」

「……それも考えました、わらにでも縋る思いで。でも、絶対に無理ですよ、第一、魔術によって侵されている彼女の身体を診ても、何が分かるんですか？」

「く……」

本当に何かないのか……あっ、

気になってはいた、魔術という不確定要素では、どうかはわからない、だが、ぶつけてみる価値はある、

「なあ、それを言ったのは、誰ですか？」

「え？…イギリス清教の最大主教です」

「そいつに脳科学の知識はあるのか？」

「え？」

「脳というものは、いや、記憶は一つじゃないんだ、本来は言葉や知識を司る『意味記憶』、運動の慣れなんかを『手続き記憶』、それと思い出を司る『エピソード記憶』ってのがある、まあ、まだあるがな」

「……お前、なんでそんなことを知ってるんだ？」

「興味があったからいろいろとかじった」

当麻が唖然としてるが続ける。

「つまりだ、それぞれの記憶の入れ物が違う、例えば、記憶を失っても、赤ん坊の頭には戻らないだろ、彼女がもし、全てを忘れてるなら、そうなっていたかもしれないが、」

「一体どういう？」

「結論からいうと、どれだけの知識を覚えても、入れ物が決まっているから、他の記憶を圧迫するわけがない。まあ、彼女が人外のものなら別だが、彼女は魔道書以外は普通の人間なんだろ？そもそも、記憶を簡単に八割やら二割やらで表すなんて無知も甚だしい、」

「じゃあ、一体なんで……まさか！」

「……恐らく、何か魔術で細工されているのだろう、最大主教とやらの真意は解らんが、これなら全てのピースが繋がる、」

「そんな、じゃあ私達がしてきたのは……「だが、無駄ではない」
え？」

「……確かに真実には、辿り着けなかった、だけど……それでも
彼女を今まで影ながら守ってきたんだろう、そこは、…誇るべきだ」

「ですが……」

「重要なのは今だよ、しのごの言わず、やらりゃあいいんだよ、幸
い、こちらにはどんな力も打ち消す力がある、…彼女はもう記憶を
消さなくて済むんだ、……一緒に彼女を救おう、今度こそ、ハッ
ピーエンドで！」

「っ！！……はい！」

……泣いてるけど、……嬉しそうだ、少し前まで対峙したのが嘘の
ようだ。

「この方法はお前にかかってる、頼むぞ、上条！」

「ああ、任せろ！」

これでまた誰かを救える、その時俺はそう確信していた……

その時は誰もが安心していた、上条も彼女も、後で話をするであろうあの神父も多分そうだろう……。

まさか、待っていたのがあんな結末だとは。

その後俺達は、ステイルという、あの神父もどきと合流した。最初は敵意剥き出しに襲い掛かってきたが、彼女が止めに入ってくれたから、事なきを得た。それに、話を聞いて納得もしてくれた。彼の嬉しそうな顔は、第一印象とは大分違う。

聞くの忘れてたけど、彼女の名前は、神裂火織というそうだ。

俺達は、インデックスのいる小萌先生の家に向かった。

なぜ、先生の家かというと、上条や俺の部屋はいつ襲撃されても、

おかしくない。だから、先生のところがあの状況では一番安全だった。
最初は俺達も躊躇ったが、襲われた直後、路頭に迷っていた俺達に声をかけ、事情も聞かずにとめてくれたのだ、確率論でも、彼女の安全を考えたら乗るしかなかった。

インデックスは俺達を見て、最初は驚いていた。だけど、これまでの経緯を話したら何とか信じてくれた。

そして、いざ行動に移すのだが……

上条が躊躇っていた。

「どうした？」

「いや、彼女のまだ触ってないとこに多分術式があると考えてると……」

「心配するな、変な所に触って効果がないなら、殴るだけだ。」

「右に同じく、僕は君を焼き殺す」

「そんな／／／／破廉恥な事を考えてるんですか！」

「だって、触ってない所に術式があるというのはそういうことだろう／／／／だったら一発でやってやる！」

そう言って当麻は、喉の奥に手を入れた。彼女は今魔法で眠ってるので、あまり暴れない、上条は止まる、そして……

パチン！

何かが砕ける音がした、

バキン！

上条が後方へ吹き飛ぶ、

「なんだ？」

「あれは！」

「魔法だと、馬鹿な！彼女は魔力を持っていないはず……」

そこには真紅の魔眼を宿す、自分達が知らない彼女が存在していた。

「……『書庫』内の知識により、防壁に傷をつけた魔術を逆算……不明。該当する魔術を特定に失敗。かの術式の構成を暴き、対侵入用の特定魔術を組み上げます。」

「侵入者に対し、有効な魔術の構成に成功、これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動、目標を駆逐します」

ゴオォォォ！

彼女の周りに力を感じ、俺達に理解できない何かを唱える。……あの時の俺とは違う何かを。

その瞬間、巨大な光が襲う！

直感で感じた、当麻の右手では消しきれない！

なら！

ボワアァ！

俺の中の何かが目覚め、その瞬間、背中に翼が顕れ、こちらも巨大なエネルギーで対抗した。

ドゴオォォォ！

激突する二つの力、

「『竜王の殺息』！？そんな！彼女は魔術を仕えないはずなのに……」

「セキュリティに全部回ってるんだ！あっても使えなかったんだ、抵抗しないように！」

上条が叫ぶ、

「あの女狐め、とことこんふざけているな、」

「ａａｐｇｍｇｍｗｌｂｇｐ！はやくしろ！ｐｕｐａｇｋｍｇｂｅ

ｐｍｘ！俺が防いでいる間にインデックスを！」

「テレズマ！？貴方は一体……」

「ａｇｐｔｐｇｕｈｌｍｙｐｊｇａｅの説明は後だ、上条を援護してくれ！」

「っ！わかりました！」

「ｙｊｎｑｈｔａｂｍｄｎｆｄｍｔｊｍｗｇｊｑぁぁ！」

光を相殺させる！

その瞬間中央に取り残された力の残滓が上空に舞い上がった、バキバキバキバキ！　ドゴォ！

天井も屋根もぶち抜いたようだ、その時周りに白い羽が舞っていた。

「『竜王の殺息』は危険です！いかなる力があるとはいえ、触れてはいけません！」

彼女より前に攻撃し、反撃を許さない。だが、ことごとく防がれあしらわれる……。

コンマの世界で僅かに遅れを取り、今度はこちらが防ぐ側になる、
その時、

「魔女狩りの王！」

「行け、能力者」

「当麻！頼む！」

「警告、新たな敵を確認。戦場の検索を開始し、戦闘思考を変更、
完了、最も危険性の高い、『上条当麻』、『上野高貴』の破壊を優
先」

上条を閃光が襲う。だが、俺とステイルで迎撃する！

俺は光で、ステイルは炎剣で薙ぎ払う、そして、上条の道ができた。

上条は駆ける、インデックスの元へ…

だが

「ダメです！上ぇぇ！！」

神裂が叫ぶ、

釣られて見ると当麻の頭の上に今にも羽が落ちそうではないか！

「待て！当麻ぁぁ！」

だが、上条は気づかず、迷いなく、インデックスに右手を振り下ろす、

そして、魔法陣は破壊され、

「……け、い、こく。『首輪』、に、致命的、な、はか、い再生、不可……」

彼女は呪縛から解放された。

その時、あの白い羽が当麻の頭に落ちた。

バチィィィン！

あのインデックスの術式に触った時とは違う音がなった。

崩れ落ちる上条当麻。そして、解放されたあの少女を守るかのように覆いかぶさって倒れた。

上条は動かない。

声が出ない。目の前の事が信じられなかった。

さらに羽は彼に舞い落ちる。

……俺はまた、……守れなかった。見殺しにしたんだ。親友を……

その夜、俺が知っている上条が死んだ。

偽りの真実と終焉（後書き）

やはり、記憶を消しました。上野君には残念ですが、仕方ありません。

次は日常編かな

少年は道化を演じる（前書き）

今度こそ、一巻が終わります。

少年は道化を演じる

あのあと、俺達は、急いで病院に向かった。上条は意識はなかったが、息はしている。これでも死体と生きてる身体の区別は出来る。インデックスは神裂に任せ、俺の部屋で休ませてくれ、と頼んだ。神裂は引き受けてくれて、送り次第、合流すると言い、別れた。

病院に着いた俺達は、上条の診察と治療を求めた。

すると、カエル顔の医者が治療を引き受けてくれた。

俺達はその後、合流した神裂から、責任を持って部屋に送り届けたと言い、鍵を帰してくれた。ステイルがもう今日はやることがないから失礼すると言い、神裂を連れてどこかに消えた。一応、感謝はしているが、これで終わりではないぞと言う言葉と手紙を残して……。

検査と治療が終わり、医者が出てきた。すると、俺に事の経緯を聞かれた。

「いや、あまりに突拍子もない事なので……」

「それでも、何か分かるかもしれない、話してくれないかい。診察結果がこちらも首を捻るばかりなのでね。」

仕方なく、これまでの経緯を説明した。医者はこちらの予想とは違い、すぐに状況を飲み込めた。

その反応は不気味だった。まるで、魔術というものを知ってるかのようにな……。

「先生はなぜ、こんな話を簡単に信じるんですか?真逆のものなのに」

「案外、そうでもないんだよ、もちろん幽霊が病院にでるとかじゃない、宗教によって、治療法も制限されるのさ、オカルトはね、こちらでは信じようという方針なんだよ」

「あの、結果は…」

「ふむ、命を失うまではいかなかったよ、ただ、脳細胞の一部が完全に破壊されたようだね、記憶を取り戻すのは難しいね。」

覚悟はしていたつもりだ、だが、当麻は全てを失ったのか。

「彼にはどう説明するんだい？」

「俺が全てを話します。」

「そうか、ならもう私から言うことはない、君のしたいようにすればいい、」

「当麻のこと、ありがとうございました。」

挨拶をしたあと彼と　別れた。

俺は、家に帰る前、当麻の病室に寄った、夜の九時をもう過ぎている、多分寝ているだろうが。

ドアの前にたつ。中々入れなかった。何て言えばいいんだろう？

……考えても始まらない、部屋に入ろう。

コンコン

「どうぞ」

当麻の声がした。部屋を開けてみるとそこには、いつもと変わらない彼がいた。

……いや、素の上条当麻がいた。

「夜遅くに一体誰ですか？」

上条は戸惑っていた。

「……やっぱり、何も覚えてないんだね。」

「……俺達は知り合いだったのですか？」

「そうだったよ、記憶を失う前のこと、知りたい？」

「じゃあ、頼みます。」

俺達は昔から知り合いだったこと、災厄のことは簡単に言い、学園都市での生活、そして、記憶を失うまでの経緯を話した。

意外にも上条は飲み込みが早かった。

「驚いたよ、そんなに理解が早いとは思ってなかったよ、」

ただ、上条は奇妙な顔をしていた。何かおかしなことがあったのかな？

「どうかした？」

「いや、貴方がいってくれた言葉を知っている、いやどこからともかく表れたんだ、なんか自分の記憶じゃないみたいだ」

俺はその言葉を聞いて驚いた。

「……なあ、ペンを持って何か書いてくれるかい？」

「わかった。」

そういって俺は、ティッシュにペンを上条に渡した。

すると記憶を失う前の筆跡と同じだった。

言葉や知識を司る『意味記憶』と運動行動についての『手続き記憶』が生きていた。

破壊されたのは思い出を司る『エピソード記憶』か。

「これでいいか？」

「ああ、ありがとう」

「そういえば、インデックスって子についてなんだけど、」

「どうかしたのか」

「明日会って話したい」

「でも、記憶は……」

「…うん、でも、考えがあるんだ」

そして、とんでもないことを言ってきた。

「記憶を失ってない振りをしたいんだ」

「たけど……」

「彼女には悲しませたくないんだ」

目の前の上条だった男がなにを考えているのかは分からない。だが、何とかなる気がする。

「……わかった」

そして、当日の段取りについて決めた

「ありがとう、今日は暗いし、もう帰ったほうが……」

「そうだな、じゃあ、また明日」

「またね」

俺は挨拶をしたあと、部屋を出た。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　上条

今の上条当麻は何かを考えていた、

「なんで、忘れてない振りをしようと思ったのだろう？」

分からない、でも、明日インデックスという少女に会えば、分かるかもしれない。その理由が。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　インデックス

私は今日とうまのお見舞いに行く。こーきが同伴者として着いてきてくれた。

あの魔術師達は一度連絡を受けるため、活動を控えているようだと彼に教えられた。

そして、とうまの安否については覚悟したほうがいいと言われ、

「単刀直入にいうよ…実は」

こーきが言ってることは、信じられなかった。とうまが私達との記憶を全部忘れているかもしれないなんて……

でも、私は今だに信じきれなかった。

そう思いつつ、とうまの部屋の前に着いた。

コンコン

「どうぞ」

こーきがノックをして、部屋に入る。

そこには、上半身を上げた恩人がいた。

何て言えばいいんだろう。

「あの、貴女は？」

……息が止まりそうになった。だから私は思わず聞いてしまう、

「とうま、私のこと、分からないの？」

「知り合いなのか？俺達は…」

「ねえ、とうまは全部覚えてないの？……インデックスは、ううん、私は……、とうまのことが、大好きだったんだよ……」

「インデックスか、珍しい名前だね。」

あの時とは違う、

「禁書目録？、なんだそりゃ？思いっきり偽名じゃないか！」

例え、記憶を失ったとしても、あの時と同じ反応をしてくれると思ったのに……、だけど、もう……彼はいない。

悲しくて…、辛くて…、もう何も……考えたくない！

「……うっく、ひく、……」

涙が止まらない……。

彼は何も知らないんだ……。だから、泣いたらいけないのに……記憶を失った今も、とうまに迷惑をかけたくないのに……。

「なあーんてな、」

ほえ？

その瞬間固まりつつあった思考が崩れた……。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

粘りに粘ったな、全く、ここからどうするのかな？

「……とうま？……脳細胞が吹き飛んで、記憶が…なくなったって……」

戸惑うインデックス。

「確かにそうだったかもな。脳細胞は破壊された。けどな、その瞬間、俺は右手を頭に当てて、ダメージを無効化したんだ。」

おい、やっぱりそれ、無茶苦茶だよ。たくっ、加勢するか。

「つまり、お前は、アレを魔術ダメージと判断し、その行動で記憶を守ったってことか、確かに幻想殺しはイレギュラーだから有り得るか……」

へなへなと安心したインデックス。あれ？　なんか肩を……　チラリと上条を見る。　ご愁傷様……

「……インデックス？」

「……とうまの……」

俺は離れておくか。

「ばあぁかあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁ！！」

インデックスのかみつき！　きゅうしょにあたった！　こうかはばつぐんだ！

かみじょうはたおれた！

「いいのかい？アレで、」

俺もだが、彼女のあの笑顔を騙してるわけなので、とても罪悪感を感じている。

「けど、わかったんだ、俺は覚えてるのかもしれないって、」

「今のお前は、初期化された人形と同義だ、どこにそんな感情がある？」

「決まってるよ」

彼は胸に手をあて
「心に、じゃないかな？」

少年は道化を演じる（後書き）

次は、錬金術師か……。日常編か…どっちにしよう

時系列設定（前書き）

ポルターガイストは断念しました

時系列設定

あくまで仮定です

何か入れるかも知れませんし、

省くかも知れません。

科学の方はもう手を出さないかも。

買ってないしね。

それでは

６月１７日
御坂に追い掛けられる

７月１８日
グラビトン

７月１９日

御坂と紫穂に追い掛けられる
黒子を助ける

７月２０日

停電
偏光能力戦
ステイル戦
７月２１日
インデックスを匿う
数日後、小萌の家へ
禁書目録
７月２４日
木山戦とＡＩＭ戦
７月２５日
入院中
７月２６
退院
神裂戦
インデックス戦
７月２７日
二人の芝居
行間

外伝、上野君の料理
アレイスターとステイルの会談
８月４日
上条退院
夜
盛夏祭
正し、御坂は気づかない
８月８日
吸血殺し編
８月１９日
退院
８月２０日
妹編
８月２８日
御使堕し編
開始

時系列設定（後書き）

あきらめずに

頑張ろうかな？

能力者狩りに介入行動を開始する！（前書き）

出来心で書きました

自己満足です。

能力者狩りに介入行動を開始する！

魔術師との戦いが終わり、夏休みを満喫しようかなと思っていた。
ちなみに、上条は入院中（学力向上の猛勉強）、インデックスは上条につきっきりだ。

そんな訳何だが……

俺は今、かなりマズイ状況に居合わせている。簡単に言うと、学生がなんか集団で襲われていた。

「待ちなさい！」
そこに風紀委員の子が現れた。

ふう、よかった、って、　紫穂！？

何突っ込んでいるんだ！

風紀委員だとは初めて知った

「能力者が、……舐めてんじゃねぇぞ！」

紫穂が炎熱で威嚇する。

不良、ご愁傷様、

キイィィィン～！

！！　何だ？

この高い音はなんだ？仲間でも呼ぶのだろうか？

そう考えると紫穂の炎が弱まる、そして、……え？

紫穂が急にうずくまった。

「くっ、何が……」

「やっちまえ！」

ブチッ、

雷撃で吹き飛ばす。

「「「「ギャアァァァ！」」」」」」」」

先ず四人、

「てめえ！」

なんか喧嘩慣れしてるみたいだけど、単調な動きなので、四合程捌いて、蹴りでガードを崩し、襟を掴み、そのまま地面にキスさせる。

「ぶぼお…」

「き、きいてねえぞ、こんな奴！」

「…テメエェらは、俺ェをォ、怒らせたァ…。」

不良共を指差す

「ぶち殺し、確定だアァァァ！ゴラアァァァ！」

とりあえず、殴る、、投げる、蹴る、張り倒す！

「ぎゃあああああああ～」

「容赦しねェゾ、ゴルラァァ！」

また一人、また一人と鼻っ柱や腹に蹴りや拳を食らわす、

紫穂はさっきの音波で気絶してた。学生は唖然としていたが、無視して、作業を継続する。

「コノカスドモガアァァ！！」

「ギイィアァァァ！」

最後の奴は、逃げようとしたので、掴んで、地面にたたきつけた。

「ぐべぇらぁ」

「……ふう、終わったか……」

アンチスキルのサイレンか、なら早々に退散するとしよう。

「あの、貴方は……」

男子学生が聞いてきた

「ただの学生だよ」

俺は、この場を離れた。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　白井

紫穂さんがやられた……。それが信じられなかった。ただ、ここ最近、能力者がビックスパイダーと呼ばれるスキルアウト　に度々襲われていることを考えれば……。

アンチスキルより少し早く着いた私は現場を確認した。

そこには、鼻っ柱を折られたり、腹を抑えてうずくまる者、気絶しているメンバーらしき人達がいた。その中心に襲われたと思われる男子学生と……

「紫穂さん！」

気絶している彼女がいた。

「何があったんですの？」

「よく分からない、囲まれた時、急に変な音を出されて、力が出なかったんだ、彼女は特に強い音をだされたから彼女も倒れたんだ。その時、黒髪の男があいつらを雷撃で薙ぎ払ったんだ、僕たちが能力を使えない状況下で……、それで後は肉弾戦で圧倒して……。」

「そうですか……」

まったく、……またあの方ですの。ただ、あの方にしてはやり過ぎな感じが……。

因みに、白井は彼が若干シスコンだというのを知らない。

彼は知る由もないが、後にとある黒髪の美形には、絶対に喧嘩を売ってはならないという噂が広まった。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

side　高貴

さっきは、取り乱してしまった。まあ紫穂に手を出したんだ、覚悟はしてもらわないと。

ただ、何だったんだろう、あいつら？

今日もまあ、帰ってハッキングでもしようかな。

そういって、歩こうとしたら、さっきと同じような光景が目の前に広がっていた。

ただ、学生を庇うように男が戦っていた。そしてなぜ牛乳がある？

とりあえず、助太刀しようかな？

って、早っ！

全滅していた。

「貴方は一体？」

「名乗るほどのもんじゃねえよ」

「では、背中にある蜘蛛の入れ墨は何ですか？」

「…何のことかな？」

「俺は透視能力を持っています。」

「便利なもんだな、能力は、……ただ、袖に仕込んでいる針を見る限り、他にも持っているんだろ？」

っ！……なんで！、隠していたのに……。能力者？ただ者じゃないぞ……。

因みに白井の武器が便利そうに見えたので、俺も作ってみたのだ。お披露目するのは今回初めてだ。

「……ビックスパイダーとはどのような関係ですか、」

彼は平然としながら

「昔仲間と思っていた奴らかな？」

彼からいろいろと話を聞いた。二年前のこと、現在まで何をしてたのか、明日のアンチスキルと風紀委員による、一斉摘発、そして、彼の決意……。

……カッコイイ、スキルアウトにも筋を通している人達がいたんだ……。だから俺は衝動的に……

「俺にも手伝わさせてください！」

「関係ないはずだぜ、あんたは、」

「手伝いたいから！貴方の生き様を見たいと思ったから。」

彼は大笑いした。

「ははは！なんだそりゃ？……あいつらとは違う反応で面白いな、お前、……いいぜ、好きにしな、ただ、危なくなったら逃げな。」

「分かりました。」

明日は早く起きないとな。

彼と別れた後、俺は急いで家に帰った。

そろそろ帰らないと夕飯が遅いとインデックスに引っ掻かれる……。

そうなのだ、上条がただ今入院中なので、インデックスのご飯は俺が作っているのだ。

「こーき！私はもうお腹空いたんだよ～！」

「後もう少しだ、」

「なんでもいいから食べさせてほしいんだよ！」

「待て、もうすぐだから」

今日はオムライスを作ってみた。

そして、彼女の反応は……

「美味しいんだよ！卵がふわふわしてて、ご飯もぱあぁーって味が

広がるんだよ！」

前の母さんの料理の手伝いや、体調を崩した時、ある某グループのコンサートに遠征中は、俺が家事をやっていたのだ。

父さんは、少しは、紫穂は俺達を黄泉の世界に誘う程の味だった。

見た目はいいのに。

「さて、前情報ぐらいは取っとかないとな。」

俺は、パソコンを起動し、データバンクに侵入する。

「守護神とやらが頑張っているようだが、念には念を、」

そういって、最終防衛プログラムのデータを、能力を使い書き換える、

他の防衛プログラムは俺特製、拡散タイプのウイルスでフルボッコにする。

「フムフム、」

結構早い時間に摘発　をするか……

調べたいことは調べた、パソコンを切り、俺はベットで休んだ。

翌朝、風紀委員より早く、俺は、目的地の第十学区に来た。

黒妻さん（昨日の人）は、もうやりやってた。

今回は極力能力を使わないようにしよう。彼の邪魔にならないように、彼のけじめを見るために……

やって来る奴らは喧嘩慣れしていた。少し苦戦したが、

「喰らえ！」

すかっ

「この！」

すかっ

がら空きなので、

「隙あり！」

「「ぐべえら」」

なんか、相手の攻撃が動きが読めるのだ、最近。（実は昨日もよく見えた。）

プラスなんだが、能力使うつもりはないのに……。だが、なんか見えるんだ。

そうこうしているうちに風紀とアンチがやってきた。

まあ、ここの奴らは彼等に任すか、

「黒妻さん！」

「おう、奥いくか」

本拠地らしい廃墟に入った。

「テメエは……、」

ボスらしい奴が睨む、そんなふうにしてると

「待ちなさい！」

風紀委員（御坂もいた）がそう言うと黒妻がこっちに振り返る

「美偉・・・」

そして風紀委員の腕章を見て

「フッ・・・かっこいいじゃねぇか」

それを聞いた風紀委員（美偉？）も軽く笑う

え？知り合い？

「蛇谷クン？あなた随分下衆に成り下がったわね」
「うるせぇ！俺たちを裏切ったお前に何が分かる！」

蛇谷と呼ばれた奴が叫ぶ

そして奴らが武器を構えるが突然現れた白井にダーツで貫かれる

「てめえら、やっちまえ、」

よし、肉弾戦を……

そういって集団の中に突っ込む、って、うわあ！

御坂が雷撃で薙ぎ払う、

「お、おまっ、危ないだろ！」

「なら、どうして能力使わないのよ」

「今日は能力使う気ないんだよ！」

「はあぁぁぁ！？」

呆れられてるが、今は無視、気を取り直して……

「あれ？」

蛇谷以外は皆倒れている

それにいつの間にか紫穂もいた

「で・・・どうするよ」

黒妻が蛇谷に問う

「く、く、く……ははは……コレで勝ったと思うなよ……コレを見ろぉ！！！」

そこにはダイナマイトが腹に巻かれていた。

「「ダイナマイト！？」」

御坂と白井、紫穂が驚く

「いつの時代の方ですの？」

「これ以上近づいてみろ！みんなドカーンだ！」

「あーあ……めんどくせぇ……」

黒妻がジャケットを脱ぐ

「しょうがなかった……しょうがなかったんだよ！」

あちゃあ終わってるし

「俺たちの居場所はここしかねぇ……ビッグスパイダーをまとめる

には……俺が黒妻じゃなきゃ駄目だったんだ……」
蛇谷はナイフを取り出す
「だから……今更テメェなんかいらねぇんだあああああ」
と叫んでナイフを突き出す
だが
黒妻のクロスカウンターが命中し、蛇谷は倒れる
「蛇谷……居場所ってのは……自分が自分でいられるとこのことを言うんだよ！」
スキルアウト達が警備員に次々と連れて行かれる
「はぁー終わった終わった」
黒妻はそういった後
「ほら」
と言って美偉さんの前に手を出し
「美偉」
と名前をよぶ
美偉さんは戸惑ったようなしぐさをする
何俺の役目は終わったみたいに達観してんだよ

「待ちなって」

「何をやっているんですの!?」
「アンタ何庇ってるのよ?」
「何、どうして彼が捕まるかが、よく分からなくてね、こうして邪魔させて貰ってる。」

「だが、これは俺の「また彼女から逃げる気ですか！」！」

「確かに暴行障害に問われる可能性はあります、ですが、貴方の介入がなければさらに多くの学生に被害がでていたかもしれない」

彼は黙る。

「罪滅ぼしのつもりで行動してたかもしれないけど、アンタがやったことは誇ってもいいと思う」

「お前……」

「胸晴れよヒーロー！俺はアンタに憧れたんだから。」

「……今回黒妻さんには委員会に連絡して感謝状でも送らせようかしら、」

「先輩！？」

「美偉？」

「結果的に事件の解決に協力していただきありがとうございます、そして…」

「私の後輩達を助けてくれてありがとう！先・輩！」

黒妻に抱き着いた、

「「「「先輩がデレたあぁぁ～！？」」」」

「な、な、な、」

動揺する黒妻。

うん、ハッピーエンドだ。

「じゃ、失礼するよ～」

「待ちなさい、アンタ！」

無視。
瞬間移動で、離脱する。
今日は早く寝るか。
さっきの場所の方角に目を向ける
俺は笑みを浮かべ、
「お幸せに。」
誰にも聞こえない独り言を呟いた。

能力者狩りに介入行動を開始する！（後書き）

次は舞夏祭か

一応、科学はここで区切ります。

禁書オンリーです。

盛夏祭開幕！　幻聴が聴こえるけど、気にしない（前書き）

作者介入～

盛夏祭開幕！　幻聴が聴こえるけど、気にしない

ｓｉｄｅ　高貴、８月４日

うむ、ここ最近は、トラブルに巻き込まれず、中々に夏休みを過ごしている。

これだよ！　そう、これなんだよ！

これが夏休みのあるべき姿なんだよ！

はっ！

いかん、取り乱してしまった。

今日は土御門に誘われて、常盤台の舞夏祭とやらにいく。

そうだなあ～　やっぱ夏といえば祭だぜぇ！

「……コーヤンが壊れたにゃ～」

「うわっ、土御門ぉぉ！？」

「……ただ漏れだにゃ～」

「……お前にもそういうとこあるんだにゃ～」

「／／／／からかうのはやめてくれ～」

「まあ、いいか～、そろそろ行こうにゃあ～」

「そうだな」

俺達は常盤台に向かった

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　御坂

寮監が朝から気合いが入っている、

「通常、一般解放されていない、この常盤台女子寮が、年に一度門戸を開く日、それが盛夏祭だ！」

話が長いから割愛するわ、

そんな訳で、メイド服みたいな格好でおもてなしなるものをしている。

「別にこんな格好でなくても……」

「そうよねぇ……」

紫穂もおっくうなようね。

はあ、とりあえず仕事しますか。

「「いらっしゃいませぇ～、こちら～今回のパンフレットになりま～す。」」

と声をかけると、

「君達可愛いねぇ、写真撮ってもいいかな？」

はあ？　何を言ってるんですか。

「え、いえ、それは……」

「申し訳ありませぇ～ん、寮生の撮影は御遠慮いただいているんでぇ「カシャ」す」

ぶちっ

「……ですから、撮影は、「カシャッ」「いいねぇ」…「カシャッ」「いいねぇ」」

黒子がカメラを連写していた

「……なんで無断で撮っているの、」

「今日の私は記録係ですの、ですので参考写真を、いだい、いだい」

ムカついたので、頬っぺたを引っ張ってやった。

「こんにちわぁ～」

初春さんと佐天さんだった。

どうやら、黒子が招待したようだ。

談笑をしていると土御門さんが黒子を引っ張っていった。

初春さんがすごいテンションで、面白かったりする。

その途中、

「さすが、常盤台の祭だにゃあ～」

「そうだな、幸い妹が料理を作ってないから安心だ。」

ブチッ

え？　紫穂さん？

「そうだにゃあ、あれは生物兵器だにゃ」

ブチ、ブチ、

何もいわず、声のする方法へ向かった

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ

「確かにな」

うん、想像するだけで……ガシッ　……！

「「ゑ？」」

「お兄ちゃん、土御門さん？少しＯＨＡＮＡＳＨＩしませんか～」

「い、いや」

「え、遠慮するにゃ～」

「いえ、お客様をもてなすのが本日のお勤めなので♪」

「いっせいのうぉで」

「「不幸だぁ！」」

お見せできません。

お見せできません。

お見せできません。

ふう、酷い目にあった。

「事実をいっフガッ「コーヤン！」」

「どうしたの、お兄ちゃん？」

黒い。

「土御門、助かった」

「見てらんねぇぜ」

御坂達が唖然としていた。

その後俺達は一緒にランチをとることになった。

初春さんが

「わあああ～！もうここに住みたい～！」

と感動したり

「義妹の料理は世界一ィィィ～！」

叫んだり

なんか、御坂に元気がない。

「はあ～」

「どうした？」

「別に」

「おねぇちゃん～！」

あ、女の子。

「あ、あすなろ園の……」

「知り合い？」

「ええ、けどどうしたの？、え」

釣られてみると、子供達を連れた女性がいた。

「……私が招待した」

「えーと」

「私達の寮監」「あぁ」

なんか神妙な顔をしている。

「ねぇ、ねぇ、このお祭りでいっぱい場所を巡って楽しんだんだよ～」

「そうなの？それは、よかったわねぇ～！」

まだ、笑顔

「でも、一番楽しみなのは……」

「なに？楽しみなのは～」

「おねぇちゃんのステージ！」

御坂が固まった。

「……」

子供達が興奮して騒いでいる。

「だ、だ、だ、誰にき、き、聞いたのかしら？」

ああ、寮監か。　ドンマイ御坂、日頃のあれかな。

寮監が脅しにかかっている。

初春さん達も騒ぐ。何やらサプライズと連呼している。

ランチの後は、俺は、土御門とオークションに向かった。なんでも舞夏の縫ったズボンやＴーシャツ　を得ることに執念をみせていた。

すぐにそれは出た、

なんか作りがいいな。

１０００円　１５００円　　２５００円　とか言っていたが、

「１００００円だにゃあ～！」

誰も答えない。

その値段にか、いや、このオーラのせいなのか……

「やった、にゃあ～！」ぶっ壊れていた。

変態であることを再確認した。

次は、ブランド物……興味ない、

お、決まったようだって美偉さん？

「へぇ、お前もいたのか」

黒妻さんがいた。

「お久しぶりです。あの後は……」

「ああ、なんだかんだなったな、今はアンチスキルにいる」

「よかった、」

「……あの時は助かったぜ、いつか借りをかえさせてもらう」

「……楽しみにしています」

やっぱりかっこいいな、この人は。話してて気分がいい。

土御門がぶっ壊れているので、彼と長話でもした。

「美偉が帰ってきたから、このへんでな、」

「はい、ではまた」

「またな」

名残惜しいけど、俺達は別れた。

「そういえば、御坂がなんかいないな。」

そういえば、なんかテンパってたな、声でもかけてやるか。

そういや、あいつはどこにいるんだろう。

ステージに向かう道の隅に固まっていた。

「電撃姫といっても人並みに緊張するんだな」

「な、な、な、なな」

「重症だな、こりゃ」

「笑いにきたの！？」

「いや、様子見だ。だが、へぇ、中々に綺麗じゃないか」

「な、何言ってんのよバァカアァァ！」

「地雷踏んだあぁぁぁ～！」

任務失敗！

撤退～！

あ～あ、上条ならうまく出来たかな。

筆者の声
このフラグ建築士共が！

うわ！　なんだ！

病院
上条

なんか、悪寒が

そうこうしてると、御坂がバイオリンを持って出てきた。

あれ？　なんか堂々としている。ということは、ミッション、コンプリートか！

祭が終わり、
「お兄ちゃん、時々遊びに来てね、」

「いや、ここ女子寮だし」

「御坂さんお疲れ様でした！」

「とても、綺麗でした」

「え、初春さん？（こっちを見た、なんで？）そ、そうかな？」
「はい！」

白井は放心状態。

「じゃあ、そろそろ帰るか、じゃあな」

「「「さようなら」」」

「必ずですよ、兄様」

呼び方が変わったけど、気にしない。

作者
いや、短いから

……正体不明の声も無視　。

今日は疲れてるようだ。早く休もう。

盛夏祭開幕！　幻聴が聴こえるけど、気にしない（後書き）

次は今度こそ、会談です

三沢塾…そこは表と裏が存在する世界（前書き）

姫神登場。

今回は当麻が活躍します。

三沢塾…そこは表と裏が存在する世界

真夏の下で、俺達は歩いていた。何やら、記憶を失って以来、当麻は勉強に執心のようで、英語の参考書を買いたいそうだ。本棚の内容を見て、これではイカンと危機感を持ったそうだ。

そして、今に至る。

インデックスがアイスを食べたいとごねっているのだ。なんだかんだで、めんどくさいことになっているので、聞き流すことにした。

すると

「なかなかに素敵な交渉中だにゃあ、その子は誰ぜよカミやん？」

土御門がやってきた。

「うん？頭でもうって記憶でも飛ばしたかにゃ？」

「んな……！」

ばれてないから。

「冗談ぜよ、で、誰ぜよその娘は？」

「えーと、ただの居候？」

「いそうろう?だと?テメエ今女の子の居候を『ただの』とか言いやがったかカミやん!」

「何もないから、ホント……俺達のエンゲル係数の急増加の一、い、ん?」

地雷をふんだ

「……とうま」

びくっ!

「私はイギリス清教の修道女です。懺悔なら今の内に聞くかも?」

助け舟をだそう

「な、なあ、俺が奢るから……」

休業中

俺は引っ掻かれ、当麻は噛み付かれた。

「「不幸だあぁ!」」

結局マキドナルト（センス０）のシェイクで勘弁してくれた。

そして、俺達の前に巫女もどきがいた。

「食い倒れた。」

「「不幸だ」」

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ステイル

やはり科学は慣れない。

今僕はビーカーの中で、逆さになっている統轄理事長と対談中だ。

何やら魔術師がこの学園に紛れ込んだらしい。

簡単に始末できるが、こちらは手出しできないから、代わりに始末してほしいと依頼された。

そして、あの少年達を使えという。

「あの少年達と手を組め、ということですか。ですが」

「問題ない、あれはＬｅｖｅｌ０、そして、もう一人の方は実験も兼ねてだ、」

「なに、彼の知り合いが巻き込まれた、だから無知のまま助けに行き、巻き込まれた、これなら、問題はさほどなかろう。」

「しかし、そんなにうまく行くでしょうか？」

「意図的にそうすればいい、その手筈は整ってある、」

とんでもない人物だ。右手の少年もだが、翼の方にも執心か

「吸血殺し、か」

「吸血鬼の有無は君達の領分だ、ただ、」

彼は不敵に笑う

「吸血鬼の存在を証明するならば、彼等の存在は何を証明するのかな？」

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

俺達は、今厄介な奴に遭遇している、目の前には食い倒れ巫女、話が変な方向にいき、自分が魔術師だという。

やっぱ魔術師って……

誰か助けてくれ、と思ったら、スーツの男達（ＳＰ？）、自称教師が引き取ってくれた。

帰り道、

当麻とインデックスは、猫を飼う飼わないで、口論していた。

諦めろ、当麻、そいつは梃でも動かん。

！？

なんだ？

インデックスも何か異変に気づく、

すると

「とうま達は、待ってて、調べてくるから！」

「おい！」

俺も行こうとしたが、止めた。

これは囮だ、

世界から音が聞こえていく、

そして、

「久し振りだね、上条当麻、上野高貴」

目の前にあのロリコンが立っていた。

当麻は動揺していた。

「何しにきた」

「依頼だよ。」

「「は？」」

なんでも、三沢塾に女の子が捕まってるらしい。何！三沢塾だと！

当麻は黙っている。当然だ、記憶がないのだから。

三沢塾

日本一のシェアを誇る、予備校だ。そしてそこには、

吹寄が確か通っていたはず。

「わかった、協力する。」

「高貴？」

「あそこには知り合いがいる。魔術師がいるなら危険だ。」

「わかった、俺もいく。」

「物分かりよすぎじゃないか？（上野高貴は予想通りだな、まったく）」

俺達は三沢塾に乗り込むことになった。

インデックス達を家に送ったあと、（あの猫ことスフィンクスは飼うことになった）俺達は家を出た。

不審者が壁にルーンの札を貼っていた。

「魔女狩りを彼女の護衛に置いていく」

「「アイツが好きなのか？」」

「なっ！」

図星か

「ああれは保護の対象であり、そんなんじゃーッ！」

そんなかんじで

今、三沢塾。

中は、普通な感じだった。受付がいて、学生がい…ッ！

当麻も気づいたようだ。

「あれは？」

当麻が近づく。

「あれは死体だよ」

ステイルが平然と言った。

「え？」

当麻は状況を飲み込めてない。

さらに近付き、

「息してる！」

近くにいた学生に触れようとする、馬鹿！

「おい、救急車を「やめろ当麻！」」

「なにすんだよ！まだ息して「もう手遅れだ、そして、彼等に触るな、体をちぎられるぞ」！」

「よく気づいたね。ここは裏であちらは表、干渉はできない、そういう仕組みさ」

「なら、」

「核を潰さないと無理だ、上条、恐らく外だろう、」

「さっきから慣れてるね、魔術師に会ったことがあるのかい？」

「さっきは直感、今のは俺の考え」

ただ、思い浮かんだだけ。

「そうか、それはすごい観察眼だね」

何か射ぬくような目で見てくる

「少しどいてくれ、彼を送るのは僕の役目だ」

様になっているな、腐っても神父という訳か

当麻は動揺していた。

「大丈夫か？」

「……なんとか」

大丈夫じゃないだろ。

…でも、俺のように慣れないでくれよ。当麻。

階段は二人にこたえたようだ。

「「何で平気なんだ？」」

「鍛えてますから」

「「……」」

「電話ってできんのかな？」

「「は？」」

何言ってんだ？

「繋がんのかな？」

そう言って電話をかける

インデックスに繋がり、場違いな話をする。

「「……」」

「緊張感なさすぎじゃないか？」

「そうだね、女の子と呑気に会話しちゃって……」

「妬いてるの？」

「ぐ、ヌウウ、……そうだよ」

「そのへんにしとけ、二人とも、当麻はそれは禁句だ」

少しカチンときた。

「…わかった」

なんとか食堂についた

すると生徒たちが一斉にこっちを見た

そして、

『始点の翼は輝く光　輝く光は罪を暴く純白　純白は純化の証　証は行動の結果　結果は未来　未来は時間　……』

一斉に魔術の詠唱を始めた

「ちっ！！」

無表情で一斉に同じことを言うか、

操られているのか？

「表の住人を裏に立たせているんだろう…」

「逃げるぞ！」

「よし幻想殺し！君の出番だ！！」
ステイルが離脱した
「おいてめぇ！置いてくな！！」
「あのやろう・・・」
ステイルはいない。
そして階段にたどりつく
すると上と下から同時に光の弾が追ってきた
「マズイ！」
こちらも能力を使う。
「風で一気に…」
すり抜けた
「「え？」」
二人でなんとか逃げ切る。
だが、
「吹寄？」
やはりいたか。

いきなり魔術を発動しようとする
身体に亀裂が入る
「オイ！」
それでもそいつは魔術の詠唱を続けるが途中で倒れた
すると光が一箇所に集まってまたバラける
そして全て地面に落ちて消えた

「これは一体・・・」
そう上条が呟くと
背後から姫神が現れた

その後吹寄を治療した。といっても、姫神のてつだいだが

そして、姫神がここにいる理由を話してくれた

「だから約束した。殺す為でなく。助ける為にこの力を使うって」
吸血鬼は普通の人間となにも変わらない
誰かのために笑い行動できるみたいだ。

人畜無害じゃないか。なぜ、殺すべき対象なのかわからなかった。

姫神の血はそんな人たちを呼び寄せ殺してしまうらしい。

学園都市なら取り除く方法もあるだろうと思ったらしいが、見つからなかったそうだ。
だがアウレオルスはこの力で助けたい人がいるようで、だから姫神は誰かを助けるためにこの力を使いたい、だからここにいる

「そんなの駄目だ……もしそいつがお前の言うとおりの人間なら、これ以上間違えさせる事なんてできない。このままだと、本当に取

り返しのつかない事になっちまう」
上条がそう言った時
アウレオルスが廊下の奥から現れる
あれ？
なんか忘れてるような…
見ると上条も隣にいた
ステイルもいる
「ここは……」
「君がここに居るという事は日本には違いないだろう」
「まぁ思い出す必要もない程度のことなんだろうさ」
「そう、なのかな……」
上条は頭を右手でかく
そして何かを思い出す
「上条ちょいと右手かせ」
俺は上条の右手を借りて頭に当てる
そうか、思い出したぞ
三沢塾に突入した事
姫神に遭った事
そして、俺たちは三沢塾へ戻る
すると何人もの甲冑を着た奴等がいた

「あいつら……入り口に居た……」
そういや入り口で死んでた奴と同じ甲冑だ

「あの騎士の仲間か……」

そんなやりとりをしていると
「攻撃を開始する！！」
甲冑の奴の一人がそう叫ぶ
そして剣先が光る
「ヨハネ黙示録　第八章　第七節より抜粋！第一の御使い、その手に持つ滅びの管楽器の音を此処に再現せよ！」

そう言った瞬間、剣がより強く光る

「あいつら何する気だ！！」
「聖呪爆撃……！」
「爆撃って中にはまだ人がいんのに……」

すると空に雷雲のようなものが現れ空から落雷が落ちる

なんて威力だ…
ビルが倒壊していく……
すると一瞬倒壊が止まり、ビルがテープの巻き戻しのように元に戻った！？

「アレが黄金練成……アウレオルスの本当の実力……！」
ステイルが絶望的な顔でそういった

すると地面にインデックスのフードが落ちていた
中から三毛猫が現れる

「スフィンクス！！……まさか……インデックスも！？」

上条がそう言った

厄介なことになりそうだ。

龍の顎と殺戮の翼（前書き）

少し違います。
上野君は最後に無双します。

今、俺達は、奴と対峙している。

インデックスは寝ている

「インデックスを助ける気なのか？」

「ふん、今更ながら我が真意に気づいたか、ならばその体勢を前に己が無力に嘆き、嫉妬に身を焦がすがいい」

「上手く行くなら焦がし甲斐もあるんだがねぇ……繰り返すが君に彼女を救う事は出来ない、インデックスを救う事はね」

「インデックスを？」

「貴様はしくじったと言うだけの事だ……だが私は」

そしてアウレオルスはインデックスのことを話す

「コイツ……インデックスを知っていた？」

「そうだ、彼もインデックスのパートナーだったのさ……今年は君、去年は僕、そして3年前が彼……アウレオルス・イザードと言うわけさ」

「これまで禁書目録は一年毎に記憶を消さなければ生きていけなかった……これは必定であり、人の身では抗えぬ宿命、しかし」

「逆に言えば人ならぬ身を使えば済む、か。」

ステイルがアウレオルスより先に言う

「吸血鬼とは無限の命を持つモノ、無限の記憶を人と同じ脳に蓄え続けるモノ。あるのだよ、吸血鬼には、どれだけ多くの記憶を取り入れても、決して自我を見失わぬ術が！」

魔術師は科学にやはり疎い。

アウレオルスの力ならインデックスの魔術を解除できた可能性もあるはずだが……

俺はそんなことを考えていた

「念の為に聞くけど、その方法が人の身には無効だとしたら？」

「当然。禁書目録を人の身から外すまで」

「インデックスを吸血鬼にすると？」

当麻が口を開く

「必然。それでも禁書目録が救われる事には変わりはない！貴様にもそれは分かるはず、正しく一年毎に眠り狂う、この子の最期をみたであろう貴様には！」

「ふっ、」

「何がおかしい？」

「よく、考えたら分かるはずなのに、まったく、魔術師とやらは」

「どういうことだ」

「脳の１５％で一年分も使うはずはない、そもそも記憶ってのはいくつかの容器に分かれている、仮に１５％で一年だとしても、入れ物が違うから破裂するのは知識記憶だ、思い出のエピソード記憶を消しても知識の方が圧迫されてるなら結局死ぬかもな」

「でもそれは魔術側の言う事が事実だった場合だ、ありえないがな……、全部嘘なんだよ……」

「なっ」

アウレオルスが驚いた顔をした

「１年ごとに記憶を消さないといけない魔術が施されてたわけだ……でもそれは破壊された」

俺がそう言う

ステイルが

「そういうことさ、インデックスはとっくに救われているんだ。君ではなく、ここにいる上条当麻と上野高貴によってね」

ステイルがそう言うとアウレオルスがさらに驚く

「あ、ありえん！魔術師でもないただの人間に、一体何が出来ると言うのだ！？」

「必要悪の協会の、イギリス清教の沽券に関わるので他言は控える

が、そうだね、コイツの右手は幻想殺しといい、もうひとりの方はまだわからない、まあつまり人の身にあまる能力の持ち主達って訳だ」

「待て！　ならば……」

「そう、君の努力は全くの無駄骨だったと言うわけだ、だが気にするな、インデックスは君が望んだ通り、今のパートナー達と一緒にいてとても幸せそうだよ？」

アウレオルスが後退る

するとインデックスが寝言を言う

「と、うまぁ」

「インデックス！」

「とうまぁ、おなか減った」

その時、上条がこける

「こんなときも飯のことかよ……」

「りんごぉ……大盛り…」

…幸せそうな顔してるな。

するとアウレオルスが笑い出す

上条も笑っていいのかと思ったのか笑う

俺はがんばって耐えるが、上条とステイルのせいで笑ってしまった

瞬間

「倒れ伏せ！！侵入者共！！」

アウレオルスがそう叫ぶ

そして俺たちは地面に倒れた

あー動けねぇ

やばい～

「我が思いを踏みにじり、我が進化をあざ笑い、良かろう、この屈辱、貴様らの死で贖ってもらう！」

アウレオルスが壊れた、馬鹿にしたのはロリコンだ、俺達じゃない！

「待って！！」

「知ってる、私、あなたの気持ち」

待て！そいつは！

姫神は続ける

「でも違う……今のあなたは……本当のあなたは」

上条は右手を自分に近づける

そして親指を

噛んだ

「死ね」

アウレオルスはそう告げる

そして姫神は、死んだ

「姫神ィィィ！！！」

上条が走って倒れる姫神を抱える

「フハハ、吸血殺しなどもはや無用！悠然。約束は守った。これでその女も、己が血の因果から解き放たれたであろう！フハハハハハ！」

アウレオルスがそう高笑いするが姫神は上条の右手により息を吹き返す

「なに！我が黄金練成を打ち消しただと！？ありえん、確かに姫神秋沙の死は確定した、その右手、聖域の秘術でも内包するか！？」

「ゴチャゴチャうるせぇ……んなことはどうだっていいんだよ！、いいぜ！テメェが何でも思い通りに出来るってんなら・・・まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す！！」

その瞬間、アイツが帰ってきたように見えた。

そのせりふが聞けるなんて。

上条、やっぱりお前は、まだ生きてるのか？　当麻の中で今も……

しかし、俺達は動けず、加勢できない。

「床冷たい」
「同じく」
「ステイル」
「なんだ」
「暇だね？」
「ああ、にしても、なんだあれ」
アウレオルスが言葉にする
圧死
窒息死
感電死
などなど上条を殺すために言葉にしているもの
「ホントに言葉一つで現実をゆがめてるみたいだな」
「銃をこの手に、弾丸は魔弾、用途は射出、数は一つで十二分！人間の動体視力を超える速度にて……射出を開始せよ！！」
アウレオルスが銃を構え上条に向けて放つ
だが弾丸は上条の横をそれる
その弾丸は後ろの壁に当たり後ろの壁は大破する
なんだあの威力は
「簡単には殺さん。もう少し私を楽しませよ」
「……っ」
上条は後ずさる

「先の手順を量産！両の暗機銃にて同時射出」

弾丸が上条に当たる

「ぐあああああ」

だが上条は無事だ

「ハッハッハ！！言ったろう、簡単には殺さんとなぁ！」

アウレオルスが高笑いする

「準備は万端！両の暗機銃、同時射出を、」

「フン、なんだそれは」

ステイルがアウレオルスの言葉を遮る

「本当に言葉一つで現実を歪めてるみたいじゃないか」

確かに

「当然。黄金錬成は錬金術の到達点、今や世界」

「だったら、何故、吸血殺しを必要とした？」

そういうことか

その一言でアウレオルスの表情が変わる

「作ればいいじゃないか吸血鬼ぐらい。言葉一つで命じるままに」

その言葉に上条が反応する

「なぜだ錬金術師。なぜ黄金練成とやらで吸血鬼を作らなかった。いやそれ以前に…」

「宙を舞え！ロンドンの神父！！」

その言葉でステイルは宙へ浮いた

「全てを言葉のままに歪められるのなら」

「弾けよ！！ルーンの魔術師！！」

アウレオルスそう言葉にした途端
ステイルの肉体がはじけ飛ぶ。服が飛び散り、皮膚と肉が飛び散り、血が飛び散る。上条がその光景を見てうずくまる。しばらく何かを考えた後、上条は立ち上がりアウレオルスを見る

グロいな

「さて、貴様の自身の源はその右手だったな」
アウレオルスが銃を弾丸ではなく刀身に変更して言い放つ
「ならばまずはその右手を切断する事にしよう」

野郎！

アウレオルスは銃を構える

「暗機銃！その刀身を回転射出せよ！！」
銃から刃が放たれる
その刃は
上条の右手を切断した

「フハハ「ふふふ！！」なっ！」
アウレオルスが笑う
だがその笑いを遮り上条は狂ったように笑う

当麻？

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

「な…なんだコイツは！！」
アウレオルスが後ずさる

上条がアウレオルスを追い詰める

「あ……暗機銃！！先の手順を複製！獲物の首を切断させる為にその刀身を射出せよ！！」

銃から刃が放たれる
だが、それは上条をあたる前に消え去る。

「なっ！て、手順を量産！両の刀身を一斉射出！！」

いくつもの刃が放たれる

だが上条には当たる前にすべて霧散する。

あれは?、いや、当麻、じゃない?

「だ、断頭の刃を無数に配置!!速やかにその身体を解体せよ!!」

いくつもの刃が上条に落ちる

だがそれはまるでなにかにかき消されるように消えた

「オイ錬金術師、テメェ、まさかこの程度で俺の幻想殺しを潰せるとか思ってんじゃねぇだろうな?」

「ひぃ!!」

アウレオルスがハリを取り出そうとするが地面に落ちる

アウレオルスはそれを集めて拾おうとするが

「雑念を掻き消せないよなぁ?どうした、言葉にしてみろよ」

上条がアウレオルスに近づく

何が起きてるかわからない。

「言葉のままに……歪めてみろよ」

「来るなアアアアアアアアア」

アウレオルスは叫ぶ

そして机まで逃げる

、あれで隠れたつもりか

「なっ!」

うそっ!

アウレオルスの目の前には無傷のステイルが立っていた

「敵いっこねぇよなぁ！！」

「ハッ」

アウレオルスの背後に上条が立つ

「なぜならテメェの能力は……、言葉のままに現実を歪める能力じゃなく……考えた事をそのまま現実にしちまう…」

「能力なんだからなあああああああああああああ」

その瞬間ないはずの上条の腕から龍の顎が現れアウレオルスに襲い掛かる

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ」

アウレオレスは無傷だが、内面は酷いことになってるだろう。

「上条！？」

やはり倒れてしまい、駆け寄る。

だが、

「なんだ？あれは！」

ステイルが口にした。

そちらには、

生気のない皮膚の色をした焦点の定まらない集団がいた。
姫神につられて…
ボワア、
「ａｐｊｔｍｄｇａｇｔｐｊｇｍｗｕｙ」
口が勝手に開いた
俺の意志ではなく、勝手に翼が顕れ、集団に迫る。
俺には、視認できたが、奴らに視認できない早さで、奴らを……
惨殺した。
「なっ！」
砕ける散る肉片、宙を舞う肉塊、飛び散る血飛沫、そして、最後に
生き残っていた片腕と右足を失った女の子に翼が迫る、
「やめろ、」
止まれよ、
「やめろよ」
怯えている、止めないと
翼は止まった

「よかっ、！」
ニヤァ、少女が獰猛な笑みを浮かべ、襲い掛かる！
「あ」
グシャッ！
目の前で、少女だった物は肉片と化した。
「う、うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
なんだ、……これは……。
恐怖と拒絶感で俺は正気を保てなくなった。
そして、意識を保てなくなり、そして、手放した。
次に目が覚めると、病院だった。
そこにステイルがいた。
隣のベッドに当麻が寝ていた。
その時に、アウレオルスのその後などを説明してくれた。
吹寄には記憶はなかったそうだ。

だが、

俺は今回、命を刈り取った。数はよく覚えてない、でも殺した。この事実は変わらない。

やらなきゃ、やられてた、だけど、死んだみんなに、なんて言えばいいんだ……

この力は大切なものを守る力、なのに……。

汚れた俺に、力を持つ資格はあるのだろうか？

今日は、何も考えない。俺はまた、意識を手放した。

龍の顎と殺戮の翼（後書き）

上野君をステップアップさせるためです。

理想が揺れてますけど、どうなるかな？

狂気の沙汰に悩む少女（前書き）

はい、やっと三巻です。もどかしい

狂気の沙汰に悩む少女

8月20日、俺は部屋にいた。ただ、やることがないから暇つぶしに演算の復習や勉学に勤しんでいた。

グシャッ！

あの音と光景、感触は、忘れられない。翼だから感覚はないと思っていたが、感覚まで繋がっていたのだ（痛覚はない、まったく、なんて作りだ）だから、人肉を潰した感触が染み付いて、忘れられない、気が狂いそうだ。

たくっ、コーヒーでも飲むか。ん？

外が騒がしい、

何だ？とドアを開けてみると

インデックスに姫神、ゴーグルつけた御坂？がいて、当麻が缶を大量に運んでいた。

「修羅場か……」

「……違う」

何やら隣はノミの巣窟になっているらしい。

猫にも蔓延している、当麻もインデックスも痒いという。

「しゃあ、ねえなあ」

「要はノミを駆逐すればよいのですね。とミサカは確認をとります。」

……は？

「御坂が壊れた？」

「初対面の方への配慮のカケラもありませんね、とミサカは半ば、呆れてみます」

「初対面？」

当麻が説明すると、彼女はアイツの妹らしい、

うん、納得。

その後彼女が放電でノミを駆除した。部屋はちなみに俺が。

彼女は、感謝の言葉も聞かず、帰って言った。

なんか不思議な子だったな

次の日、俺は当麻と共に学校から呼び出しをくらった。

何で、俺まで、と思ったら、能力測定をするそうだ。そういえば、

あん時、出し惜しみしてねぇし、軽ーく使ってたな、俺。

目をつけられるのが嫌なので、憂さ晴らしに機械を壊すため、ベクトル操作でも使ってやった。見せ付けるために（新しく、演算パターンを読み込み、開発に成功したのだ、）幸い、能力の詳細は、伝わってない。風を操る＝風のベクトルを操ったということになり、大事には至らなかった。

ただ、

唖然とする教師、粉々になる機械。

俺は同じような能力である第一位と同着の一位になった。

当麻は呆れていた。いや、お前の力のほうがおかしいから。

他校からの誘いがあったが、蹴った。ここは空気がいいからな。素直になれる。（力以外）

当麻は、小萌先生との個人授業を受けていた。

「いや、これ何の関係が？」

「力の本質を理解するため、初歩を勉強するのです」

「けど、伸びないものは伸びませんよ。」

ぶっとんでるけどな

「上条ちゃん、努力が全てとは言いませんが、しない人は伸びませ

ん～！常盤台の御坂さんは低能力者から超能力者になったんですよ！」

「……助けてくれ、高貴」

「すまん、こっちも能力についてのレポートをたくさんもらってしまい、暇がない。」

「不幸だ、」

「同じく」

「真面目にしなさいです～！」

補習の後、俺達は、商店街を歩いていた。

「あ、」

「む？」

俺達は、見慣れた奴、ゴーグルをつけてない御坂を見つけた。（ホントに見分けがつかん。）

「よー、そっちも今帰りか～？」

当麻が声をかける。

何やってんだ、電撃をくら……

「ああ、あんたらか。今は疲れてるから勝負は勘弁してやるわ、で、なに？」

ゑ？

「いや、道が同じなら何となく一緒に帰りたいかなあと」

天然ジゴロ全開だね！当麻！

作者の声

いや、お前もだよ

「ほう？」

御坂が不敵に笑う。

「常盤台のお嬢様に向かって、そんな台詞を吐くとはね？どれほどの男どもがねがっているか」

「自覚があるって、最悪だよな」

「ははは、」

「冗談よ馬鹿。」

と笑いながら、言ってきた。

「学校だけで決めるのでなく、何をしているかが重要。そこはわきまえてるわよ」

「妹と一緒じゃあねえの？いろいろ、助かったから、お礼したいんだけど」

「あれ、そういやアイツってどこの学校？常盤台の制服着てたけど、転入生か？」

一瞬、顔に動揺が走ったように見えた。

「……へぇ～、アイツのこと気になるの？」

「いや、ちが…「見た目同じでも、妹を選ぶんだ？」だから、違うって～！」

「微笑ましいね～」

軽くからかってみた。そしたら、

「「違うから（だろ）！！」」

息ピッタリ、だが、つっこむのはここまでだな。

空に目を向けるとお馴染みの飛行船が浮かんでいた。

あれは、太陽光発電で、船内の炭酸ガスをヒーターで熱し、浮力を生み出し、モーターを回し、動力を得るのだ。だから、燃料はいらない。

御坂はあれが嫌いらしい。

なんでも、機械に人が従うからららしい。

「あれか？『樹形図の設計者』だっけ？」

当麻が言うそれは、世界で一番賢いスーパーコンピューターで、天気予報から天気予言に進化した、トンデモ機械だ。その他にも薬物、生理、電子、計画、地球の災害予言とかもしてるらしい。ホントふざけた能力だよ。

作者
お前らも十分ふざけているぞ！

だが、敵も多いのも事実だ。だから、厳重に保管されてたりする。

御坂と当麻の言い争いの後（少し、ギリギリな話なので割愛します）、御坂と別れた。

っと、思ったらまた御坂に会った。いや、御坂妹だった。

インデックスとスフィンクスの時と同じだな。当麻には悪いが、ガシッ！　ぬ？

「逃げんな……てめぇも飼え、アイツだけで俺は限界だ……」

ええ～

「不幸だ」

「あなたはこの猫を見捨てるのですね、とミサカは心の中で、人で無しと軽蔑しかけたりします」

グサッ、ぐぅ、それは……

「く、わかったよ。」

御坂と同じだな、ガンコな所は…

名前は彼女のセンスが酷いので、未定だ。

「貴方なら、この子も安心です、とミサカはあの二人と貴方を比較して、安心したりします、」

「まあ、あいつらも悪意は……」

と当麻が弁護がしようとするが、

「重ねて申し上げます、あれはもはや、いつ猫の生命が消えてもおかしくありません、だいたい……」

長い＝割愛

「む、今失礼なことを考えていましたね、とミサカは自身の第六感が告げています」

「「カンガエテイマセン」」

その後、飼育についての知識を得るため、俺達は本屋に行った。御坂は黒猫の面倒を見るため、外で待機した。

当麻が中々決まらず、俺が全て決めた。

俺達は店を出て、妹を探す。

あれ？

御坂妹がいない。

得体の知れない感覚が襲う。直感がつげる、あっちだ

程なくすると、片方の靴が転がっていた。
辺りもコンクリートが削れたりして、尋常ではない雰囲気が醸し出されていた。
そして、奥に
御坂妹が血の海を作り、惨殺されていた。

「ウ…、あ……」
当麻は、今にも、気絶しそうだ。

「……」
思い出すのは、あの吸血鬼の女の子。あの時よりかは、……マシだ。あれは原形すら留めてなかった。

同時に怒りが込み上げる、何をしている上野高貴。お前はまた『守れなかったのか？』

今は当麻を引き、現場から離れ、アンチスキルを呼ぶ、
その後、アンチスキルの方と現場に向かう。だが、
彼女の死体所か、血痕一つなかった。

「なんで？」

「馬鹿な！」

ない、どこにも。

俺達は彼が帰っても、呆然としたままだった。

死体が回収されたのか？

でも、どうして？

そうこうしてると足音がきこえた、それも複数、そして、最初の人影は……

寝袋を抱えた御坂妹だった。

「な……？」

俺は声が出なかった

じゃあ、あれは……一体？

「申し訳ありません、作業を終えたら、そちらに戻る予定でした。とミサカは謝罪します」

確かに彼女だが、あの袋は……

透視能力で見たことを後悔した。

「なっ！？」
そんな！　あれは……！

「いや、良かった……お前が無事で良かった。なんだったんだろ、あれ？」

「確かにミサカは死亡しましたよ、とミサカは報告します。」

「は？」

そこから彼女は、平然と説明をする。途中、次々と同じ顔をした妹が現れ、断片的にしか聞き取れない。

クローン、実験、妹達？

彼女達が立ち去った後も、俺達は再び呆然としていた。

御坂は、このことを知っているのか？……いや、知っているだろう、だが、……彼女は何を抱えている？それに、　あいつらが殺される理由は？

当麻も同じことを考えていたようだ。

ならば、やることは一つ。そう、……アイツに会わなければいけない。

そして、今、俺達はアイツの部屋にいる。
御坂は外出中でいないが、中には白井がいた。

「すまないな、白井。こんな時間に来るのは迷惑だったかな？」

「いえいえ、構いませんわ、ただ、貴方がここまで動くとは余程のことなんですのね」

「……すまないが、それは言えない。恋愛関係ではないから安心してくれ。」

「そうですか」

「高貴、知り合いなのか？」

「ああ、まあな」

それから俺達は、御坂についてのことを白井に聞かせてもらった。
彼女の日常での立ち位置、俺達に対するがさつな態度、もしかしたら、あれが本来の御坂御琴だったのかもしれない。

間違いない、彼女は事件に巻き込まれている、それも自身の意志に関係なく。そう思えたんだ。もしかしたら、反対なのか……ありえない。アイツとは短い間だが、そんな人間にはどうしても見えなか

った。

そう考えてると、寮監がやって来る、と白井が慌て、俺は瞬間移動で部屋の外に、当麻はベットの下に押し込まれた。

その後、白井は寮監と出て行ってしまった。

部屋に再び入ると、

「うわっ、引っ掻くな！」

と声がした。

それから、声を出さない。うん？

すると、当麻がはい出てきた。何か見つけたのか？

当麻の持つ紙には、信じられない事が記されていた、

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　御坂

「筋ジストロフィー……」

体の筋肉が動かなくなり、最悪死に至る病のことだ。

かつて、そんな病にかかった人達を救いたいと願う科学者がいた。

「君の力が必要なんだ」

私は信じた。誰かは分からないけど、それで苦しんでる誰かが救われるなら。

確かに当初はそうだったのだろう。

でも、どこで間違えた。どうしてこうなった。

私はこんな結末は望んでいなかった。

助けて、と声をあげたかった。

漠然と、あいつらの顔が浮かんだ、

強い力を持ち、いつも誰かの為にその力を振るう、空想上のヒーローみたいなやつだけど、自身の命を省みないような生き方をする、危うい人、

そして、七人しかいない超能力者をあしらう力を持ち、無能力者と呼ばれる前者の友達。そして、私の電撃を防ぎきる、誰とでも分け

隔てなく、接することのできる強い人。

でも、私だけ助けを求めてもいいのだろうか？

もう大分、あの子達は殺された。それなのに……。

……アイツもこんな気持ちになってたのかな、生き残った時。味わってみないと分からない。

今になっておもう。

アイツの生き方が少しだけ理解できたかなと。

足音が聞こえた

え？

振り向いたら、彼等がいた。

「どうして、ここに……」

ヒーローが現れた。

狂気の沙汰に悩む少女（後書き）

さて、違和感あったな。うん、大分まともになったと思ったら駄文でした。

ちなみに、次は、翼が出てきません。

第一位対第一位！　そして、狂気の終焉（前書き）

ふむ、反射が相殺されると上野君が有利なので、攻撃する度に、どちらもダメージを負う設定にしました。無理矢理感がすごい。

第一位対第一位！　そして、狂気の終焉

ここは鉄橋。

「何やってんだよ……お前」

上条が御坂に聞く

「…ふん、どこで何してようが勝手じゃない。私はレベル５の超電磁砲なのよ?不良に襲われたって大丈夫なのよ」

御坂は上条に言い放つ

「アンタに言われる筋合いなんてないんだけど」

「……やめろよ」

上条が呟く

「やめろって何を?自販機に蹴り入れるような私に今更何をいって……」

御坂がそう言うと上条が懐から何かの書類を出す

『絶対能力進化実験』

「……！」

御坂が動揺する

「あーあ」

しかし動揺、はすぐに消える

「何でこんなことしちゃうかなぁ？その報告書持ってるって事はあんた達私の部屋に勝手に上がりこんだのよね？ぬいぐるみん中まで探すなんて小姑並よ……本来なら死刑よ？死刑」

御坂……

それに『達』、だと？

「俺はそこまでじゃない。勝手にぬいぐるみの中まで詳しく探したのはフラグメイカーの上条だけだ」

真実を言う。

作者

お前もだ

「オイィィィ！！なんてこと言うんだてめぇぇぇぇ！！」

俺の言葉がよほど胸にきたらしい

「あっそ。それで？あんた達は私が心配だと思ったの？それとも許せないと思ったの？」

上条は迷う、しかしすぐに……

そして俺は、迷いなく、

「「心配に決まってんだろ」」

俺と上条の声が重なる

「勝手に部屋に上がったことは謝る。けどこのレポート……まともな手段で手に入れたものとは思えない。それに地図……あの赤い×印はなんだ？アレじゃまるで……」

確かに上条の持つ地図には×印がいくつか付いている。あれは言うまでもなく……

「撃墜マークのように見えた、かしら……合ってるわよ、それで」

御坂は続ける

「研究所の機材って一台数億とかするでしょ？アレを私の能力で根こそぎドカン！研究所は閉鎖、実験は永久凍結」

御坂はまだ続ける

「……のハズ、だったんだけどね」

「はずだった？」

「研究所を潰すのは簡単なのよ」

とんでもないこといううね、まあ御坂らしいけどね、

俺はやらんよ！

「だけど、実験は他の研究所に拾われる。前人未踏の絶対能力ってのがよっぽど美味しく見えるのね、お偉いさんには」

「でも、レポートはあるんだろ？こいつを警備員にでも渡せば……」

「……上条、この街は衛星で常に監視されているんだぞ？だから……」

「あ、」

黙認されている。

御坂が突然歩き出す

「どこに行く気だ？」

「実験は今夜も行われる……コレは私の引き起こした問題よ、私の手でケリをつけてやる！」

御坂は先へ進もうとする

俺と上条は御坂の前に立ちはだかった

「待てよ」

「何よ……どいて」

「嫌だ」

「お前が考えてることは……」

「お前に一方通行は倒せない」

当麻が言う。

御坂の顔色が変わる

「一方通行とお前じゃ戦力差が離れすぎてる。お前……死ぬ気か？」

当麻は御坂に問う

「……超電磁砲を１２８回殺せば一方通行は絶対能力へと進化する事が出来る」

だけどもし、と御坂はつける

「私にそれだけの価値が無かったら？」

上条の表情が変わる

俺は、信じられなかった。だから

「本当に、死ぬ気、なのか？」

「そうよ・・・だからジャマしないで」

御坂がこちらをにらむ

「そんなやり方で妹達が救われても、あいつらは喜ぶとは思わない」

「……アンタに私の決断を否定できるの？」

「……」

くっ、言い返せん。

「だけど、もう一度樹形図の設計者を使って実験が再開されちまうんじゃねぇのか！？」

上条が御坂に問う

「大丈夫・・・それは無いわ」

御坂が断言する

「樹形図の設計者は約二週間前に地上からの原因不明の攻撃で撃墜されてるの。上は隠し通そうとしてるみたいだけどね」

「2週間前って確か……」

アレか、

俺は思い出したようにそう呟いた

「……さぁ、分かったらどいてよ」

御坂が当麻と俺を通り抜けようとする

「どかねぇよ」

上条がそう呟いた瞬間に御坂が威嚇の電撃を放つ

だがコントロールはうまくいかないようで

「危なっ」

俺に掠った。

「どけって言ってんのよ」

「嫌だ」

「そう……妹達の命なんてどうでもいいって言うのね」

御坂は叫ぶ

「だったら……力ずくで止めてみなさいよ！！！！！アンタ達がどんな力を持ってるか未だに分かんないけど……今回だけは！負けるわけには行かないの！！」

バチバチバチッ！

「じゃないと……ホントに死ぬわよ！」

御坂が電撃を放つ。
その衝撃で猫が逃げた
上条は後ずさりもしない
ただ手を上げた

当麻？

「な、何やってんのよアンタ……戦えって言ってんのよ！！」

「俺は、戦わない」
上条はそう言い放つ

「戦わ、ない」

「……本当に……死ぬわよ」

目が本気だった
御坂が電撃を放つ

だが一発も当たらない
「くっそ……戦えって……言ってんのよ！！」
上条の上に特大の雷が落ちた
「当麻！！」
そして当麻は倒れた
「え？」
御坂が動揺している。
「なん、で……」
「……当麻の能力は幻想殺しというんだ。その力を宿すのは右手のみ、だから右手が触れなければ力は打ち消せない……」
「……どう、し、て……」
「お前に拳を向けたくなかったんだろう。」
御坂は黙る。そして、
「あの子達を救うには、もう私が死ぬしかない！けど、もういいじゃない！少ない犠牲で大勢が救われることは理に適ってるじゃない！」
「だから、……アンタも、どいてよ」
「……俺は当麻ほど、甘くはないぞ……」

「うわあぁぁぁ！」

超電磁砲が襲う。彼女の代名詞が。

その代名詞を、……破壊する。

キィィィン！！！

反射、

「……どうして、アイツも……アンタも……、邪魔をするの？……」

「なんで、私の夢を、邪魔、するの？」

一方通行か、

「……当麻と同じだ、お前とあいつらを助けたい、それだけ」

「私は一万もの人間を見殺しにした悪党なのよ「それでも、当麻を殺せなかった」、え」

当麻はちゃんと生きています。

「今のお前は、どっちなのかな？」

「……」

「俺は、アイツを、討つ。」

奴だけは、奴だけは、許さない。

俺は奴を探すため、当麻を御坂に預け、（何も言わなかったが）この場を離れた。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　上条当麻

意識がはっきりしない。だが考えろ、何か、何か手は……

学園都市最強の一方通行をさらに強くするための実験。……

……

あっ、そうか。

アイツを倒せば、この実験は成り立たない。

目を開けると、御坂がいた。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

見つけた。

御坂妹をやはり蹂躙していた。

「おい、この場合は始末していいのか？」

ブチッ

「予想以上の屑だな、お前」

「はっ、三下が、ほえてんじゃねえよ」

「なんで、」

妹が問う。

決まってるだろ

「助けたいから。だって、お前はお前だろ」

「なっ」

ドゴオーン！

後、何を言ってるかは分からない、つまんないこと言ってると思うが。

奴が突進してきた。神経活性、肉体強化はもはや、オート状態だった。まるで、それが本来の俺の身体能力のように。

奴の動きが読める。

こいつはベクトル操作で、加速してるだけ、

「おそい」

反射を使い、拳を奴の腹に入れる。

「ぐっ」

「なっ！」

く、こちらも衝撃を受けたか。どうやら、どちらも反射を受けるようだ、放った攻撃と同じ衝撃を。

「はっ、なんだてめぇ、」

「お前と同じ、超能力者、そして、今使ったのはベクトル操作」

「何んだと？」

「互いに盾は使えない、そして、矛だけが残った、……いくぞ最強！、覚悟はできているか！」

「はっ、なめてんじゃねえぞ、三下があぁぁ！」

互いの攻撃が通り、同じだけのダメージが来るなら、血流操作をした段階で、俺も奴も死ぬ、か

それは奴も知っている、こちらもあんな奴に命をくれてやる気など、毛頭ない。

これは、ダメージを受け続けても、最後にたっていた方が勝ちだ。

我慢比べだ。

攻撃の嵐を奴にぶつける。

負けじと奴もカウンターを入れてくる。

「「ぐっ！」」

達人のそれに匹敵する拳や蹴りが奴に、そして俺に入る。

喰らう衝撃と攻撃の反射が襲う。だが、それがどうした、

風を使い、体に膜を張る。若干衝撃を和らげる。

この勝負俺の……

「そこまでです。上野高貴」

「なっ？」

「え？」

こいつら一体？

「貴方は実験に参加してはなりません。」

「……本気でいってるのか？」

「ええ、彼女達の命は、こちらが預かっています。」

「な、に？」

「貴方だと、プランを破壊しかねないので、」

「くっ」

そういって奴らは消えた。

「なら、てめぇは攻撃できないんだよなあァ？」

「さっきの借りィ、返させてもらうぜェ！」

マズイ！

ドゴオッ

「え？」

「ぐはあ！？」

当麻か？

「無事か？」

「ああ、体は……」

「問題ない」

「ホント今日はァギャラリーが多いなァ。」

「当麻、すまん、俺は手出しできん。」

「っ！……なんで」

「……プランを守るため、らしい。だから、」

「……分かった、御坂妹を頼む。」

「……了解、すまない」

当麻と奴の戦いは、喧嘩慣れした当麻の右手だけの攻撃に奴が翻弄されていた。

「……」

「……加勢しないの？」
後ろから声が聞こえる。御坂だ。
「いや、そんなことしたら実験が続いてしまう。俺は上条が死にそうになったら加勢する」
本当のことは言えない。
「アンタねぇ……あいつが第1位に勝てると思ってるの！？」
「……思ってるさ。見ろよ」
俺は上条と一方通行の方を指差す
「？……！？」
御坂は上条の方を見て目を見開く
上条の拳を一方的に浴びて押されている一方通行がいた
「う……そ……」
さっきより、激しいな。
だが、瞬間
強い風が吹く
そして、上条が吹き飛ばされた。
高く飛ばされた上条はコンテナにぶつかりながら落ちてゆく。
「……い、や、……」
「くそっ」
奴の目の前に立った。
「またテメェか」
一方通行は笑っている

「お前をぶっ殺さねェと俺は無敵じゃねェ」

「……」

「学園都市最強？絶対能力？そんなもンはもォいらねェ！今さっき愉快な事思いついちまってなァ！そいつでテメェをぶっ殺しゃァ俺を止められる奴なンざいねェンだよ！」

一方通行は禍々しい笑みを浮かべながら言う

「死ねェ！」

一方通行は空に手を掲げる

すると風が一方通行に向かって吹く。いや、吹いているのではない。集まっている。風が一方通行に集まっている

プラズマか、

「止まりなさい、一方通行！」

「なっ」

「ごめん、やっぱり私が……」

ゴウッ！

プラズマが崩れた。

「なにィ？」

「え？」

「……ナイスタイミング、」
アイツらが奴の操作を妨害したのだろう。

「終りだ、一方通行」
俺は上条が倒れていたところを見る
そこにはもう誰もいない

「!?」

既に上条は一方通行の懐に入っていた

一方通行は慌てて上条を殺そうと右手を出す

上条は体制を崩し一方通行の手を避けた一方通行は今度は左手を出したが
右手に弾かれてしまい、これで一方通行に完璧な隙が出来る。上条は拳を握り締める
「歯ぁくいしばれよ最強」

「俺の最弱は、ちっとばっか響くぞ!!!!!」
拳が一方通行の顔面に突き刺さった。

奴は倒れ、当麻も膝をついた、

「……」

俺は、奴の倒れた場所に向かう。

今なら殺れる、

キイィィィン！

超振動する風の刃を振り下ろす、

いや、できなかった。当麻が右手で触れたからだ。

「なぜ止める？」

「本気でいってんのか？」

「あいつらの仇だ、ここで、っ！！」

バチン！

御坂にぶたれた。

「アンタにそんなことはさせない。」

「……だが、」

「守る力じゃないの？それは」

「……そう、だな」

血が上っていた。止めてくれなかったら、後でまた後悔していたかもしれない。

こうして、一万人以上の犠牲を払った実験は、完全に破壊された。

第一位対第一位！　そして、狂気の終焉（後書き）

さあ、次は上野君にとって因縁の、御使堕編です。

俺はこの世界の終わり（ある意味の）を見た（前書き）

大天使顕る

俺はこの世界の終わり（ある意味の）を見た

一方通行を倒した数日後、俺は、なぜか大勢の人達に囲まれていな。

なにやら最強と呼ばれていた一方通行が敗れたことが明るみに出たそうだ。さらに、倒したのが、俺達であることも広まったらしい。

「不幸だ」

で、当麻は入院中で、闘える状態ではなく、本当に倒したの？という感じなので、狙われてない。

襲い掛かる腕自慢共。とりあえず、突風で薙ぎ払う。残った奴らは、肉弾戦（反則じみた速度＝人の目で見えない）で蹂躙し、辺りには、人の山ができた。

「大変ね、あんた」

御坂がいつの間にかいた。

「……気づいてたなら、助けてくれてよ」

「……入り込む余地がなかったわよ、私を巻き込む気？」

あの後、なんだかんだで立ち直ったそうだ。女って、逞しいな。

俺はいつも通りな生活をしている。これから当麻の所に向かうのだ。

どうやら今日退院するらしい。

部屋に行くと、当麻となんか知らん大人が話していた。

話によると、俺が学園都市最強になったから、いろいろと町が混乱してるらしい。確か、昨日も理由もなく襲われたな。

そこで、ほとぼりが冷めるまで、俺達に学園都市から離れてほしいという。

発信機なし、という条件を彼等が呑むという形で、決まった。

そして、今俺達は海の家『わだつみ』にいるのだが、

「おにいちゃ～ん！」

あれ？　紫穂ってこっちに来たっけ、呼び方が『兄様』に変わったよな？　そうか、乙姫が来るつってたな。

俺達は、声の方に目を向ける。

「「ゑ？」」

御坂美琴だった。

「当麻お兄ちゃんに高貴お兄ちゃん～！会いたかったよ～！」

はぁぁぁぁぁぁ？

「うわっ、」

当麻に抱き着いた、えぇぇぇぇ！？

「へ？」

今度は、俺に抱き着いてきた。

「……ボンッ！」

俺は、考えることをやめた

「当麻、ツッコムのは後にしよう」

「ていうか、なんで御坂がいる！？それになんだ、その妹キャラは！」

「私は妹だよ？どうかしたの？」

「当麻、何をしている？」

刀夜さんがやって来た。よかった、まともだ。

「あの、刀夜さん、乙姫ちゃんは……」

「あらあら、当麻さん的には、久し振りに乙姫ちゃんに会ったから、緊張しているのかしら？」

いんでっくす？

「てめえ、ここで何をしている」

当麻がキレた。

「あらあら、当麻さん的には「さっき部屋にいたのに、なんだこのドッキリは！、それにその口調はなんだ、その「当麻！」え？」」

「なんだ、じゃない母さんに向かってその態度は、」
本気で刀夜さんがキレた。
貴方の目は節穴ですか？
「母さんに向かって、なんだと聞いている」
「父さん、アンタはこれが……Ｒ１５の映画からつまみ出されるようなこの女の子が母親で、これが…このビリビリ女が俺の妹だと？」
「はあ～」
しばらくお待ちください。上条警報が発令中です。
当麻は先に宿にいってしまった。
「どうかしたのか？」
「当麻お兄ちゃん、どうかしたの？」
ツッコンじゃだめだ、ツッコンじゃだめだ、ツッコンじゃだめだ、ツッコンじゃだめだ、
「うん、なんか疲れてるんだろう、当麻も、俺も……」
「だよね～」
「そうか、しっかり休めよ、夏休みなんだから、」
「あらあら、高貴さん的には、疲れてるようには見えませんけど…

…」

宿に戻ると、ロリコンと御坂妹がコスプレしていた。

テレビには、カエルがいた、小萌先生がいた、白井が大統領？

インデックスが青髪になっていた。

上条警報再発令中、しばらくお待ちください。

当麻が縛られた後、みんなで海水浴に行った。

うん、目のやり場に困る、

後で、当麻も来た。

御坂がスク水とは、あわない、後、インデックスが過激な水着を着ていた。

そして、青髪がワンピース水着を着ていた。

上条警報再び再発令～

しばらくお待ちください。

ここまで来ると、おかしい。一体何が？

外は、目に毒だった。子供の警察官だったり、男装の麗人だったり、スカートはいた、……自主規制します。自主規制します。自主規制します。自主規制します。みたいな人で溢れていた。

あそこにいるのは土御門だけど、別人だよなあ

「おーい、コーヤン」

は？

「お前、大丈夫なのか？」

「その様子だと、影響は受けてないようだにゃ～」

「話が聞きたい。」

何やら、世界各地で大魔術『御使堕し』とやらがおこってるらしい。
そして、当麻や俺を中心に展開してるらしい。

土御門も神裂は結界はったそうだが、少し影響を受けたらしい、土御門はアイドル、神裂はロリコン、くくっ、

当麻が過激な女の子と過激な女（神裂）と一緒にいた。

彼女はミーシャと言うそうだ。なんでも、ロシアから来たそうだ。

なんでも、当麻を犯人と考え、襲い掛かったとか、

俺達はその後、宿で対策を考えることにした。
その夕方、森に逃げた当麻（あの空間から脱出）を探していたら
！？

そちらにむかうと男が当麻を殺そうとしていた。

俺は何も考えずに、風のベクトルで奴を薙ぎ払う。（手加減はした）

ドゴオォォ！

「ひぎいあああ？」

地面にたたきつけられる。

奴は訳のわからない言葉を喚く、

エンゼル？

コイツか？　とりあえず、ベクトル強化で（重ねて言うが加減はした）蹴飛ばす。外なら、使いやすい、が俺の能力は隠密向きじゃない。

あ、

俺はいつかやった、片手に電撃を溜めた技？を思い出した。

バチバチバチバチ！

右手に電撃を展開させ、奴の腹に突き出す。奴がナイフを振り回してきたが、右手で、紙のように切り裂く、そして、

「いぎあぁぁぁぁ！」

威力を落とし、スタンガンみたいに痺れさせ、気絶させる。

「御手柄だぜい、高貴。」

これで終わり、か。随分と呆気ない。

だが、何か引っ掛かる、だが、なんだ……

そうか、

俺は考えないようにしていたんだ。刀夜さんは、入れ替わってなかった。あの人は、魔術には遠い筈だ。だから、ありえない、と。

土御門達が戻ってきた。やはり、奴は犯人じゃなかったらしい。

言えない。言ったら刀夜さんは……。

悶々としたまま、俺は宿に戻った。

あの後、男は世間を騒がす殺人犯だったので、警察に突き出した。

次の日、ミーシャが詩菜さん（インデックス）と当麻の家に向かった。そして、慌てる当麻。

「どうかしたのか？」

当麻は昨日の事を説明してくれた。

彼女が御使堕しについて明言したこと、右手に触れなかったこと。

犯人は二人？

そんなことを考えていたら、当麻は土御門と共に行ってしまっていた。

悶々としたまま、昼を過ぎた。

早く帰ってこないかなあ？

……刀夜さんと話をするべきだ。でも、もし犯人だったら……俺は恩人を突き出すのか？
俺達兄妹を引き取ってくれたあの人を。

「どうかしたの？お兄ちゃん」

乙姫（御坂）が問い掛けてきた。

「なんでもないよ、それにしても元気だね。」

「……なんだかしばらくしないうちに老けた？」

「まだまだ、高校生してるんだけどな、そう見えるかい？」
苦笑しながら否定した。

「……お兄ちゃん、何か悩み事があるの？」
本当に鋭いな、子供は。……なんていうか取り繕っても、すぐに見破ってしまうね。

「なんでもないよ、お兄ちゃんが強いの知ってるだろ？だから心配しないで」

「……お兄ちゃんは、いつも誰かの為に頑張ってたよね。」

「……」

「本当にヒーローみたいに。……でも、お兄ちゃんの幸せは何なの？」

ほんとに年下かい？

「……俺は今も幸せだよ。本当の家族じゃないけど、それと同じくらいの愛情を感じているから、ね」

「……ホントに大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ」

「……ゴメンネ、変なこと聞いて。」

「いや、心配してくれてありがとな」

乙姫はそういって浜辺を走って行った。

まったく、俺には、過ぎた妹達だよ。

紫穂も乙姫も、本当に優しい子だ。俺にはホントもったいない。

『この力は護る為、誰かを救う為』

そう誓った。ならば、その方法を考えろ、それだけを考えていればいいんだ。

上条刀夜を、助ける。

俺は迷いなく、刀夜さんを探す。

乙姫ちゃんと一緒に浜辺にいた。

「……父さん」

誓ったんだ、俺は……

「どうした？高貴」

「少し、話があるんだ。」

だから、俺は……

「実は、……」

ヒュン！

！水？

水の槍が刀夜さんを襲う！

風で薙ぎ払う。

誰が？　あれは……

ミーシャだった。

「問一、なぜ彼を助ける。」

「父親だからだ。」

「解答一、「高貴！」「当麻？」」

当麻達がやって来る、

「みんな、早く逃げてくれ！」

「馬鹿、何を言っている！」

「コーヤン……」

「一体、何が……」

「お兄ちゃん？」

ミーシャから氷で出来たような翼が展開される。そして、

空が変わった。

幾何学的な模様、それはあの時と酷似していた。

「これは、あの時の……」

「おい、待てよ！魔術ってのは、ここまで出来るのか？」

「人には無理です」

「あれは月の守護者にして、後方を加護する者、旧約においては堕落した都市ゴモラを焼き払い、新約においては聖母に神の子の受胎を告知した者」

人ならぬ威圧感を感じる。

「その名は、『神の力』、常に神の左手に侍る双翼の大天使」

破壊者が、顕れた。

俺はこの世界の終わり（ある意味の）を見た（後書き）

さあ、次回は上野＆神裂対神の力です

堕天使の誓い（前書き）

まあ、ありきたりかな。土御門は個人的にも好きなので、活躍させたい。

圧倒的な存在感が襲う。

本能でわかる、あれは、人が相対していい相手じゃない。

「なんだよ、あれ……」

当麻が呟く。

すると、空の模様の光がいっそう強くなった。

「正気ですか『神の力』！ただ一人を消すために厄災レベルの術式を使うなど……」

堕落した都市を潰したというあれか？

都市を潰した？

当麻と神裂が何を話しているのか、聞こえない。

それほどまでに俺は、このフレーズに衝撃を受けていた。

「私が足止めします。貴方は早く術の解除を、」

「ふざけんな！俺の右手なら……」

「あれがたやすく貴方に接近を許す筈がありません、」

「……くそっ、けど、お前は……」

「この中で、あれの足止めができる者は限られます。……私が適任です。」

「死ぬなよ！、信用してるからな！」

当麻は、放心状態の乙姫と混乱している刀夜さんを引っ張って行った。

「貴方も早く、」

ドクン、

確かめなければいけない。

「……一年前、俺の住んでいた町を破壊したのは、……お前か？」

天使は答えない。

答えの代わりに、小規模の、あの時と酷似した閃光を放ってきた。

「くっ、」

神裂は、躱しつつ、閃光を刀で弾く。

「……」

俺はテレポートと身体強化（以後、神経活性と肉体強化のこと）をし、完璧に避ける。

「……答えるつもりはないんだな。」

まさか、コイツがやったのか？

「ａｊｇｍｇｄａｐｊｐｗｍｇｊｍｔｊｇｃｍｘｐｕ」

白銀の翼を展開し、俺は、奴と対峙する。

「……神裂、下がっててくれ」

「待ちなさい、いくら貴方が何か強い力を持っていても……あれの足止めは厳しい。私も戦います。貴方の邪魔にはなりません」

「そうじゃないんだ、足手まといとかではないんだ。ただ、」

「俺が巻き込んでしまう。」

超音速で、飛翔し、奴との差を一気に詰め、右手の光の刃で一閃した。

遠くにいる存在と思っていた。

奴は顔を歪め、またしても光の雨を展開し、こちらに放ってきた。

この姿になると、すべての身体能力が次元を越えていた。だから、光の雨がかなり遅く見えた。

そしてこちらは、それらの攻撃に比べ、より速く、より高威力で、光を無数に展開し、迎撃した。

奴が放つ光の雨は俺の光に掻き消され、勢いそのままに、奴に直進

する。

奴は光の壁で防ぐが、堪えきれず爆散する。

「……お前は何か知ってるんだろう。だったら教えろよ、あの時何があったんだ？」

まだ沈黙している。

「答えろよ、」

理不尽に大切な居場所を奪われ、その理由も聞けないなんて……

まだ奴は答えない。

「答えろつってんだろォォォォ！」

奴を殴った瞬間に頭に映像が来た。

知らない男がいた。よく解らない術式を展開して、コイツが下界に落ちてきた。

次に目にしたのは、男の命令通りに母さんを殺す、奴の姿。そして、周りは廃墟になっていた。

遅れて、父さんがやってきた。父さんが何かを呟く。そして、

俺の白い翼ではなく、黄金に輝く汚れ無き翼を背中に展開した。

激しい戦闘が始まる。常軌を逸した、人知を越えた戦いは、長時間

継続された。

結果は父さんが奴を倒し、男を殺した。でも、父さんもボロボロだった。

近くに俺が倒れていた、……いや、死んでいた。

父さんは右手を俺にかざした。その後は、光に包まれて、何も解らなかった。

そう、だったんだ。

「……」

ただ分かったのは、あれはあの男が起こしたものだったということ、コイツは利用されていたこと、多分、父さんが俺を助けてくれたこと。

「……これは、父さんから貰った力なんだな……。」

俺は、奴と向き直った。

奴は動かない。こちらをずっと見つめている。

「なら……、俺は父さんを越える…、あんた達が下りてくる必要がないくらい強くなる…、だから、」

俺は右手に光を束ね、剣を作る。

奴も、片手に氷の剣を作る。

「この世界は任せて貰うぞ！！！」

今の俺の全力を『神の力』にぶつける。

刹那、彼女？が微笑んでいるように見えた。

光に飲み込まれ、姿が見えなくなった。

「あれは！？」

神裂が叫んだ先には、宿から溢れた光が何処かに放たれ、何処かに当たり、爆散する光景だった。

宿に向かうと気を失っている当麻、眠っている乙姫、呆然とする刀夜さん、最後に、

血だらけの土御門がいた。

「土御門？」

「なんぜよ？」

「えええええぇぇぇ！！？？」

あの状態で生きてられるのか？

「お前、大丈夫なのか？」

土御門は、上半身を起こし、

「俺はレベル０だけど、肉体再生という俺には中々な能力を持ってたりするぜ、ちなみに後四、五回やっても大丈夫にゃ～」

「なんだそりゃ？」

作者
お前もチートだろうが！

土御門にここで起こったことを教えてもらった。

「そうだったのか……」

「そういや、ねーちんは？」

「無事だよ、『神の力』とは俺が戦った。」

「そうかい」

「驚かないのかい？」

「俺は情報屋だからな。大概のことは知ってる、……後で話がある。ついてきてくれないか？」

「？、分かった」

俺達は刀夜さん達を残して浜辺に行った。

すみません刀夜さん、事情は後程……

「コーヤンは、自分が使う力の正体が分かっているのか？」

「いや、父さんから受け継いだものとしか……」

「そうか、……単刀直入に言う、その力を使うところは、見せないほうがいい、特に魔術側にはな」

「なんで？」

「お前の力は、さっきの『神の力』とはランクが数段上の『光を掲げる者』と呼ばれるものだ」

「なんだそれは……」

「かつて、神の右に座るものとして君臨し、後に堕天した大天使」

「すごいんだな、」

「……そうだ、もし科学側がこんな力を持ってると知れたら、彼等は黙っていない。……お前を巡って戦争が起きてもおかしくない。」

「だが、今まで「その全てで結界を張ったからばれなかったんだ」そんな……」

「俺は戦争になるのは避けたい、何としてもだ、すまないが……」

「分かった、俺が持つべきは守る力、災厄を生み出すようなら使えないからな」

「すまん、コーヤン。今まで隠していて……」

「気にすんな、友達だろ、それにあの時の答えも出たんだ」

「？」

「大切な人達とずっと一緒にいたい、……命を賭けて戦うけど、それは生きるため……、ってな、これで勘弁してくれ」

「……まあ、及第点だな。自殺願望がなくなっただけでもよしとするかにゃ～」

「ははは」

「まあ、ついにシスコんの領域にコーヤンも入ったんじゃないかにゃ～？」

「……はあ、そうじゃないんだ。ただ俺には勿体ないぐらいいい子達だからな。守ってやりたいし、巻き込みたくなかった、……だったのにな」

「……コーヤン、」

乙姫ちゃんも刀夜さんも関わらせてしまった……

「いずればれるぜ、……大きすぎる力は隠し通せない。力のある奴ってのは、理不尽に巻き込まれるもんさ。」

「……でも俺は、後悔だけはしない。これからも、傷ついてる誰かを救いつづけるさ。」

「まったくお前は……あの力を使うなら、連絡してくれ。結界を張れば、隠し通せる。ただ、あんまり使わないでくれよ、結構体力使うし、」

「分かった。助かる。」

「今回のこともでっちあげるから心配しないでくれにゃ～」

「……何から何まですまないな、本当に」

「厄介なのは嫌いなだけにゃ～」

「土御門！」

神裂がやって来た。

「今回の貴方のやり方は納得できません、だいたい……」

神裂のマシンガン小言が展開中、けど、なんか余裕そうだな、土御門。

「いいじゃないか、結果オーライじゃ駄目なのか？」

「ですが、……」

「けどねーちん。またしてもカミヤンとコーヤンに借りを作ってしまったにゃ～これは平謝りじゃダメだぜぃ～」

「いや、俺は別に……」

「コスプレとかどうかにゃ～」

「「は？」」

「おい、土御門？」

「……」

ジャキッ、

「「あっ、」」

「黙れ、このシスコンがあぁぁぁ！！」

神裂が刀を振り回す。

「トンズラだにゃ～」

っていうか、こっちにも斬撃があぁ！

「俺を巻き込むなあァァァァ！！！」

このばか騒ぎは夜まで続けられた。

理不尽だ。

「不幸だあぁぁぁ～！！」

堕天使の誓い（後書き）

なんというか、薄いな。話を濃くしなければ。　転生者は入れれないかも。入れると話がややこしくなる。

次回は、御坂の後輩やら、オッサンやらが出てきます。

一方通行さんの外伝も作ってみようかな？

またなのか？またなのか？またなんだな？平穏が恋しい。（前書き）

アステカの魔術師殿を忘れていました。後は、出来心です。

またなのか？またなのか？またなんだな？平穏が恋しい。

高校生の夏休みをあまり満喫していない、ような気がする。

夏休みは友達と遊びたいしなあ……

よし、明日の土御門達との遊びで存分に楽しむ。

絶対に誰にも侵害させられてなるものか！！

「何にも！？何にも感じないってどういうこと！私はこれでも女の子であって少しはそういった感情を……」

なんか、熱いなあちらは。鈍感だよ全く、これだから当麻は……

作者

お前も学校で何してるのか、分かってるのか！

まあいいか、寝よう。

8月31日

「当麻、宿題頑張れよ。」

憐れみと呆れの目で言う。

「ああ、……まあ記憶がないとはいえ、俺の宿題だからな～」

何やってんだ、俺～　と、唸る当麻。

「なんか帰りに甘い食べ物買ってくるよ。疲れた時には甘いのが一番だからな。」

「サンキュ～、じゃあ、いってら～」

「うん、いってくるよ」

当麻はツケを払うため、俺は夏休みを満喫するため、最後の夏が始まった。

それで今、俺は夏を感じている。

「あーあ、結局今年も空から女の子が降ってきたり雨の日の段ボールの中に猫ミミ少女がいたりしないし、いきなり可愛い許婚がいたりせんかったな～。イベント少なすぎやないか。はあぁ～」

エセピアスが愚痴る。

「ラブコメしたいぜいラブコメしたいぜい。共学なんだから先輩後輩先生クラスメイトに委員長から管理人やらで男性経験皆無のラブコメ新学期を期待するにゃ～」

今のあいつらに女の子を近づかせる訳にはいかないな。

「ははは、そうだね」

「そういや、カミヤンは？」

「宿題を殲滅中だよ」

「ああ、やっぱやってへんかったやんな～」

「カミヤンだからにゃ～」

「……多分二人の願は叶わないと思う。俺はそんな子とはあまり関わりたくないかな」

「はっ、何を言うてんコーヤンは！ボクぁ落下型ヒロインのみならず、儀姉儀妹儀母儀娘双子未亡人先輩後輩同級生女教師幼なじみお嬢様金髪黒髪茶髪銀髪ロングショートボブ縦ロールストレート「いや…もういいから」」

「コーヤンのタイプはなんだにゃ～？」

「真面目な人かな」

「「つまらん（にゃ）」」

「でも、義妹が一番だにゃ～！」

「でもアイツってそこらでお兄ちゃんとかいってなかったけ？」

「そういや、そうやな」

「何だって～！！」

驚きのあまり、にゃ～をつけるのを忘れてる。

「高貴さんじゃないですか。お久しぶりです。」

「お久しぶり～」

「初春さんに佐天さんじゃないか、君達も最後の夏を楽しんでいるのかい？」

「はい、もう明日から学校なんて嫌なんですけど、今日は思いっきり遊ぶことにしたんです！」

「へぇ～」

「初春さん、風紀の仕事は？」

「今日は非番ですから～」

「そうか、うん？どうした二人とも、」

「「この裏切り者がぁ～！！」」

襲い掛かってきた。

「知るかぁぁぁ～！！」

なぜ、こうなる。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　御坂

はあ、なんでこうなったのかしら。

私は漫画を立ち読みしようて外に出ただけなのにな。

「みさかみさか～、また立ち読みしに出かけるのか～？」

「そうだけど」

「なら、いかがわしい漫画を買ってきてほしい、１８禁じゃなくて、兄妹のドロドロしたやつ～」

一体彼女の妹はどんな人なんだろう？

この子みたいに

「義妹は一番～！」

とか叫んでるからしら？

「いや、それはちょっと……アンタは一応メイドさん見習いなんだからお客さんにお使いを頼まないの」

はあ、なんかもう、食堂から出ようかな？

それで、現在コンビニに向かう途中なんだけど、

「あっ、御坂さんじゃないですか。おはようございます。これからどちらへ？自分も途中までご一緒しても構いませんか？」

またか……、

私より一つ年上で背が高く、線が細いけどスポーツマンのような体型で、髪もさらさら、白い肌。おまけにイケメン。

海原光貴。

なんで、私に付きまとうのかしら？

「御坂さん？」

「ええっ！？」

顔を覗き込んできた。

ちょっと、いきなり何を？

「？？、……これからどこかへ行くのですか？」

「ええと……」

「？、特に急ぎの用がなければ、ご一緒しませんか？」

「いや、私にも用事が……」

「では早く行きませんか？ご一緒しますよ」

「えーと、」

うわー、どうしよう

「もしかして、自分とは行きづらい場所ですか？」

「そ、そう、そうなのよ下着売場とか、ほら、辛い場所でしょ？（

これなら諦めるかしら？）」

「ご一緒しますよ」

躊躇いもなく、言い放った～！

どうしよう？

そうだ、男と待ち合わせしてることにしよう。っていない～。

む、男が三人、あれっ？初春さんに佐天さん？

やむを得ない、

まず、青い髪の人

よく分からない二次元単語のようなの使ってるし、無理～！

二人目の金髪グラサ……無理。義妹に手を出してるような危険人物のようだし。

三人目は……ええ！？、

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

現在俺は、友達に襲われている。能力は使いたくない。

さて、どうするか……

「ごめーん、待った〜？」
うん？　御坂何やってんだろ？
「何をやっ……、ってお、おい！？」
いきなり抱き着いてきた。
「お願い、口裏あわせて……」
と小声でいってきた。
「はあ！？またかコーヤン！」
「やっぱりカミヤンとコーヤンは裏切りものにゃ〜！！」
「み、御坂さん？」
「御坂さんがデれた〜！？」
「あはは、ごめん、待った？」
「いや、問題はないけど……」
バンッ！
常盤台女子寮の窓が一斉に開かれ、彼女らに凝視される。
白井が何か喚いてるし、あの時の寮監が…黒い笑みを浮かべている。
「あはは、……うわーん！！」

御坂が叫びながら、俺の手を掴み、引きづられた。

何と言うか、またか。

父さんが空に映ってるように見えた。

父さんは、親指を上に上げて、

「ぐっじょぶ！」

みたいなことをしていた。

父さん、これがいい状況に見えるのか？

俺は炎天下の中、走らされ続けた。

不幸だ。

またなのか？またなのか？またなんだな？平穏が恋しい。（後書き）

御坂はヒロインじゃないよ。それだと楽なんだけど、ファンが怖いよ～。

なんとかフラグをブレイクしたいと思う。あれ、どうしよ？

堕天使は世界を知る（前書き）

原作が、乖離していく。上琴ファンすみません。

俺達は多分一時間ぐらい走った気がする。

「なあ、一体何があったんだ？なぜこうなった？」

「うるさい！少し黙って！お願いだから少し気持ちの整理をさせて～！」

御坂はさっきから頭を抱えている。

説明を聞くためにさらに３０分、待つとようやく、

「ふー、ごめん、少し取り乱していたけど、落ち着いたわ。色々説明するから、どこか座れる場所にいきましょ」

「分かったが、説明を……」

「あっ、もうすぐ昼だし、どこか食べに行きましょ」

「ちょっ、スルーはひどくない！？」

「じゃ、それにしよっか」

「ゑ？」

「世界で一番高いホットドック。これなら文句ないでしょ？」

本人は自覚ないけど　、まだ壊れてるな。

とりあえず、正気に戻るまで、聞かないことにするか。

そして、店にやって来た。
「なんだ、これは」
一個にせんえんだと!?

色々突っ込んだら身がもたない。あえてスルーしよう

「どうかした?」

「…なんでもない」

御坂はやっと説明をしてくれた。

海原少年がアタックをしているということ、しかも爽やか系の奴で、断りづらい事情あり。恋人がいることにして、離れてほしいと考え、近くの男＝俺を捕まえたようだ。

「だが、あまり得策ではないと思うのだが、」

「じゃあ、何か方法があるの?」

「いや、ないな」

「その為に今日はアンタと一緒に行動する。それをできるだけ多くの人に見せる。」

「は?」

俺は、中学生に手を出せと？

「質問とか感想はある？」

「いや、……ない、とりあえず、鼻についてるマスタードを拭いとけ。」

御坂の顔が赤くなり、慌てて拭こうとする、だが

「ひうっ！～～！？」

うわ、痛そ～～

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫よ。ていうかなんともないわよ」

おもいっきり、肩震わせてるけど。涙うるうるだし。

「で、何をすればいいんだ？」

「え？」

「恋人同士って、なにすんだろ？」

「あっ」

「「どうしよう？（すんだ？）」」

話すことがないので、御坂妹達のことを聞いた。
体の調整のため、各地の施設でお世話になってるそうだ。
「元気にやってるのか、当麻にも教えてやんないと……」
「ねえ、これは恋人同士の話じゃないよね？」
「……すまない。」
「中々話がないな。……困ったな」
「……そうね」
「どうしよう？それに喉も渇いてきたな、よし俺が…」
「私が行くわ。」
「え、いや俺が……」
「じゃ、行ってくる」
いってしまった。
「……スルーしないでくれよ、」
全く、女の子は分からんな。
あっ、
犬が目の前を走っている。それを追い掛ける男子。

その後、小学生ぐらいの子がやって来て男子が彼に犬を引き渡した。
いい奴じゃないか、うん？　アイツは……
「えっと、初めまして。貴方は……」
「上野高貴だ。君は……」
「自分は海原光貴です。」
「そうか、で何か用があるのかい？」
「ええ、気を悪くしたら、すみません。…貴方は、御坂さんの友達ですか？」
「ああ、ただの友達だが、気になるのか？」
「はい、自分の意中の方の側にいる男性となれば、当然」
ほう、なら揺さぶってみるか。
「……それについての答え……どちらを望んでいるのかな？」
「どちらでも構いませんよ。自分の答えは変わりませんから。」
間髪いれず言い切った。やるじゃないか
話してみると、彼は本当にいい奴だった。御坂のことを真剣に考えていた。
「だから、彼女はもっと自分の心に素直になるべきなんです」
「そうかな、あれでも結構素直な奴だと思うけどな」

「そうでしょうか。照れや演技が入ってると思います。自分は一度でも彼女の本音というものを聞いたことがある自信ありません」

「中々お前も熱心だな。けど、どうなるかは分からないぞ」

「それでも、です。自分が選ばれなくても、彼女が幸せなら、それでかまいません」

「すごいな、お前は……」

おいおい、御坂が離れたいというからどんな奴かと思ったが……こんな奴、今時いないぞ。なぜ、御坂は……

バンッ！

テーブルが叩かれた。って、御坂か？

「アンタ、何やってんのよ？」

「え？」

「ちょっと、来なさい」

「すまない、海原、えーと」

「自分は大丈夫です」

御坂と俺は、路地裏に向かった。

「アンタ、何でアイツと一緒にいんのよ!?」

「まあ、そうなんだが……」

「本来の目的忘れてない?」

「……すまない、御坂、これ以上は協力はできない。」

「なんで……」

「奴の信念は固い。清々しいほど綺麗だったな。お前に選ばれなくても、それでもお前を逆恨みしないときた。中々いないよ、ああいう奴」

これが俺の本心。ちょっと応援したくなったんだよな。

「アイツのどこがいけないんだ?まあ、人が干渉できる問題ではないが……」

「アンタは……」

「どうした?」

「……何でもない」

「どうするんだ?これから…」

「演技はおしまい、ごめんね、巻き込んでしまって。」

近くのファーストフードが目に止まった。

「あそこで何か驕るわ、待っててね、すぐ戻るから。」

「おいおい、お前ばっかしに驕らせるわけには……」

「いいわよ、無理にここまで付き合わせてしまったし、そのお礼」

また、いっちゃったよ。

そういや、当麻は宿題を終わらせたかな?

「あれ、どうかしましたか?用というのは済みましたか?」

「ああ、まあな御坂はあの中で、列んでいるよ。」

そういいながら、そちらを見る。

なんだ? あれは、
海原が駆け込んで……

「……なあ、」
「はい?」
「お前って兄弟いたか?」
「いえ、一人っ子ですが…」
まさか、
「……お前に化けた奴が御坂に接触したと思う。だから…少し待っててくれ、厄介事にお前を巻き込みたくない。」

「え?ですが……、わかりました、では気をつけて」

「ああ」

そういって、俺は駆ける。

その瞬間、寒気がした。

海原が背後から不意打ちを仕掛けてきた！！

「なっ？」

俺は咄嗟に躱す。

「……なんでだ？」

「上手くいきませんね、人を騙すのは。」

「お前、…」

まさかこいつが…

「お前が偽物……」

キュイイン！

俺の横を何かがかけぬけた。

刹那、後ろの車が分解された。

魔術師か！

周り人がこの光景を　見て唖然としている。

「マズイ！」
俺は、人気のない場所に走る。
よく分からない物が通り過ぎるが、
「当たらなければ、どうということはない！」
だが、俺は別のことを悩んでいる。
なぜだ？御坂は魔術に関係ないはず……
俺は人気のない工事現場で足を止めた。
奴が刃から何かを放つ、だがそれはもはや俺の脅威ではない。俺には当たらない。
「くっ」
魔術師は困惑している。
手の向きと視線で丸分かりだ。それに、心眼（俺命名）で動きは見切れる！
「なら！」
ならばと刃二つで同時に放ってきた。
「無駄だ！」
躱しつつ、強化で間合いを詰める。
「なに！？」
刃を縦振り、横振りと振り回すが、俺はそれらを避け、カウンターを入れる。
「ぐはぁ」

奴は吹っ飛ぶ。

「教えてもらうぞ、なぜ御坂に近づいた？」

「貴方はいや、貴方と上条当麻は自分達の今の立ち位置が分かっているのですか？」

「……何が言いたい？」

「上条当麻は、禁書目録の知識、イギリス清教の魔術師、聖人、吸血殺し、超能力者、そして最大戦力の貴方といった人材を取り込んでるじゃないですか。」

な、何を言っているんだ、彼は……

「違う、アイツはそんな奴じゃない！」

「いえ、関わっている時点でもう駄目ですよ。僕の組織はね、上条当麻の勢力が魔術と科学のバランスを危険に曝す存在と判断したんですよ。まあ、貴方一人でも危険ですが……」

だがそんなのは…

「言い掛かりだ、……それは」

「では、言えますか？科学と魔術の色を持つ上条勢力は、どんな理由があっても、双方の慨存する組織全てと敵対しないと？」

「……非道な行いをするなら、見過ごすつもりはない。」

「だからです！、貴方達は危険過ぎるんですよ。この組織には、金や圧力でどうにか出来ません。そんな不安定な勢力が上に危険視さ

れるのは当然のことですよ！」

「彼が消えた所で、もはやどうにかなる問題ではありません。……標的は全員です」

納得できない。なんだよ、それは……

「……なら、御坂への本心は嘘、だったのか？あんな気障な台詞言ったくせに全部贋物だったのか？」

「……ニセモノじゃ、駄目なんですか？」

「なに？」

「…にせものが御坂さんを守りたいと思うのは……駄目なんですか？」

「何を言って…」

「自分だって、こんなことしたくなかった！でも、上がそう判断したから！貴方達がもっと穏便でいてくれたなら、こんなことにはならなかったのに！」

「自分は誰も傷つけたくなかった！確かに今は御坂さんの敵です。けど、そうさせたのは貴方と上条当麻だ！」

ブチッ、

「……確かに間接的な原因は俺達だろうな。けどな、何もしなければ、あいつらに出会わなければ、救えなかった命はあった。」

つくづく思う。あの時、インデックスに、姫神に、そして御坂に会わなければ、どうなっていたか。記憶を消され、学園都市は壊滅し、自殺していただろう。

だから、……何人たりとも、これらの結果は否定させない。

「……俺は当麻ほど、甘くはない。……相手になってやるよ」

そういって俺達は駆け出した。

だが、結果はすぐに終わった。

奴が刃を向け射出する。躱して、顔面にヒットする。負けじと蹴りを入れてくるが、屈んで避け、クロスカウンターを入れる。吹き飛ぶ魔術師。

奴は動かない。

ガゴン、ガガン、ドドドド！

って、刃で切れた鉄鋼が落ちて…

「くそっ！」

反射と空間を組み合わせ、結界もどきを張る。

ドドドドドド！！！

「……なんとかなったか」

「……敵である自分を……なぜ助けたんですか？」

「…気まぐれだ。」

「…攻撃は今回だけではありません。別の誰かがやって来るでしょう。おそらく、自分より腕のいい……」

「……そうか」

「……守って…、くれませんか？彼女を、自分の代わりに、いつでも、どこでも、すぐに駆け付けるヒーローのように…」

これは本来アイツがやりたかったこと。だけど……、それは…、不可能になってしまった。それでも……、他人にこの役目を譲るほど……、彼は御坂を守りたいのか……。

俺は、

「任せてくれ、彼女と彼女の世界は必ず守ってみせる。だから…お前もいつか…、戻ってこい、必ずだ。」

「確かに聞きましたよ。」

彼は安心するように微笑んだ。

その後彼の身柄は土御門に預けた。

「……大変な約束してしまったな。」

思わず、溜め息が出た。

「けど俺は…、後悔だけはしないと……決めたんだ。」

例え…、世界が敵だろうと、抗ってみせる。そして……、俺は空を見る。

「変えてみせる。世界の仕組みを、この手で！」

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　御坂

私達が会った海原は偽者だった。

私は慌てて、彼等が走り去った方向へ駆ける。

そこは工事現場で、辺りはひどい有様だった。

そこで、海原とアイツが戦っていた。会話は……、大体は聞いてい

た。私は…、彼に酷いことをした。彼の気持ちに気ずこうとせず、……傷つけた。
自分が情けなくて、涙が出そうになった

謝りたかった。でも…、あの場に入る度胸はなかった。……情けないな、本当に。

……私は、あいつらの事が気になっているんだ。好きとか、愛してるというものとは違う。多分ヒーローに憧れる…みたいなものだと思う。決して、まだそういうのじゃないんだ。

彼は金髪の人に連れていかれた。殺されはしないと思うけど、しばらくは絶対に会えない。

けど、彼に会うまでに……、自分の心に素直になろう。そう……、そして伝えよう。私の本心を。……彼は傷付くかもしれない。いや、傷付くに違いない。でも……、やっぱり私は、アイツらが気になっているんだ。

だから……、ごめんなさい。初めて私の事を、本気で想って、理解しようとしてくれた人。

そして……、ありがとう……、こんな私を愛してくれて。

もう私は……、涙を堪えきれなくなった。

堕天使は世界を知る（後書き）

御坂じゃない、これは。乙女すぎる。いや、彼女は確かに女の子だが、乙女にし過ぎてしまった。

次はテレビでぞんざいな扱いのあの人です。……出番を増やしてやらんと。

魔術師の襲撃は何度目だろう？（前書き）

誤字があってすいません、

春上さんを出してみました。

魔術師の襲撃は何度目だろう？

ｓｉｄｅ　上条

「終わった～！！」

俺は今、夏休みの宿題という難敵に勝利した。

やれば出来るじゃないか、上条当麻。

前の俺はなぜ勉強を真面目にしなかったんだろう？

まあ、いっか。なんにせよ、

「俺は自由だ～！」

久し振りに嬉しいというか、満たされた気分だ。記憶を失ったり、右腕がちぎれたりで、散々な夏休みだったけど、天は俺を見捨てなかった。

「ねえ、とうま」

「ふはははは、明日は楽しみだ、」

当麻にインデックスの声は今聞こえてない。

宿題をやり終えた達成感で、ハイになっており、色々と頭のネジが抜けているのだ。

「……とうま、聞いてるの？」

「バカトリオの一角なんてもう呼ばせねぇ。俺は変わったんだ！」

「……とうまの、」

「そうだ、今日から俺は……」

「馬鹿～～！！」

インデックスがやはり当麻の頭に噛み付いた。

「ぐわぁー！？」

「正気に戻ってよ！！それと人の話は聞いてよ！！」

「……悪い、ここんところ不幸続きだから嬉しくて浮かれてました。て、どうした、インデックス？」

「とうま、とうま。あれが食べたいんだよ～。」

テレビの方を指差す。

えっと、三分クッキングで豆腐ハンバーグ、か。やべ、作り方見てないから分からん。

「アイツが作れる筈だし、頼んでみればいいんじゃね？」

「それが、こーきはいないんだよ。」

「そうか……、ごめん、……材料がないんだ。」

「むう～。」

こちらを悔しそうに見てくる。

……まったく、しゃーないな。上目づかいは反則だろ。

「……さてと、宿題をバックに詰め込んだら出かけるぞ。」

「……ふえ？」

「夏休み最後だし、何か美味しいもんでも食べに行こうぜ。」

「え？……うん！分かったんだよ！」

一瞬、訳が分からない顔して、すぐに目が眩むほどの笑顔をみせる。

まあ、この笑顔に負かされるなら、諦めもつくかな？

バックを机の下に置き、中に明日の用意を入れ、部屋を後にする。

「何食おうかな？」

「ハンバーグ！！」

即答する。

「よし、じゃあジョ○フルにでもいくか！」

そういって俺達は、町を歩く。

願わくば、何事も、何事も、ありませんように。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

「さてと、どうしようかな？」
俺は事件に巻き込まれた後、町をあてもなく歩いていた。

「コーヤンは、世界を変えるって言っていたけど、具体的にはどうするつもりだ？」

「確かに、俺一人なら難しいと思う。だけど、当麻と共に歩んでいけば、変えられる気がするんだ。…だから俺は、目の前の問題を地道に解決することから始めたいと思う。」

「お前の『傷ついてる誰かを救う』という理想が世界規模になったのか。……まったく、お前はとここん俺を心配させる気かにゃ～？」

「うっ、俺だって世界を混乱させたくないよ。言ったろ？俺は地道に目の前の事をやり続けていくって。」

「最悪なのは、力がばれて戦争かにゃ～？」

「それは俺も回避したい、それだけは……なんとかしないと。」

「分かってるならいいぜよ。まあ、自分なりに頑張れにゃ～」

そういって、土御門は気を失っている海原？を連れて言ってしまった。

「…光を掲げる者……、か。」
かつて、神と同等の力を持ち、天界の三分の一を離反させ、反乱を

起こした最初に堕天した熾天使。神の如き者によって滅ぼされたとも言われている。なぜ父さんがその力を持っていたかは分からない。なぜ俺が持つことができたのかも……。だが、いずれ分かるだろう。なんとなくそんなことを願ったりしている。

「兄様！」
紫穂がこっちにやって来た。それに佐天さんや初春さん後、俺が知らない子がいた。

「お久し振りです！」
「久し振りよね、ホントに」

「盛夏祭以来だね、こんな時間に何してるんだい？」

「夏休み最後なので、皆で楽しみたいなあ、っておもったんです。兄様は？」

「何をしようか決めかねていた所だ、そちらの彼女は？」

「えーと、初めましてなの。春上衿衣なの。」

「春上衿衣さんか、俺は紫穂の兄で上野高貴っていうんだ。よろしくな！」

「はいなの～」
変わった子だなあ。口調が独特だ。

「じゃあ上野先輩も一緒にどうですか？」
「え、」
この展開、前もあったような……

「そうですよ。皆で過ごした方が楽しいに違いないしね」
「兄様はどうするのですか？」
また、中学生と一緒に……
「どうかしたの～？」春上さんが聞いてくる。
「……いや、なんでもない。じゃあお言葉に甘えて……それで佐天さん、予定は？」
まあ、いっか。

「ジョ○フルに行く予定ですね。」
「そうか」

こうして、俺と彼女達は町を歩く。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　上条

「とうま、何を選んでも良いの？」
「三品までならな」
「わーい！」
本当に平和だなあ。

俺達は、メニューを選び、料理を待つことにした。

そして、
「大変、お待たせしました！サーロインステーキセットと日替わりランチＢのお客様」

来たか。って、ええ！？
ウェイターさんがいきなりこけて、空中に投げ出された料理がこち

らへ……

「うぎゃあぁぁぁぁ！？」

熱い、膝があぁぁぁぁ。っていうか料理がアァァァ！！

「不幸だ。」

泣きたい、もう。

「お、お客様！？、も、申し訳ありません！！」

ウェイトレスさんは、すぐに用意しますので！、とかいいながら厨房に言ってしまった。

「せめてもの救いはソースとかがあんまりかからなかった事ぐらいか……インデックス？」

インデックスは何も言わない。

「……」

白くなっていた。

あーあ、上げて落とすか。そりゃあないだろ～！

窓の外をなんとなく見た。

は？

背の高い男が立っていた。だが、鏡で自分の顔を見てる様子ではない。

目を閉じていた。

なんだ、コイツー
音もなく、ガラスが粉砕され、衝撃破が襲う！！

「くっ、そ」
バンッ！
慌てて右手を突き出し、その攻撃を無力化させる。

窓の方に目を向けたーーだが、
「透魔の弦。……こちらだ」
嘘だろ、気配もなく……。
「この結果は予定とは違うが、無益な殺生の必要性が減るならば、逆に僥倖と言えよう。投降しろ。目的のものを手に入れたら、すぐに離れ…」
「あぁぁぁ！何やってんだよ！！空気読めよ！今、晩飯食おうとしてたんだぞ！ホント何すんだよてめぇ！店もボロボロじゃねぇか！！」

「うむ？」
男はこの状況に首をかしげていた。
「うむ？じゃ、ねぇよ！！こっちはふざけんなの域だぞ！！」

「お前弁償しろよ、ここの店を破損させたの、お前だからな！！」

「……知ったことか」

ぶちっ、
「……ＯＫ、分かった、今日の俺は、少しバイオレンスだぜ、」

掴みかかろうとした瞬間、奴は虚空へ消えた。
また!?まさか、空間移動?
「とうっ……」
奴はインデックスの背後に回り、何かの術で動きをとめた。
「……魔術師か」
「いかにも」
「魔術師ってのは、人の話を聞かずに力振り回すヤンキーばかりなのか?人をスライス使用とするわ、公共の物壊しても平然としてるわ、果てには幼女誘拐だと!?」
「……私は彼女の持つ、十万三千冊の魔道書の知識を欲している。……貴様の言い分は後で聞くことにしよう。」
「逃がすと思ってんのか!?」
「透魔の弦」
彼はインデックスを連れて消えた。
「くそっ!なんだって魔術師は!?」
消えた場所に手を伸ばす、
「ひゃう!?」
インデックス?
視覚をずらしているのか?
ということは、偏光能力系の魔術か!

「くっ、断魔の弦」

ぞくっ、本能的に手を離した。

瞬間風の刃が発生し、肝を冷やす。

危なかった、手を離していなかったら……。

いで奴を追わねぇと……。

「少々お待ちいただけますか、お客様？」

さっきの料理をこちらにぶちまけたウェイトレスが出口に立っていた。

しかも、駄目ウェイトレスさんから本格的な戦闘少女にクラスチェンジしたようだ。

この世は理不尽だと思った。

「……」

そこら辺はあの馬鹿迷惑魔術師のせいで酷い事になっていた。

奥の方から、筋肉ムキムキの暑苦しい店長があらわれた！

当麻はどうする？

1、逃げる

2、土下座

3、事情を説明

1に決まってんだろ！

「ちくしょうぉぉぉぉ～！！！」

俺は窓から逃げた。

「不幸だぁ～！」

理不尽だろ、これ。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

ジョ○フルに皆でやって来たのだが……、なんだ、これは。

辺りは、酷い有様だ。風能力を使った様な斬り刻まれた痕が　あった。

「…何、これ？」

「ひどい……」

「一体誰が……」

「紫穂、風紀の権限で店長に話を聞いてくれ。」

「！！……、分かりました。」

紫穂はすぐに風紀の顔になり、現場の聞き込みを初春さんと行った。

そして、

「どうだった？紫穂、初春」

「聞き込みの結果、二人組の男子学生と年下の銀髪の少女らに、スーツ姿の男に襲われ、少女が誘拐されたようです」

紫穂が教えてくれた。

「男は黒ネクタイに黒いスーツを着ていたようです。右手に弓の様

なもので、辺りを破壊したようです。学生は小さいオレンジ色の模様のある白いシャツと茶色のズボン。少女の方はシスター？という恰好だったとか。」

初春が特徴を……

あれ？　思いっきり見覚えが……。

また、不幸にあったのか。

店長が憤慨していた。

「全く、巻き込まれた私達にとってはとんだ迷惑です！早く彼らを捕まえてください！」

逃げる彼を追う目撃者も同様の様子のようだ。

それは、少しおかしくないか？

「失礼、なぜ襲われた彼を追うようなことを……。」

「争うなら外でしてくれ、巻き込んだ彼等にも非があるはずだ。」

まあ、無理もないな。これは、

「だが、彼等に何の非もなく、襲われた可能性もあるはずです。真実を聞かず、闇雲に彼を追うのはいささか理不尽だと思うのですが」

「そんなことは、こちらは知らない。彼らが来なければ、事件は起きなかった。不幸を撒き散らさないでほしいよ、全く。」

「……弁償代は俺が払おう。」

「「「上野さん!?」」」

「……兄様、何か知っているのですか?」

「ああ、またアイツが巻き込まれたか、今度は食べている最中に、か。」

「当麻兄様が!?」

「そいつをここに連れてきてくれ!あんたが支払う必要はない。そいつに払わせるついでに事情も聞いてやる。全く、近頃の若者は……」

「違いま「もう一度いうよ、俺が支払う」兄様?」

「なんだあん……!」

余りにもムカついたから、理不尽な事を口走る奴と同じ様な事を考える奴らに殺気を放ってやった。

日常でこんな経験はないので、今にも気絶しそうのようだ。

「風紀委員もこの件に干渉しないでくれ、荷が重すぎる」

「何を言っているんですか、上野さん!これは「もう一度言うよ、君達には手におえない」」

「下手に関わろうとするな、最悪……、死ぬぞ。」

俺の言葉で、全員が黙る。

関わらせる訳にはいかない……、どんな手を使っても……。

「……上野さんはなんで悲しそうにしているの？」

「そう見えるかい？…答えはＮＯだよ。大丈夫、…春上さん達は心配しなくてもいいから。」

「でも、危険なら私だって！！」

「何度も言わせるな！！　君達が関わっていい問題じゃない！！死にたいのか、皆は！？」

怒気を含む言い方をして、泣きそうになる紫穂。

本当にごめんな。何も言えなくて。

「まあ、一つだけ言っておくよ。……強すぎる力を求めてはならない、絶対に。」

どうも、このやりとりがエンドレスに続きそうなので、早々に立ち去ろう。

俺はテレポートでこの場を離れた。

さて、誰かな？　彼の日常を荒らしたのは。

魔術師の襲撃は何度目だろう？（後書き）

うむ、主人公に対し、彼女らには、まだ感謝という感情しかありません。恋愛は……彼を止めれるような人がいいかな。基本作らないつもりですが、何か意見ありますか？　この子がいいとかあれば、参考にしたいのですが。

魔術師はどいつもこいつも！（前書き）

魔術師の秘めたる訳とは？

ｓｉｄｅ　佐天

「兄様！！」

上野さんは、テレポートしてしまった。

「……上野さん、……」

「……雰囲気が、全然違う。」

怖かった。ここに来る前は、木山さんのその後について話をしていた。その時は最初に会った時よりも、明るい感じだった。

けど、今さっきのは……。

「……以前、風紀委員のデータベースに、上野さんが学園都市最強の第一位に勝ったとの報告があったんです。詳細、理由は不明ですが、勝った翌日から最強の座を狙う能力者の襲撃にあったそうです。」

「そんな情報があったの！？私は知らなかったけど。」

「……何重にもプロテクトが掛かっていました。その後、データそのものも消されてしまいました。でも、彼の能力が少しだけ、分かりました。」

「どんな力なの？」

「『トレースマスター』、様々な能力の演算パターンを理解するこ

とで、力を行使出来る。いわば、実現不可能と呼ばれたデュアルスキルのようなものです。また、レベルアッパー事件で顕れた正体不明の白い翼も確認されましたが、これは私でも調べられませんでした。」

「……無茶苦茶ですね」

「想像できないの」

「……兄様が複数の力を使えると、御坂さんや白井さんは言っていたけど、ここまでなんて……」

上野さんが何を隠しているかは分からない。

知りたい。あの時私達を助けてくれた恩人が何を考えているのかを。

だけど、

「ね、ねえみんな、本人が答えてくれるまで待たない、かな？」

本当に聞かれたくないのなら、今の私達の行動は彼を傷つけてる。

「兄様が心配じゃないんですか！？」

「私だって何やってるのか知りたいよ！でも本人は嫌がっているし、そっとしてあげたらいいと思うんだけど……」

「……私も佐天さんと同じなの。あの時の彼を見て感じたの。『関わってほしくない』って、悲しんでいたの。」

「……恐らく彼の情報はバンクを探してももう出てきません。それ

こそ、命がけで探さないといけないかもしれません。」

「待つしか、ないのかな？」

紫穂さんは、まだ納得がいかないようです。

私達に出来ることなんて、何もないんだろうなぁ……。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

当麻がアンチスキルに追われていた。

すいません、急いでいるので……

「ぐっ！？」

後ろに回り込み、手刀を首に与え、意識を昏倒させる。

「無事か？当麻、」

「高貴！？どうしてここに？」

「すごい騒ぎになっていたな、あれ」

「理不尽すぎるんだよ、あれは…」

本人の口から事情を教えてもらった。

「つっても、どこを探せばいいのやら」

「空間把握を使って調べる、少し待ってくれ。」

「ああ、……インデックスの置かれている状況を改めて思い知らされたよ。」

「そうだな。…俺も認識が甘かったよ。……場所が解ったぞ。あのホテルなんだが……！？、あれは…」

指差した方向には、屋上で光が溢れていた。

「マズイ！、行くぞ高貴！」

慌てて俺は、当麻の後を追った。

階段を駆け上がる。

「何してるんだ当麻？」

「インデックスから電話が……」

って、出るのかよ！？

『…違うよ。』

は？

『私には、解るの。その梓弓から貴方の心が逆流しているから』

状況がイマイチ分からない。何がどうなっている！？

『貴方はただ、あの女の人を好きだった。だから命がけで救おうとした。けど、見つけたのは他人を傷つけるような方法しかなかった。だから、彼女に迷惑はかけたくなかった。どんなことがあっても彼女を傷つけたくなかったから！』

……魔術師ってのはどうして……

当麻が奥歯を噛み締めている。

『それだけだったはずなんだよ！なら、貴方は破滅しちゃダメ！仮に女の人が救われても、彼女は罪悪感を一生背負って生きていく事になるから！』

どうして、何もかも、自分だけで背負ってしまう？

『だから、貴方は生きないと！こんなやり方に頼っちゃ！』

なまじ力があるからなんでも自分一人で解決しようとする、か……。

……まあ、俺も何か言える立場じゃないけどな。

ただ、まぁ……

俺達は屋上のドアを開く。

救うけどな、こんな理由抱えてれば。

当麻の右手が何かを触った。すると、辺りの光は消え、ただの屋上に戻った。

魔術師は、頭から血を流してぐったりとしていた。

「おい！大丈夫か！？」

慌てて駆け寄り、男を見る。

「……悪いのか」

呟くように男は口をこぼす。

「たとえ、この身を犠牲にしても、誰かを守りたいと思うのは、悪いこと、なのか？」

「悪いに決まってんだろ！」
当麻が叫ぶ。
「あんただって、大切な誰かに死なれる痛みを知ってんだろ。……けどな、それを今度はソイツに感じさせるのか！？」

「……なら、私はどうすればよかったのだ。……私の様な小さき器では、何も出来なかった。だが私にも、譲れないものがあったのだ。ただ、それだけだったのだ…」

「おい、ソイツはどこにいるんだ？」

「ぐっ……な、に？」

「だから、なんとかなるんだよ、俺の右手は神の奇跡をも打ち消す。呪い程度なら訳ねぇよ」

「なんだ、それは」
魔術師が呆然としている。

当たり前だよな、

「まあ、そういう力の持ち主なんだ、こいつは」

魔術師はこの展開にどう反応すればいいか、分からないようだ。

「だから、案内してくれ。」

「本当に、可能なのか？」

「ああ、なんつうかコードレッドやら、追い回されるわ、晩飯おじ

ゃんだが、ここまできたんだ、最後まで関わらせてもらう」

魔術師の表情が歪んだ。

重荷から解放されたような綺麗な涙だった。

「じゃ、さっさと行こうぜ」

当麻は彼に手を差し伸ばし、彼はその手を掴む。

で、現在俺は仮面やら変装やらをして、警備員を排除（昏倒）を行っている。超能力はおおっぴらに使えないので、強化のみで排除している。

当麻だと強行突破は難しいし、闇咲さん（あの魔術師）も手負いの状態なので、俺が警備網を突破しなければいけなかった。

そんな感じで、車を掻っ攫い、悠々と学園都市を出るのだが、

「なんだこれは…」

闇咲さんは呆然とし、

「……」

当麻は頭を抱えていた。

スルーしよう。

んで、彼女のいる病院に到着。

病室には、茶色のかかった黒髪の女の人がいた。

「闇咲さん？」

「方法が見つかったのだ。助かるんだ」

「無理ですよ…そ「いや、呪いは消える」え？」

「ちょっと失礼」

当麻は彼女に右手で触れる。

パキィン！

何かが割れる音がした。

「……あれ？」

彼女は変化に気づいたようだ。

「一応、医者に見せたほうがいい。」

すると、診察の結果嘘のように病魔は消えていた。

まだ彼女は安静にしとかないと。衰弱した体までは治せない。

彼女は唖然としていた。

まあ、後で実感が湧くだろう。

「本当になんと言えばよいのか、」

「まあいいじゃないか、なあ当麻。」

「ああ、俺達はそろそろ失礼するぜ。」

「君達の名前は？」

「上野高貴だ」

「上条当麻だ」

そういって、俺達は車で学園都市に戻る。

「今思ったんだけど、なんで運転できるの？」

「……気にするな、接触感応で、運転技術は熟知している」

「なんだそりゃ？」

こんな感じで学園都市についたのだが、

辺りは酷い有様になっていた。

俺は機械とか壁には傷をつけてはいないんだが、

えっと、まあ、トンズラしよう。

地面が刈られてるが気にしない。

バスや電車を乗り継いで、なんとか家に帰る。

隣は

「ぎゃあああ！」

気にしない。

寝たいけど、もう朝だ。しかし、そんなことよりさっきの光景を思い浮かべる。

あれは、俺がやったものではない。

じゃあ一体誰が？

「今度は一体何が起こるんだ？」

何かがまた起こりそうな気がして、妙な胸騒ぎがするのであった。

魔術師はどいつもこいつも！（後書き）

次はオリジナル展開です。

動き出す闇（前書き）

オリ展開です。

動き出す闇

俺達は一睡もできずに、今日を迎えた。
当麻は噛み傷が所々あった。

「当麻、それは…」

「聞きたい？」
当麻が自嘲気味な顔をしていたので、
「……いや、すまん。ていうかごめんなさい」
俺達は、学校へと向かった。

「眠い、フラフラする。」
俺達の足取りは重い。
「……言うな、余計フラフラする。」

俺達は早めに学校に行き、そこで少し寝ようと思い、早めに家を出たのだ。

その途中、

前方に見覚えのある茶髪が通り過ぎた

「……若者は朝から元気だなぁ」
当麻がぼやく。

「アンタか…」
振り返って機嫌悪そうな顔を見せるのは御坂である

「機嫌悪……ま、いつものことか」

「いつものことってどういう事よ！！」

当麻が呟くと御坂が怒る。

「……どうかしたのか、御坂？」

朝からこのテンションはキツイ、だから俺は、中々会話に参加していない。

「えぇ！？あ、あんたもいたの！？、というより、どうしたの？」

「……昨日色々あったから疲れてるんだ。」

「右に同じく、」

「な、なによ……昨日の恋人ごっこってそんなに疲れる仕事だったわけ！？」

「いや、そっちじゃない。夜、晩飯食ってるときにトラブルに巻き込まれたり、徹夜せざる状況に巻き込まれたり、後いろいろあるけど、聞きたい？」

俺は黒い笑みを浮かべながら、言う。

「……いや、……やめとく」

御坂も察してくれたようだ。

「……大丈夫なの？」

「うん、大丈夫だと思う。……今日ぐらいゆっくりしたいな」

「そうだな……」

「なんか悪いから、もう行くね、私」

御坂は逃げる様に去って云った。

俺達は、コンビニで何か買い、学校にようやく着いた。

「長かった……」

当麻が白くなっていた。

「ああ、……そうだな」

コンビニと言う名の朝食を食べ、歯磨きをして、机に突っ伏す。

今は寝よう。当麻は爆睡している。

ぞわっ、

なっ！！！？

慌てて、俺は起き上がり、寒気がした方向を見る。

そこには、

「……海斗？」

見覚えのある顔がグラウンドに立っていた。

俺は窓から飛び降り、彼のいるグラウンドに向かった。

「海斗、なのか？」

「……」

虚ろな目をして、何も答えない。

「おい、どうし…」

「グオォォォォ！！」

ベキッ！、ベキベキベキッ！

海斗の体が軋み、肥大化した。その姿は、

魔獣だった。

鋭い爪と牙を持ち、獰猛な眼光。二本足では不格好な体つきをして、

さながら人と牛と吸血鬼の牙と爪を合わせた化け物だった。

「なっ！」

訳が分からない。死んだ筈の友達がここにいるのも、なぜこんな姿

に…！！

ズオォォッ！！

爪を振り下ろして…

ドゴオォォォッ！

地面が刈れ、砂埃が舞う。

咄嗟に避けなければ、危なかった……。

「喰らえっ！」
バチバチバチバチッ！！
雷撃の槍を射出し、胸に命中する。
だが、
シュンッ！
「ギイアァァァ！！」
喰らっても、怯むどころか、並外れた速度で迫る！
テレポートで移動し、背後に回り込み、急所を狙う。
「ここなら！」
鎌鼬を繰り出し、首筋を狙う。
奴は動かない。こちらに気づいていない。
仕留めた！
鎌鼬は首筋に当たると、霧散した。
なっ！？
超能力が、効いてない？
「おいおい、そんな手抜きでいいのか？」
俺の前にまたいきなり知っている顔が現れた。
「勇治？」

なんでだ？　みんな死んだ筈じゃ……

「ああ、この寄り代のことか……」
寄り代？　それに口調が違う……。

「……お前達は何だ？」

「お前と同類だよ、まあ完全に力が体に馴染まず、そのせいで、器の魂が壊れてしまったがな。我が名は天空の覇者メリリム、これは、ベリアルの趣味だ。」

「まあ、ここで貴様の命と力を奪わせて貰おう。」
コイツ、俺の力を…

だが、ここで力を使うわけには……
辺りから音が消えた。
結界…、土御門か！
「これなら！」
ボワッ！
白い翼を顕し、奴と対峙する。

「もう、第一形態まで進んでいるか、まあ、ここで捕まえるのは、骨が折れる。ここは退くとしよう。」

「逃げる気か？」

「いや、本格的に戦闘をすれば、魔術側に目を付けられてしまうからな。出来るだけ力は温存したい。」
「……」

「さらばだ、人間」
奴らは霧の様に消えた。

「……退いた、いや退いてくれた、と言うべきか。」

「……大丈夫か、高貴。」
土御門が血だらけでやって来た。
「土御門！！お前、体は……」
「まあ、何とか……ただ、入学式は無理そうだ。」
「すまない、俺のせいで……」
「いや、能力が効かないなら仕方ない。それに、あのままだとやられていたぞ」

「そうか、救急車は……、」
「大丈夫だ、家で休んでおくにゃ。」

土御門はそう言って、学校を後にした。

「……魔法なら、効いたかな……」

次からの打開策を考えながら俺は教室に戻る。

しばらくして、みんなが続々と登校してきた。

「久し振りやん、カミヤン～、宿題はやって来たん？」
ニヤニヤしながら青髪が聞いてきた。
「なんとかな～」
「「「「「は？」」」」」
クラスの奴らはびっくりしていた。

「あの上条が宿題を……」
「俺達だけかよ～」

「いけにえに出来ねぇ～」

言いたい放題だな。
クラスの奴らがゲーム脳やら、マンガ脳とかで騒いでるが俺は輪から離脱する。早く休みたい。

「はいはーい、ホームルーム始めますよ～。始業式まで時間がないので、テキパキ進めちゃいますからね～」
小萌先生がＨＲを始める。
それから、土御門が休みとか、夏休みどうでしたかーとかあって、転校生が来るようなのだが、
当麻が頭を抱えている。何考えてるかは深く追求しない。どうせ転校生なんて…

ドアが開くとインデックスがいた。

「「ゑ？」」

なぜここに？　ていうかどうやってきた？

「あ、とうまにこーきだ。ここがガッコーなんだね。まいかには後でお礼を言っておいた方がいいかも。」

うわあー！　何やってんだよ、舞夏！！

クラスの目が怖い。

その後、インデックスは小萌先生に追い出され、本当の転校生は姫神だった。

良かった、姫神で。

そして、始業式。

姫神が正式に紹介されたり、教頭の話が長いとか、学生課の奴の話も長いし、

極めつけは、

「我が学校に超能力者が誕生した。……」

なんか、俺が引っ張り出された。なんか俺の横で話しまくってる校長。

少し、いらっとしてきた。後三分話すなら、反射で吹き飛ばしてやろう。

三分たて！三分たて！

……惜しい、後十二秒。命拾いしたな校長。

教室に帰ると、当麻の姿が見えない。

「全く、宿題をやってきて、変わったかなあと思ったら女の子連れて式をサボりますか！」

プンプン！

小萌先生が愚痴っていた。

「うわ、……」

「聞いてください、上野ちゃん！」

小萌先生の愚痴を聞く羽目になった。

恨むぞ、当麻。

学校の本日の日程が　終わり、

今年の大覇星祭頼むぜーとか、いつの間にか都市伝説になっていた、第一位との戦いについて聞かれ、もうへとへとになった。（黙秘を貫いたよ、）

俺は今市街地を歩いていた。当麻はどうやら、インデックスとまた女の子に出会い、三人でどこかへ消えたらしい。

まあ、今日ぐらいはいい加減ゆっくりしたい。

のだが、

目の前、前方に黒いゴスロリ系の金髪の女性がいた。

うわ～、なんか変なのがいる。今日は疲れてるのに……、警備網突破に化け物に襲われるわ、校長がうざかったし、小萌先生の愚痴に、今度はなんだ？

パンッ！

あ、風紀のあれか…。ここは任せよう。

その場を立ち去ろうとする。

やっぱりあの不審者が目標で、対峙してるのは白井か。

まあ、テレポートは便利だし、まあ楽勝かな？

お、圧倒してる。これで決まりか…

ドゴオッ！

白井が地面から生えた腕、いやはい出てきた巨人に掴まれた。

またか、またなのか、またなんだな畜生～！

とりあえず、白井を空間移動させる。

「え、上野さん？」

「下がっていてくれ、」

奴を睨む。

「何者だ？」

「答える義務はないね。」

「そうか」

虚空より袖に仕込んだ鉄針を展開し、雷撃を纏わせ射出する。弾丸と化した針は巨人を貫き、再度空間移動させ、巨人を襲う。

穴だらけになった巨人は爆散した。

「出鱈目ですわね。音速を越えた物体をテレポートさせるなんて、

どんな頭をしてますの？」

「まあ、いいじゃないか。それで状況は？」

何やら、また魔術師がきたようだ。なんでも、昨日、門が襲撃され、多数の負傷者が出たようだ。

「……舐めた真似してくれて、俺の休みを奪った罪は大きいぞ。」

「……（誰かは知りませんが、ご愁傷様ですの）」

「コイツは好都合だな。」

ゾワッ！

まさか、この感じは……、

「今度こそ、その力と命、貰い受けるぞ、『光を掲げる者』よ」

破壊者が静かに俺達を見下ろしていた。

動き出す闇（後書き）

次号は科学と天使が激突します。

高貴ＶＳメリリム！その頃、当麻は女難にあっていた。（前書き）

二人の置かれてる状況のギャップが

高貴ＶＳメリリム！その頃、当麻は女難にあっていた。

なんてことだ。魔術師の侵入と混乱に乗じて、やってきたか！

「白井さん、ここから離れて！早く民間人を離れさせて！」

「しかし、貴方は……」

「早くしろ！、最悪死ぬぞ、みんなが」

コイツは周りを見て戦える相手じゃない。

「っ！！……分かりました。」

白井は離脱した。

「……」

「ほう、あくまであれは隠し通すか。」

ドドドドドッ！！

奴に無数の雷撃を放つが、それを避けるそぶりさえ見せない。

ガキーン！

雷撃は全て弾かれ、奴の背後に、無数の炎の矢が現れた。

「ケテブ・メリ（燃え盛る矢）」

刹那、レールガンを軽く凌駕する速度で矢の雨が襲う。

あれは反射できるものじゃない！

心眼を使い、見切りながら、回避をする。が、

ドゴオォォ！

炎は矢によってある程度の距離で爆散し、炎が撒き散らされる。

「ぐっ！！」

直撃は免れたが、軽く火傷をした。それにそれらの部位に痛みが走る。

「まさか、人の身で生き残るとはな、だが、」

俺の目から奴が消えた。

いや、目の前に立っ……

ズバーン、

メリリムの蹴りが高貴に命中し、ビルにたたきつけられた。

やばっ、意識が飛びそう…

地面にたたきつけられ、肺の空気がぬけた。

「がっ……、ぐ……」

奴がこちらに歩いてきている。

「まあ、期待ハズレだが、その命、貰い受ける、」

「誰…がっ…」

俺は立ち上がり、鉄針の鋭さを極限まで雷と風の能力を使って強化し、奴に放つ。

それでも、奴に届かない。

「人の身で我に防御をさせた事は褒めてやろう。だが我には届かな」

かかった！

ザシュッ！

最後の一本が奴の背後から胸を貫通した。

「ぐは！？何が……、」

「止めだ！」

右手を雷と風で刃物と化し、奴の胸を貫く。

ズシャッ！

「……殺せると思ったか？」

「え？」

ドゴォッ、

炎剣で高貴は一閃された。

剣圧で吹き飛ばされ、血を流しながら倒れる。

「本当に呆気なかったな。堕天使の力を使わないなど、愚の骨頂だ。」

彼は倒れている目標へと進む。

彼の意識は断絶され、動かない。

本来ならば、動かないはずだった。

彼は血を流しながら、立ち上がった。そして、

ボンッ！

白い翼ではなく、黄金の翼を羽ばたかせていた。

「馬鹿な！？第二形態に移行しただと！」

彼は頭を上げる。

「息子がお世話になったようだな。」

「なっ！、有り得ない！、貴様は死んだ筈だ！、戯れ事をぬかすな！」

「……まあ仮に理解した所で、意味はない。なぜなら」

フッ、彼はメリリムの視界から消え、

「な？」

「ここで貴様は死ぬからだ。」

彼は、黄金に輝く光の剣を持ち、背後に立っていた

ズシャッ！ザシュッ！

若干のタイムラグが生じるほど、彼の二撃は、鋭かった。

「き、さ、ま…は、ま、さか、」

「まあ、あえて名乗っておこう、上野暁継、とな」

メリリムは崩れ落ちる。

「……血を流しすぎだな。」

そういうと、彼は傷の箇所に手をかざした。すると、瞬く間に傷が消失した。

「いや、貴方がまだ世界にいるとは驚きです。」

不意に空から声がした。

「……サタナエル……」

暁継は、彼を睨みつける。

「まあ、貴方の相手はしんどいですし、彼を回収しに来ただけですよ。」

「……させると思うか？」

「無理をしても分かりますよ、無理に戦えば……、息子さん、死にますよ。」

「……」

「今日は引き上げますよ。いずれ、また」

サタナエルと名乗る男は、メリリムを連れて消えた。

男は一人、廃墟となった辺りを見回す。

「まさか、また力を使う事になるとはな……」

「後は任せたぞ……光輝。」

男は崩れ落ち、動かなくなった。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　上条

少し前、

小萌先生に色々と説教（途中から変な方向にいったが）の後、インデックスと彼女が知り合った風斬氷華という巨乳さんと昼食を食べに行くことになった。（スフィンクスもいる）

「その……私も、いいの？」
なんて奥手な人なんだ。久し振りに会った気がする、こういう人。
片や、電撃を飛ばすビリビリ中学生、刀を振り回す変な恰好の聖人、頭を噛み付くシスター、ドジで料理をぶっかけるウェイトレス。
いい！　上条さんは中々に幸運ではないか？まだ女の人に出会って、不幸になってない！
「あ、あの……」
「いいぜ、インデックスも言ってるし。」
「えっと、ありがとう。」
そんな感じで、不幸に会わずに地下街で遊んでいるのだ。
何を食べるのか聞いたのだが、
「風斬はどうだ？何がいい？」
その時、彼女はインデックスの影に隠れてしまったのだ。
「あー」
うそーん、何かやってしまったのか？
「あ、いえ、ごめん、なさい、怖いとかじゃないんですけど」
何かぶつぶつ言う風斬だった。

「まったく、とうまは目が怖いんだよ」

「……どこがだよ」

おい、俺ってそんな認識？

「その獣のような目だよ。虎視眈々と女の子、いや女を付け狙うその目がっ！普段は猫をかぶってるけど、美味しい所は逃さんと黙して語るその目がひょうかを怖がらせてるんだよ。」

「嘘はいけないだろ、嘘は！、その評価はおかしい！」

「ひょうかが怖がってるよ！とうまが吠えるから。」

「理不尽だろ、このやり取り？後俺、中々の硬派だと小萌先生にも言ったんだけどな。」

その後、学食レストランで昼食を食べた。だが、そこでも、インデックスに獣呼ばわりされた。

俺、何かした？

ついでにゲームセンターに行ったのだが、

「まだまだ、遊ぶよー！」

「勘弁してください～！財布が財布が空になる～！」

インデックスがその辺のゲームで遊びまくり、危うく、財布が空になりかけたり、

二人がコスプレをしたいと言い出し、外で待つことにしたのだが…

ストン

カーテンが落ちただと～!?
着替え中の二人をもろに見てしまった。

「いや、これは俺のせいじゃない。カーテンには届かないし、」

「こっちを見ていたのは過失だと思うな」

「せめて、あちらを向いていれば……」
風斬まで、そんな…

「これは、まさか…」

「問答無用だね♪」

「ぐわあ～!!」
ふ、不幸だ。

とにかくゲームセンターを出た。あそこはいるだけで金がなくなっていく。

あれ?

風紀委員の女子高生がやってきた。

こちらをいきなり睨みつけてきた。

おいおい、まさか前の俺は風紀委員にまで手を出したのか?

「こら、そこのあなた! 人がこんだけ注意しているのになぜのんび

りしているの！早く逃げなさい、早く！」

ええ～！？何も言ってないのに怒られた。理不尽だ。あれ？この言葉今日何回目？

「だから、念動能力（テレパス）よ。聞こえてるはずよ！」

二人は聞き取れたらしい。

まあ、そんなやり取りをしていると、ついに彼女は口頭で説明を始めた。

何でもテロリストが地下街に忍び込んだらしい。んで、銃撃戦になるらしいから、早く避難して。じゃないと閉鎖されるそうだ。

「やばいな、早くここから出よう。」

と外に出ようと、歩き出す。

だが、日常にいた俺達は非日常に捕まった。

『みぃつけた』

女の声がした。声の場所に目を向けると、人の眼球のようなものがへばりついていた。

『ふふふ。禁書目録に、幻想殺しに、虚数学区の鍵。よりどりみどりで困るわね。』

気味が悪い声がした。

『ま、全部ぶっ殺せば手っ取り早いか』

「土より出でる人の虚像、そのカバラの術式、ウチとよく似てるね。エダヤの守護者たるゴーレムを無理矢理に英国の守護天使に置き換える辺りは特に、」

インデックスは冷静に説明する。

「ゴーレムか……なら、お前が侵入者か、」

『まあね、で、私の目的はあなたたちなの、なので、ー』

ガゴン！！

目の前がまっしろになった。

目を開けると、辺りは瓦礫でいっぱいだった。

目玉が爆散し、どこか遠くの方も爆発したようだ。

閉じ込められたか。

「向こうはこっちの顔を確かめて襲ってきた、……迎え撃つしかない。インデックス、風斬、隠れてろ」

「これは私の仕事だよ、とうまが下がってて。」

「いや、だが…」

「とうまが生き残ってこれたのは、偶然なんだよ。素人は素人らしく、隠れててって言ってるの。」

「あの時、すぐに捕まったお前が言うの？それ」

風斬は何かできない？と聞いてきたが、うん、ないな。気持ちは嬉しいが。

あいつがいればさくっと解決なんだが。

今、彼は確変中で、無双モードに入ってます。

足音が聞こえ、当麻は身構える。インデックスは二人を庇おうとした。

結果当麻は彼女に押し倒される恰好になった。

スフィンクスはインデックスから出ようとジタバタしていた。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　御坂

私は紫穂さんと黒子と地下街を巡回していた。

「あら？猫の声が……」

「確かに、でも何で聞こえるのかしら？」

「さあ？」

曲がり角を曲がると、床に押し倒されているあの馬鹿と知らない女の子がいた。

ｓｉｄｅＯｕｔ

side　上条

「……当麻兄様、何をしているのですか？」

何か冷めた目で見てきた。

「アンタ何やってんの？」

御坂は呆れ顔だ。

「大胆ですわね」

白井も冷めた目で見てきた。

「とうま、この品のない女達は誰なの。知り合い？どんな関係？そっちの短髪はクールビューティに似てるけど、違うよね」

紫穂は黒い笑みを、御坂はもっとヤバい笑顔を、白井は唖然としていた。

やばい、なんかやばい。

「やっぱり知り合いなの？」

「まさか、アンタも？」

「えーと、命の恩人だったりする？」

「もしかして、勝手に駆け付けたクチ？」

「「……」」

ため息をついた。そして、

「アンタ（とうま）！私の見てない所で何やってたか説明してもらいわよ（欲しいかも）！」

「ひぃっ！」

なんじゃそりゃ！？

さっきから、白井が黒くなってるけど、気にしない。

風斬は俺を見てるだけだ、まあ仕方ない。

なんだかんだ、もう理不尽だろ。

ホントに今日何回使ったっけ？

不幸だ、助けてくれ、高貴。

高貴ＶＳメリリム！その頃、当麻は女難にあっていた。（後書き）

しばらく遅くなるかもしれません

衝撃の事実と……（前書き）

訂正版です。すみませんでした。
地下街の戦闘です。

衝撃の事実と……

ｓｉｄｅ　上条

とりあえず、尋問が終わり、これからの事を考える事になったのだが、

学園都市に侵入してきた二組、だと。

……うわ、あの女と俺達のことかな？

あえてこのことは、言わないでおこう。

俺は命が惜しい。

白井達は、取り残された市民を避難させるため、ここに出向いたようだ。

だが現在、不毛な争いを彼女らは展開している。

インデックスと御坂、紫穂、風斬の誰を一番早く避難させるか、何やら激しい討論をしている。

「私の能力も二人までですし、」

白井も二人が限界らしい。

結局、

御坂とインデックスが怖いので、白井にテレポートさせた。

「ごめんな、風斬、紫穂。」
「大丈夫です。それに取り残されている人を守るために、一人くらい能力者がいないと……」
そういって、彼等のいる方へ走っていった。
「わたしは、…大丈夫…です。」
ドゴオッ！
地下街が揺れた。……しかも、近い。
「風斬はここで待っててくれ。白井が後で来るはずだ。」
「あなたは……？」
「アレを……止めてくる。」
こういう場面で一番頼れるアイツがいないなら、
俺が奴を止めてみせる！
当麻は意を決し、戦場へ進む。
眼前に広がるのは、決して軽くない怪我を負っているアンチスキル達が蹂躙されていた。
その数は２０人弱。
あ嘘だろ……、この人数を相手に、こうも　圧倒的に……

俺も魔術師と戦ったことはあるから分かる。本当に尋常ではない強さの持ち主ばかりだ。

だが、ここまで力の差があるのか！？

呆然としていると、彼等はまだ戦う姿勢を見せていた。

「くそっ！、逃げろよ、ここは俺に任せろよ！」

すると、リーダー格の女性が吠えてきた。

「な！？、……月詠先生んとこの悪ガキじゃん！どうした、閉じ込められたのか？それに、子供を置いて立ち去る訳には行かないじゃん！」

そんなボロボロでどうするつもりなんだ。

俺は彼女らを無視して、前へ進む。

「どこへ行こうとしてんじゃん！？……ええい、誰でも良いからそこの馬鹿を取り押さえろ！」

彼等は、止めようと手を伸ばすが、当麻は止まらない。傷ついた彼等には、彼を止める力も残っていなかった。

……死なせるわけにはいかない。

子供を護るために命を張り、まだ立ち上がるような彼等を、……彼等を慕うであろう子供達の笑顔を、……

「俺が目的なんだろ！？なら……俺を狙えよ！俺が相手になってやる！」

辺りから、音が消えた。　そして、奴は俺の前に現れた。

「ふふ、こんにちは、ふふふ」

気味の悪い恰好だ、いい年してゴスロリか……、魔術師はやっぱり変態なんだな。服装は詳しく説明したくないし、後ろの巨人はゴーレムか……。彼女の周りにアンチスキルが数人ぐったりしていた。

「頑丈な作りだから、こちらはまあまあ満足したわ。本当、よく四肢がくっついてるわね、生きてることが驚きよ？」

彼等のことをまるで小石でも見てるような眼をしてやがる！

「けど、幻想殺しがのこのこ現れてくれたから助かるわ。これで心おきなく殺せる訳だしぃ！」

白いチョーク……いや、オイルパステルを横に一閃した。

巨人は拳を地面に突き立てた。すると、当麻が立っている場所が崩れいや、振動して足場が不安定になった。

「うわっ！？」

地面が！？　大地を操っているのか！

「地は私の力。それに、エリスを前に誰も地に足つけて立つことはできはしない。ほら！さっきの威勢はどうしたぁ！」

くっ、中々足場がとれない！

「お前！目的はなんだ！？」

俺は転がるように避ける。

「戦争を起こすんだよ。火種がほしいのよ。だからできるだけ多くの人間に私がイギリス清教の手駒だと知ってもらわないとね」

何だ、コイツは？気でも狂ってるのか？

くっ、近づけない！

せめて、一度でも触れることが出来れば……、

「ちっ、ちょこまかと！！」

俺は巨人の攻撃を地面を転びながら避ける。

奴が相手を立てなくするのなら、

立たなければいい。

むしろ、走って避けるより、転がる方が楽だ。

避けながら、俺は状況を確認する。

こちらが回避できずにあれの一撃を喰らうか、わずかだが一瞬の隙を逃さず、幻想殺しで巨人を倒し、接近戦にもちこめるか。

最悪だな。奴に近づいていないから、接近戦はまだわからない。

緊迫した、展開を前にアンチスキルは入ることができない。

「何なんじゃん……あの少年…」

「くっ、彼だけに戦わせるわけには……」

部下の一人がアサルトライフルで女を狙うが…、

「……やめるじゃん、また巨人に防がれる。それに少年に当たった

らどうするつもりじゃん。」
「ですが！」
「……悔しいが、今の我々では足手まといだ。」
そう言って、リーダー格もとい黄泉川は唇を噛む。

カツン、

当麻は耳を疑い、一瞬反応が遅れる。
「うわ！、危な…」
間一髪避け、振り向くと風斬がいた。

「馬鹿野郎！！なんで、白井を待たなかった！？」

彼女は無防備すぎた。戦場ではあまりにも。

「え、だって……」
「伏せろ！」
「え？、」
ごきゅ、
鈍い音がした。　風斬の頭部に巨人の一撃の余波が直撃したのだ。

「なっ！！」
眼鏡は砕け、顔の一部だったものが飛び散る。そして、彼女は吹き飛ばされ、動かなくなった。

「風斬！！？」
駆け寄りたい、だが目の前の敵がそれを許さない。

「くそっ！いい加減にしろぉ！」

「はっ！まず一人、……何！？」
奴の動きが一瞬止まった。
巨人の元へ一気に駆け抜け、
「貰ったぁ！！」右手で殴りつける。
、バキンッ！
巨人は音を立て、崩れた。
「くっ！エリスは何度だって作れる！」
素早く術式を展開……、いや来る前にストックにしていたのか…。
巨人の攻撃の余波が一段と激しくなる。
「やばっ！」
距離をとり、対策を考えようとすると、
「少年、離れるじゃん！」
アンチスキルの一斉射撃が始まった！
跳弾を喰らっては堪らない、下がるしかなかった。だが、それよりも……
風斬の元へ駆け寄る。
「風斬！大丈……っ！！」
なんだ、これは……
これは、人の傷じゃない！

彼女の顔はまるで壊れた人形のようだった……。
顔の右半分が吹き飛び、そこには人が持つはずの骨や肉、脳髄がなかった？

「何だよ……これ……」
中にあったのは、不気味な三角柱だった。
彼女は…、人間…、じゃ、ないのか？

「う……」
風斬がうめき声をあげた。
まるで寝起きのような仕草で、痛みを感じている様子もない。
当麻は、ますます混乱し、見ていることしかできない。

「あ…れ？…眼鏡は、どこ、ですか？」
彼女は上体を起こし、辺りを見渡す。

不意に彼女の動きが止まった。

「な、に……これ？」
彼女は、ウィンドウに映る、自分の姿に呆然としていた。
「い、や……いや…ァ！なに……これ！？いや、いやぁぁ！！」
風斬は錯乱したように叫び、危うい動作で立ち上がり、あろうことか、巨人の方向に逃げ出してしまった。

「馬鹿野郎！？戻れ！」
当麻が叫んでも、もはや意味はなく、無情にも巨人の一撃が彼女を襲う。

成す術もなく、吹き飛び、左腕がなくなっていた。
「なっ、んだ……あれは……」

風斬はそれでも動く。
「あ、ア、ぁあ、あああああああああああああ！！？？」
彼女は周りの状況を省みず、逃げるように走っていった。

「ふん、面白いわね。行くよ、エリス。無様で滑稽な化け物を狩るとしましょう。」
奴は俺達に目もくれず、風斬の逃げた方向に進む。

「何だったんだ……一体……」

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

俺は、負けたのか。

なにを、やっているのだろう……俺は。無様にも程がある。
あの化け物と戦うとき、俺は天使の力を使わず、一方的に負けた。
護るために戦う、そのためには絶対に負けてはならなかった。

俺は、自分の保身の為に力を隠したのではないのか？……土御門の願いではあった、だが俺は、世界から逃げていたんだ。……戦争になるかもしれないのなら、ここを離れれば良かったんだ。それで全てが済んだはずだ。

「おぃ、……、し…り……ぉ…ぃ、」
何だ？　声が……

目を開けると、黒妻さんと美偉さんがいた。

「黒妻さん、どうして……」

俺は、奴にやられて…捕まったはず……

「おい、血だらけじゃないか！何があった！？」

どうして俺が生きてるかは分からないが、奴がまだ都市にいるかもしれない。

「もう一人の侵入者と戦い、負けた後は意識がなかった。」

「うそ！？貴方が負けたの！」

「ああ、あらゆる超能力を使ったが、次元が違った。……完璧にやられたよ。」

「おまえをそこまでする奴がいるとはな……」

「奴がまだ都市内にいるかもしれない。カメラとかに映っていませんか？風紀委員なら……」

「ええ、初春さんに連絡してみるわ」

「なあ、どんな奴だったんだ？」

「空を統べる王、と言うべきか、人知をあざ笑う圧倒的な戦闘能力と攻撃速度と範囲を持つ、出鱈目な奴だ。」

「……まだいるなら危険だな。各員に連絡しておかないと……」

黒妻さんは、繋がる範囲で呼びかけと報告をし始めた。

「……ねえ、貴方、本当に負けたの？」

「……はい、悔しいけど…」

「……じゃあ、これは何？」

美偉さんが持つ、携帯から送られた動画を見せてくれた。

「え？」

そこには、父さんと同じ黄金の翼を持った俺がいた。

「……おいおい、なんだこりゃ？、呆れるほど圧倒してるじゃないか。」

「いや、俺には覚えがないんだ……」

誰だ？

「まあ、何にせよ奴は退いたようだな……どうした？」

「……気味が悪いな、無意識で俺がこんな事をしてるなんて……」

もう一度動画の俺を見る。

お前は、誰だ…？

衝撃の事実と……（後書き）

ヒロインどうしよう？　今いるキャラは難しいのですが……
何か意見ありますか？

堕天使は少女の悲しみを断ち切る。（前書き）

遅れました。　主人公の扱いに困る。

俺は二人と分かれた後、俺は地下街に向かった。あの独特の格好をした女がそこで暴れているらしい。
……何にせよ、このままにしておけない。
「何がしたいのだろう？」

あの魔術師は魔術と科学は干渉すべきではないと言っていた。……なら、彼女はどうしてこうもそれを崩しかねないやり方を……。
阻止しなければならない。何としても戦争の火種を消さないと……。

高貴は、戦場に向かう。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　上条

俺は、訳がわからなかった。
風斬の体の事。肉体変化にしては、異質すぎる。

悩んだ末に、俺は小萌先生に事情を話すことにした。科学の知識に詳しい人だから、何か分かるかもしれない。
電話は繋がり、先生は出た。

『あっ！やっと繋がりました！上条ちゃん、今までどこにいたんですかー？』

「地下街ですけど、俺を探していたんですか？」

『姫神ちゃんが一度電話をしたんですけど、電波が悪かったそうなのですよ。』

「すいません先生、ちょっと聞きたいことがあるんだ。こっちから話していいですか？」

先生の了承を得て、今までの事を話す。もちろん襲撃者と魔術の事は、伏せておく。

『先生の話も実は風斬さんについてのものなんです。』

「え、それはどういう……？」

『上条ちゃん、部外者が学校に無断で入ってくるなら、身元を調べられても文句は言えませんよ～』

「何だって！？転校生じゃないのか！？」

『記録では一人だけですよ～、それで、風斬さんの能力は概存する能力では説明ができません。』

「……あれは肉体変化じゃないのか？」

『カメラのセキュリティをかい潜ることはどう説明しますか？』

映ってなかった？

「なら先生、彼女の力はどのようなものだと言いたいんですか？」

『力ではなく、むしろ存在自体が現実離れしているものだと先生は

考えています。』

先生が言うことは半ば信じられない仮説だった。だが、それで全て話は繋がる。

ＡＩＭ拡散力場？あれは確かに能力者が無意識に放つ力だ。そして、人には機械で観測できるデータがたくさんあるらしい。

そして、学園都市の様々な能力者のＡＩＭを集め、彼女が生まれた？

そもそも、彼女は人ではなく、それらが集まった現象？

話が終わり、俺は考えた。……だが、その事実で俺の行動に何か影響するのか？風斬は……

「……まあ、世の中には人外の存在でも、愛するなんていうとんでもない守備範囲の奴もいるしな。……人間じゃないから助けない理由はないだろ。」

『ふふふ、そうですね。私は風斬さんに会ったことはありませんが、そう思える存在なんですね。』

「……はい、アイツが消される理由もないし、どんな理屈があっても関係ない。やることに変わりはありませんから。」

『上条ちゃんは、まっすぐに育っているから、安心したのです～。』

「……でも先生、この発見は科学者にとっては、すごい発見なんじゃ……」

『まあ、そうですけど、自分の生徒の大事な友達を売るなんて、先生には出来ませんよ～。そう思われたなら、ちょっと落ち込みます

よ～。』
先生は、本当に先生なんだな。
思わず笑ってしまう。
『な、何がおかしいんです～！』
「すみません先生。やっぱり先生は先生なんだな。」
『褒めてるんですか!?、それ?』
「はい、最高の褒め言葉です！」
『か、上条ちゃん!?いきなり何いっ…』
ブツッ！
あ、電話が……。電波悪いな、ここ。
でも、こっからは一人でやる。
絶対にアイツを助ける！
風斬達が向かった場所へ向かう。
そこには、今にも巨人の腕で押し潰されそうな風斬がいた。
「やめろぉ、テメェ！！」
間に合わない！！
言ったそばからこれかよ！
くそぉぉ！！！

その時、一筋の閃光が巨人の腕を消滅させた。

「え？」

「なに！？」

魔術師も唖然としていた。

御坂か！？　でも白井とテレポートして外に出たはず……。

「おいおい、女の子相手にひどくないか、それ？」

風斬の前に高貴が威風堂々と立っていた。

魔術師は歪んだ笑みをする。

「なんだそりゃ！、何だぁこの笑い話は。一体どういう育ち方すればそんな気持ち悪い考えするんだよ！化け物守ってヒーロー気取りか！」

「なにをいってんだか、お前の馬鹿げてる思想の方がよっぽど化け物だよ。まあ、理解出来ないか…」

「高貴、無事だったのか！」

「まあね、その女の子……、いろいろ事情があるらしいけど、お前はその子を守りたいんだろ？」

「ああ、」

「なら、アンチスキルのとこへ連れってやりなよ。……って、あれ？」

あの時の手負いのアンチスキル達がやって来ていた。

「離れるじゃん！これから一斉射撃するから…」

「……黄泉川先生、……いや、みんなは手を出さなくていいよ。」

何を言っているんだ、アンチスキルをこんなにした奴らだぞ！

「何言ってるじゃん！？そいつは…」

その時、巨人の片方の腕が高貴に振り下ろされる。

だが、
ボワッ！

高貴の背中から白い翼が出てきて

ズオッ！
逆に素手で薙ぎ払った？

「は？」
「何だと！？」

なんだ、あの力は……。
御使堕しの時と同じ、圧倒的な存在感。

「エリス！ぶち殺せ、一人残らず！こいつらの肉片で体を作ってやる！」

魔術師は意に介さず、巨人を作り、巨人で奴に迫る。

「爆ぜろ！」

巨人が腕を振り下ろし、高貴を襲う。

「ａｐｊｐｍｗｔｊｇｄｔｇｍｐ」

高貴の手から極光が生み出され、爆風に放つ。

ブオォ！！

極光によって、巨人は掻き消され、彼女を守っていた巨人の上半身をも消滅させた。

……出鱈目だ。

これはもはや戦いではなかった。

蹂躙、排除、作業、駆逐、様々な単語が並ぶが、戦闘という言葉が思い浮かばなかった。

「なんだこれは……学園都市は化け物の巣窟か、お前は何だ！？」

「いや、俺はただの通りすがりの、」

一呼吸置いて高貴は続きを紡ぐ。

「学園都市最強の能力者だよ」

人間離れした速さで彼女との間を詰め、

「少し、ね・て・ろ」
高貴は彼女を思いっきり殴りつけ、地面が割れた。
俺は底知れない高貴の力に戦慄した。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

奴を殴った瞬間、奴の記憶を少し垣間見た。
住み分け、ねぇ。
全く、余計なお世話だ。
そうこうしてると、魔術師ことシェリー・クロムウェルは（名前もさっき探りました）が不気味に笑っている。
「まさかこんな化け物がいるとはね、だけど、」
「エリスには、こんな使い方もあるんだよ！」
床が崩れ、彼女が下へ落下した。
「逃げられた！くそっ！」
「落ち着け、当麻。冷静に状況を確認しろ！……おそらく、奴の次の狙いはインデックスだ」
「え？」
「奴は、魔術と科学での争いの火種になるつもりだ。そして、お前

ら三人の内誰かを殺せば奴にとっては勝ちだ。」

「じゃあ尚更アンチスキルに……あっ！！」

「ああ、お前が考えた通りだ。この事はアンチスキルには協力を要請できない。インデックスは学園都市の住民じゃない、不法滞在者だ。捕まる確率が大幅にある」

「じゃあ、どうするんだよ？まだ地下の封鎖は解かれそうにないんだぞ？それに魔術師を追うには、あそこの穴から降りるのが一番良いだろ！」

当麻が言った穴とは、先ほど魔術師が逃げた時に空けた穴だ。まだ時間がたっていないから追跡は十分可能なのだが。

「でも、この穴……すごく深そうですよ……」

風斬が言った通り、相当深そうだ。人間が飛び降りていい高さではないかもしれない。

「当麻、ここで待っていろ。大丈夫だよ、俺なら奴を止めれる。」

「なら、俺も！」

「ダメだ、閉鎖が解かれるのを待つんだ。」

「それに、こうしている間にもあの魔術師は地上に出てしまうかもしれない」

すると風斬がしゃべった。

「私が…私が行きます！！」

「「！？」」

風斬はさらに言う。

「わ、私は…彼女のいう通り、人間じゃありません。……だから、あの穴から落ちても多分平気です。…それに……化け物の相手は化け物がするべきです…。」

風斬の泣きそうながらもはっきりとした声には覚悟を含んでいた。

「大丈夫です。私、化け物ですから、いくら殴られても死なない…」

「軽々しく、自分のことを化け物と言わないでほしいね。貴女は本当に化け物なのか？」

俺は彼女に問うた。

「自惚れるのも考えものだよ、……化け物の相手は化け物がするべき、か……。化け物と呼べるほど貴女は強い存在ですか？狂った存在ですか？俺にはただの女の子にしか見えないな。……化け物というのは、非道の限りを行い、理性を持たないような奴らの事を指す。定義を履き違えてはいけないよ。貴女もあの女も化け物には届かない。つまんないことで悩む、ただの人間だ。」

「…ただ、もし友達を助けたい、会いたいならと考えるなら、一緒に来てもいいよ。……貴女は、どうしたい？」

「私は、あの子を…助けたい！」

「そうか」

俺は、彼女をお姫様抱っこをして、飛び降りる。

「え？」

「おまっ、何を……！？」

当麻が何か言ってるが、聞く耳持たんな。……あまり口にしたくはないんだけど、風斬の方がお前より丈夫なんだ、諦めてくれ。

落ちている途中、彼女は俺に質問してきた。

「あの、貴方は…大丈夫なんですか？」

「いや、さっき見たでしょ?俺には翼あるから。」
ボワッ、
白い翼を広げ、地下を滑空していく。
「天使、みたいですね。」
「……そう見えるかい?」
一瞬だけ、焦ってたりする俺。
「はい、翼も綺麗ですし……、」
まあ、ばれてもいいけどな。
「それじゃあこちらも聞くよ、俺達は…君を助ける事は出来たかな?」
彼女は驚いた顔をしたが、
「私は…みんなに会えて…よかったです。だからそれが…救いです。」
満面の笑みを浮かべてくれた。
さあ、ラストスパートと行こうか。

堕天使は少女の悲しみを断ち切る。（後書き）

もう少しで、終わりますね、虚数編は。そろそろ五和をどのように絡ませるか考えないと。　ヒロインかは未定です。

圧倒する閃光（前書き）

訂正版です。

相変わらず堕文ですみません。

主人公が偽善者に見える～！

自分で書いたのも何だけど…。

圧倒する閃光

ｓｉｄｅ　上条

くそっ！　先にいってしまった。多分大丈夫だとは思うけど、何か俺に出来ることはないのか？　それに、俺からもアイツに言っておきたい事もあるのに……。

「兄様？」

紫穂がどこからともなくやって来た。

そうだ！　紫穂の力なら！

「なあ、紫穂。お前なら、封鎖されている壁は破壊出来るか？」

紫穂は信じられない、という顔をして、

「ええ！？、ちょっと兄様、なにを言ってるんですか！もう少しで解除されますから待ってください！」

「それじゃ、意味がないんだ！早く行かないといけないんだよ！頼む！！」

困った顔をして、

「……はあ、兄様じゃなかったらこんなことしませんよ。……でも条件があります。」

真っすぐに、俺を射抜くような目で見た。

「……兄様達が何に巻き込まれたのか、詳しく教えてください。」

なっ！

「……それは……」

「私だって兄様の家族です。……何も知らずに、傷ついている二人を見るなんてイヤです！！」
紫穂は凄い剣幕で当麻を睨みつける。
ここで答えれば、アイツはどう思うだろう。
軽蔑…するかな？

「……もういいです。……それなら、こちらにも考えがあります。」

紫穂は走っていってしまった。

直後

ゴォォォ！

階段辺りから爆音が聞こえた。
……まさか！　くそ、すまん高貴、
俺は慌てて音がした方向へ向かう。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

俺と風斬は、魔術師と対峙していた。

「エリスなら先に追わせているわよ。今頃もう、標的の前にたどり着いてるかしら……それとも、もう肉塊に変えちまってるかもな！

！」

「貴女は…！！」

シェリーは不敵に笑う。風斬は憎しみを含めた視線でにらみ付ける。そんな様子を見てシェリーは満足そうな表情になった。

「ふふっ、それでいい。お前達は私の相手をしていれば良い。特にあなたはエリスを壊せるみたいだしね。あの女は見逃したけど」

その一言に、奴の記憶のことを思い出す。

「……貴女は間違っている！今はまだ、科学も魔術もバランスが取れているじゃありませんか！！あなたがこんなことをする必要は……」

「超能力者が魔術を使うと、肉体を破壊してしまう。聞いたことはないかしら？」

急に、シェリーが言ってきた話は、俺もいつか聞いたことがあった。しかし、何故そんな話を持ち出してきたのか。

嫌な予感がする。……まだみていない記憶があるのか？

「くくっ、おかしいと思わないかい？どうしてそんなことが分かっているのかって」

まさか……。

高貴は青ざめ、魔術師を見る。

「そうよ、２０年ほど昔に学園都市とイギリス清教のそれぞれ一部で起こった、『新たな能力者を作り出す』実験があったのよ。…魔術と超能力を共に使いこなす者を作り出そうとしてね……。だけど、政治的判断で介入した『騎士団』の乱入により被験者は１人を除き全滅したわ。……その際、その１人を逃がそうと、科学側の少年が魔術を行使するも、拒絶反応を起こし倒れたわ。そして、直後に騎士のメイスで殴打され死亡したわ……」

「そんな…ことが……まさか！？」
そいつは……

高貴がシェリーを見る。彼女は少し自嘲気味に笑うと話し出す。

「そういうこった。エリスは私の友だちだった。エリスは、学園都市から連れてこられた超能力者の一派だった……私が教えた術式で、エリスは血まみれになって死んだ。……そうよ、エリスは施設を攻撃してきた『騎士団』から私を逃がすためにな！！」
「私達は住み分けなきゃならない！！魔術師は魔術師の、科学者は科学者の、それぞれの領分を決めておかないと、何度でも、何度でも同じことが繰り返されちまう！！」
怒声を交えた声で喋るシェリーに、俺は反論した。
「それでも！！あいつらに一体何の罪がある！？貴女の件とは無関係だ！どんな理由を並べようとも、あいつらとこの町を襲うことは阻止させてもらう！」　俺の反論に、シェリーはさらに怒声を張り上げて言い返す。
「そんなの、知ったことじゃないよ！！私は起こせれば何でも良いんだよ！！」
「……もう黙れ」
唐突に彼女の後ろから声が聞こえた。いつのまにかシェリーの後ろに、当麻と紫穂が回り込んでいる。すぐに反撃しようとするシェリーだが、それすらもさせない内に、当麻は攻撃に入った。
「戦争、戦争、軽く言っている暇があるんなら、もっとマシな方法考えろ！！！」
シェリーの鳩尾に、当麻の拳が直撃、吹き飛ばす。壁にまで吹き飛んだシェリーは、ぶつかり、地面に落ちる。
「くっそぉ……」
それでも、まだ彼女は起ち上がろうとする。
「それでも、今は……戦争を起こさなきゃならねぇんだよ。学園都

市はガードが緩く、イギリス清教は禁書目録をよそに預けるなんて甘えを見せてんだ。

何もかもが、あの時と同じだ。あの時だけでも、あれだけの悲劇が起きたんだ。これが、学園都市とイギリス清教との全面戦争になったらどうする!?」

シェリーはよろよろとした足で前に進んでいく。

「くっだらねぇ……」

その後ろ姿に向けて当麻がつぶやいた。それに、シェリーは止まる。

「怒るのはいい。悲しんだって良い。だがな、風斬が何をした!!インデックスが何をしたっていうんだ!!矛先を誰かに向けちまったら、何もかもが最悪な方向に向いちまうじゃねぇか!!」

当麻が言い終わった瞬間、シェリーは床に膝をつき、座り込み、言い始める。

「分かんねぇよ…畜生。魔術師も、科学者もみんなぶっ殺したいと思っているよ…」

そして、立ち上がり、怒声を上げる。

「だけどそれだけじゃねぇんだよ!!本当に魔術師と争わせたくないと思ってんのよ!!!頭の中なんてはじめからぐちゃぐちゃさ!!」

本当に、魔術師は……。

「信念なんて……1つじゃねぇ、星の数ほどあるんだ!!」

しかし彼女の声は徐々に弱々しくなり、怒りではなく、悲しみが含むようになっていった。

「……なんで気づかないんだよ。お前の中にある信念は、たった1つだけだろうが!!」

それを見ていた当麻が叫ぶ。

「お前の目には、俺がインデックスに嫌々つきあっているように見えるのか？互いの領分決めてないと、争いになっちまうように見えるのかよ！？俺はな、インデックスがどちら側の人間だろうが大好きだ。高貴だってそうだろうし、逆にインデックスだって俺たちのことが嫌いじゃないはずだ！！俺たちは、住み分けなんかしなくたって、一緒に生きていける！だから！俺や、高貴の大切な人達を、奪わないでくれ！！」

……もう俺のここでの役目はないな。

「後は任せたぞ、当麻。」

俺は翼を広げ、いろいろ混乱して固まっている紫穂と風斬を抱え、魔術師を通り抜け、インデックスの救出に向かう。

「兄…様？」

「ごめんな、紫穂。……いつかは何もかも話す。だから……、今は聞かないでくれ。」

……紫穂は、こっちの世界を知る必要はない。だが、世界と向き合う時にはどっちにしろ、知ることになるだろう。

「……いつか…ですか……？」

時期の違い……それだけのはずだ。だけど…

「ああ…時が来たら…話す。約束するよ。」

まだ、知ってほしくない。

俺は巨人によってできた穴を一気に突っきる。

間に合ってくれ！

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　インデックス

地上では、インデックスとゴーレムが激しい戦闘を繰り広げていた。
……大半がゴーレムの攻撃。それでも、インデックスは善戦していると言って良かった。

私には、魔術を行使するための魔力も、超能力も使えない。腕力だって人並み以下。…だけど！

「左方へ歪曲せよ（Ｔ・Ｔ・Ｔ・Ｌ）」

真っすぐにインデックスに進む拳が突如、左に逸れた。
それでも、振り向きざまに横殴りをする。
「上方へ変更せよ（Ｃ・Ｆ・Ａ）」

何度やっても、彼女に当たらない。懲りずに、もう片方の拳で押し潰そうとしても、
「左脚を後ろへ（Ｐ・Ｉ・Ｏ・Ｂ・Ｔ・Ｌ・Ｌ）」
左足が後ろに動き、ゴーレムはバランスを失う。

強制詠唱。

これはある種の暗号を用いて術式を操り、敵の頭に割り込みを掛け、

暴走や発動のキャンセルなどの誤作動を起こさせるという『魔力を必要としない魔術』である。　順番に数を数えている人を邪魔するような物だ。

またその最大の特徴として、魔力を一切使わない為、インデックスでも使用できる。

しかし、強制詠唱は言えなければ全く意味を成さない。

「ＡＶＦＢＡＴＣＪ！！（両足を平行に配置し、その重心を崩せ）」

インデックスはその隙をみせず、強制詠唱を唱える。これを繰り返していけば、遠距離操作のゴーレムの場合、行動不能にすることも可能だ。インデックスは勝機を見出だした。

グォオオオ！！

しかし、強制詠唱を唱えても、なぜかゴーレムは、崩れる気配を見せない。

「ま、まずいかも……、遠距離操作から自動制御に変わって……！！」

割り込めなくなった、とインデックスは悟った。

ゴーレムはさらに近づき、インデックスに腕を振り上げ殴りかかろうとする。

一筋の閃光がまたしても、腕を薙ぎ払う。

「え？」

こーき？

高貴が翼を生やして立っていた。

ゴーレムはすぐに再生を開始する。だが、再生するにしても、荒々しく、そこら中の物を無理矢理吸収していくといった感じである。

ゴーレムが暴走している……。再生機能が制御できないのかも……

インデックスの予想が当たってたとしても、再生したことには変わりはない。

「…もう…休め…」

高貴から圧倒的な存在感が漂う。

巨人は彼を叩き潰そうと、腕を振り下ろす。

ドゴォォ！

地面は割れるが、彼は上空にいた。

「ａｄｍｊｇｔｍｙｌｈｃｅｍｘ」

あれは、テレズマ？

訳のわからない言葉を発した刹那、

無数の光線が巨人を射抜く。

何なのこれ？私の知識にもない……。なんて圧倒的な……。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　紫穂

紫穂は、またしても固まっていた。

一体どうしてしまったのだろう？

兄様が変わってしまった。あの災害で本当は何が起きたのか、そして、何を背負っているのか？

なぜ、ここまでの力を持てたのだろう。どうして今まで隠していたのだろう？

いつか、全てを語ると言ってきた。

今になって、痛感した。私は兄様を理解したつもりだっただけで、実は何も理解していなかったのではないか。

私は、近くにいると思っていた人の背中を、ただぼんやりと見ていることしかできなかった。

圧倒する閃光（後書き）

恋愛を取り入れるべきか…。

何かヒロインや意見ありますか？

五和という意見がありましたが、他どうですか？

黒幕は笑う（前書き）

駄文になってしまった。

黒幕は笑う

ｓｉｄｅ　風斬

終わった…。

もうこれで……優しい幻想はおしまいなんだ。

分かるんだ。私はもうすぐ、消えてしまう。元々能力者の力によって支えられている不安定な存在。いつ消えてもおかしくない。でも、初めてできたあの友達と…会えなくなるのは…寂しいな。そう考えてると、私を助けてくれた人と思い出をくれた人達がこちらにやって来た。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

「って、もう終わったのか！」

当麻が穴から顔をだしてきた。

「まあね、そっちは…？」

「ああ、片はついたな。あんまいい気分じゃないな。」

……彼女も結局は両サイドの歪みの犠牲者という訳か。

「そうか、……彼女に何かいうことがあるのだろう？」

「ああ、そうだったけど、もう意味はないようだな。お前が先に言っちまったようだしな。」

当麻は少し苦笑いをしてきた。

「悪いな、言わずにはいられなかったんだ。」

「まあ、いっか。結果的になんとかなったし。誰がとか、あんまり関係ないし。」

そう言って、風斬の前に立つ。

「まあ、俺が言いたいことは、こいつが全部言ってしまったようだな。」

「はい、今はとても穏やかな気分です。」

自分を偽るような笑みではなく、あの時見せた、本当の笑顔。

「ひょうか～！」

インデックスが彼女の元へ飛び込む。

俺は少し遠くから、その光景を見ることにした。

まったく……、どこが化け物だよ。

微笑ましくて、久方ぶりに心から笑った気がする。

「って、何これ！」

御坂がやって来た。

「……また、アンタ達の仕業なの？」

そう言いながら、こっちに歩いてきた。

「まあ、いろいろあったんだよ。」

まあ、この有様は確かにひどい。

道路…というか、辺りはゴーレムが暴れたせいで目茶苦茶なのだ。

「だけど、なんとか事件は解決したよ」

「そう、早く逃げた方がいいわよ。アンチスキルや風紀委員が来るし……え、紫穂さん…」

紫穂は、呆然としていた。

「紫穂……」

気まずい雰囲気になってはいるが、とりあえず声を……、

「お姉様ぁぁ～！！って、えぇ～！？」

「ゑ？」

ここで白井が来たか。

「…えっと…まさかこれ、お姉様と紫穂さんが…？」

思いっきり動揺している白井。

「いやいや！違うから！」

御坂にもどうやら冷静さをなくしたようだ。

「とりあえず、逃げましょう！アンチスキルも直に来ます！厄介事になる前に…！」

「ちょっ、白井さん！？」

「く…黒子！？」

あ…消えた。

「全く、賑やかだなあ～。」

「そう見えるお前の目は節穴か？」

当麻がつっこんできた。

「まあ、そういうことでいいじゃないか、…ただ…」

「ただ？」

「もしさらに彼女達がこちらに介入してくるのなら、考えなきゃいけないな。」

そう、これ以上関わらせるべきではない。

「どうするんだ？」

「……記憶を弄るしかないかな？」

「なっ！…馬鹿野郎、やりすぎだろ！？記憶まで消す必要は…」

当麻の言うことは分かってる。彼女らを冒涜するような行為だからな。……それでも、

「生半可に関わりを持てば、すぐに死ぬ。プロでも簡単に死ぬ世界だ。…どんな手を使ってでも引き離さないと…。」

「それだけか？」
当麻は俺を睨む。

「…この世界には、都合のいいヒーローはいないからさ、どんな手を使ってでも、己の大切なもの、譲れないものを守らないといけない。…綺麗事だけではやっていけないし…、現実は残酷だから……。でもこれは…、あくまで最終手段だよ。」

俺は真剣な眼差しを向けることに意識を傾ける。

「…そこまで……。悪かったな。そういや、俺もどうこう言える立場じゃねえしな。」

「当麻……」

「高貴のやり方には私も異論はないよ。……高貴の言う通り、素人が入るような世界じゃないもん。…あまり気は進まないけど…、今は最善なのかも……。でも……、」

インデックスも悲しい目を向けてきた。
「……それで高貴はいいの？」

「ああ…。大丈夫だよ、俺は心配ないから。」

「でも、」

「本当に優しいな、インデックスは。本当に大丈夫だよ。それより当麻、一応病院行ったほうがいいよ。感情がハイになってて、今は痛みを感じてないけど、凄い怪我だよ、見た感じは……」

「まあ、な。じゃあ病院に行っとくよ。高貴は？」

「後で追いつく。先行っといてくれ。」

「分かった。」

風斬とインデックス、当麻は病院に行くため、この場を離れた。

…確かに、俺は紫穂達と向き合う勇気がない。そして、俺は間違っているのだろうな。

……俺がやろうと考えたことは、ひどいことだと…自分でもわかっている。だけど…、みんなはこっちに来るべきじゃないんだ。…許してくれとは言わない。

だから、俺は

ズキッ！

「！？」

突然体に痛みが走り、視界が眩んだ。

「……う……ぐぁ……。」

…天使の力の…反動…かな…。結構…きつい…な…。

やば、意識が…飛び…そう…。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　土御門

「お前は、これで満足か？」

俺は逆さに浮かんでいる統括理事長に問い掛ける。
奴は薄気味悪い笑みを浮かべて何も言わない。
虚数学区・五行機関を掌握する鍵が完成に近づいたか…。
そしてそれが能力者の力が集まっているとはな。
さらに、不安定な五行機関を叩くのではなく、制御する。
そのために、
「風斬氷華に自我を植え付け、実体化の手助けをするなど、どうかしてる。」
幻想殺しは、虚数学区にとっては致命的な物だ。それを側にいさせ、生存本能を作ることにより、自我を生み出す。
「とんでもない人格になれば、どうする気だったんだ?」
「カード、選択肢をかえるだけだよ。それに自我があれば予測しやすい。」
ちっ、こいつはやっぱり正気とはおもえんな。何しろ
「虚数学区の鍵を完成させるためとはいえ、今回の件で上条当麻と上野高貴が正規のイギリス清教のメンバーを倒してしまった。…大聖堂の連中は黙っているとは思えない。…この町だけで勝てると思っているのか?」
「あれを制御すれば、取るに足らんし、今でも勝機はこちらに大い

にある。」

随分と余裕だな。……まさか、

風斬氷華は、本来人とは別位相に存在するものだ。人とは違う位相にいる存在とはつまり、

天使？

「天界を…人工的に…作るつもりなのか？」

「さてね」

なんて奴だ。

この世界には既に、魔術という世界が存在している。なら、そこに別の世界が突っ込まれたら…

魔術世界の終焉。あらゆる魔術は使うことが難しくなり、その恩恵を受ける建造物も破壊される。

今は学園都市の中のみだが、いずれ科学が発展すると世界に広がる。いや、科学の侵食は、既に始まっている。

量産能力者計画、絶対能力進化計画。二重三重の策を使い、世界の目をかい潜ることに成功し、妹達を世界に配置した。

だが、奴はその先すら考えているのだろうな…。

「……こんなことがばれたら、魔術側は黙ってないぞ。」

死に物狂いで襲い掛かってくるだろう。

「世界を敵に回すつもりはない。それに天界を知るには、オカルトの領分を知る必要がある。」

「ぬかせ、お前以上にそれに詳しい人物がいるのか？……魔術師・アレイスター・クロウリー」

そう、目の前の人物は魔術師だ。しかも、世界最高クラス。

だが、彼は魔術を捨て、科学を極めようとした。その結果、追われる身になったのだが、その追跡網をあざ笑うかのように今日まで逃げおおせている。

「……少し、聞きたい事がある。」

「なにかね？」

「なぜ、上野高貴が必要だ？」

「彼は天界を作る上では、最高のサンプルだ。大天使を越える力を持ち、さらにまだ力を変革させようとしている。神上をいつか名乗ってもいいぐらいだ。だから、風斬氷華に間近でその力の片鱗を見せるよう仕向けたのだ。…あの堕天使の力を持つ者達はよくやってくれたよ。」

あの襲撃も、上野の決意も計算済みか。

「負け惜しみになるが最後に一つだけ、聞いてもらうぞ。」

「いいだろう」

「あの二人は計算すら凌駕する強さを持っている。だから、扱いに

は気をつけろよ。」

「善処しよう。」

奴は最後まで、余裕の笑みを浮かべたままだった。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

さっきから体が痛い。変な汗まで出てきた。

「マ…ズイ…な…。」

早くここから離れないと…。

「上野君！」

美偉さんと黒妻さんがやってきた。

「大丈夫か？随分と青い顔してるぞ。何かあったのか？」

「…心配ないです。…犯人は確保されたのですか？」

「ああ、ついさっき確保した。…どうかしたの？」

「いや、気になっただけですよ。…そうですか…。」

「彼女は一体何が目的だったんだろうな。一人で学園都市内に侵入し、テロを起こすとはな…。」

「そうね、どうして貴方達を襲おうとしたのかな？」

やっぱり、違和感あるよな。

…ここは適当に…

「……俺には分からない…。いや、もしかすると…、俺の力が…目的だったの…だろうか…？」

「お前の力か…。まあ、研究者にとっちゃあ確かに喉から手が出るほどほしいものだよな。」

「彼女から事情聴取すれば、何かわかるかもね。」

すみません。嘘をついて。

ズキッ！

体がとうとう支えきれず、膝をついてしまった。

「上野君！？」

「…おい！？ホントにどこか悪いんじゃないのか？」

「…そう…かもしれません。…早々に家で休みます。」

テレポートを何とか使おうとするが、体に力が入らない。

「や…ば…。」

それでも、何とか力を捻り出し、移動できた。

部屋に戻り、ベットに横になる。

やばい、本格的に痛みがきているようだ。

とうとう耐え切れず、俺の意識は断絶した。

黒幕は笑う（後書き）

もう少ししたら、詳しい主人公の説明を出したいと思います。予定では、１３巻あたりに出すつもりです。

焔の魔術師の憂鬱（前書き）

ステイルの出番がというかよくなるかも？

ｓｉｄｅ　ステイル

めんどくさい……。

僕は今、ロンドンの町を歩いている。できれば、一人で歩きたかったのだが…。

隣には見た目１８才ぐらいの少女がいる。

透き通るような白い肌に、青い瞳。そして、異様に長い黄金の髪。

何と言うか、髪が邪魔ではないのか？

まあ、こちらから話し掛けたくないし、聞くほどのことじゃないね。

隣にいるのは、普通の女ではない。イギリス清教第零聖堂区『必要悪』のトップ、最大主教。

名をローラ＝スチュワート。

イギリス清教は本来、エリザード女王がトップなのだが、彼女は忙しい、時間がないなどといった理由でこの女に普段の雑務を任せている。（押し付けている）

にしても、この女は、護衛も付けずによく外を歩けるものだ。

…もし、何かあったら…、僕の責任じゃないか！

めんどくさい…

「ハァ…」

溜息をついてると、

「どうかしたるの？」

「いえ、ロンドンの町を護衛も付けず、ノコノコ歩く女が僕等のトップなのかと、少し溜息が出ただけです。」

「小さき事を気にするのね。寧ろこの私と共に歩める状況を楽しむことは出来ないのかしら？婦人の懺悔を聞きたる神父には遊び人という意味もあろうけど、少しは冒険してみる気はないのかしら」

…なんだこの喋り方は…！？

こいつはこんな喋り方をしたか？

癪だが、聞いてみる事にしよう。

「一つ尋ねてよろしいでしょうか？」

「硬きことね。なに？」

「貴女はどうして頭の悪い喋り方をしているんですか？」

「…？」

なに、変なこと聞いてるの？、みたいな顔をするな！

「な、ええ！？…おかしいの？日本語はかようなものではないければかしら！？」

「…使い方が狂っています。後、何を言っているか理解出来ません。」
「あれ？…文献を調べた上に、日本人にもチェックをいれてもろうたのに…」
誰だ、紛いものを教えたのは……。
「誰ですか、その日本人は？」
「土御門元春なるやつなのよ。」
あの変態か…。
「妹に手を出すような変態…いや、危険人物に教わる事が間違っています。あと、日本人の基準にしないでください。」
「さにあったか…。しからば誤りたる…あれ？」
「……直せないなら、もうその事にはコメントしません。さっさと用件を述べてください。」
「あいわかったなのよ、其の前に…」
二つの紙にルーンの紋章が書かれており、一つをこちらに手渡した。
『あっあー。聞こえたるかしら？』
『…はい。ですが、まだ馬鹿口調なのはどういうことですか？』
『ええ！？今は英語でありけるよ！』
『……』
『で…では始めたるわよ。』
『ステイル。法の書の名は知りたるわね。』

『確か…解読不能の書で著者はエドワード＝アレクサンダーでしたね…あの世界最高最悪の魔術師の…どうかしましたか?確かバチカンに保管されていたのでは…?』

『ええ、そうなのよステイル。法の書の特徴は知りえるかしら』

『法の書には、彼が召喚したとされる守護天使エイワスから伝え聞いた、人には使えない天使の術式を書き記したものだとか。法の書が解かれたら十字教の時代は終わり、新世界がやってくるとか。…意志なき天使から話を聞き出すのは不可能だとしても、十字教の終わりは気にはなりますね。しかし、』

『それらは、誰にも解読できず、禁書目録、さらには暗号解析の専門家のシェリー＝クロムウェルですら不可能だったとか。』

『もし、それができんとするならば、どうしたる?』

『何ですって!?』

『その者はローマ正教の修道女でオルソナ＝アクィナスと言うさうよ。…どうやら写本を参考に解読方法を探したそうなの。』

『あれを解読したのですか、…奴らは今になってなぜこんな……。まさか…、戦力増強が狙いなのか?』

『いや、そのような事ではなきことなのよ。』

『では、なぜ…』

『法の書と彼女が盗まれたさうらしいから。』

『なっ！？どうやってそんなことを…バチカンの警備は完璧なはずです。不可能なはずでは…！』

『ローマ正教は日本で国際展示会を開くため、法の書を移送していたのよ。色々と力をつけるために…。しかし、そこを狙われたのよ。…どうやら天草式十字凄教が犯行に及んださうよ。』

天草式？　確か神裂の…

『……なるほど、…それで…神裂は何か動揺したりしましたか？』

『連絡が取れんのよ。』

何をしているんだ！この女はぁ！

部下の事、それに重要戦力である聖人だぞ。何世界の火種を野放しにしているんだ！

『…何をしているんですか貴女は…』

『ま、まあ、なってしまった事は仕方なきにして、……彼女が下手を打つ前に、カタをつけてほしいのよ。方法は何でもいいわ。』

『…あの神裂と戦う、ということもですか？』

いや、無理だろ。

『場合が場合ならね。それと、貴方には学園都市と接触して頂戴ね。』

『これは、魔術側の問題であり、科学は関係ないはずですが…。』

『禁書目録の手が必要なの。専門家は必要なはずよ。既に話はつけたるから。あっ、それと管理人ととある能力者を同伴させることになっているけどね。』

『…幻想殺しと彼ですか。』

『ええ、神裂と仮に戦うならば、能力者最強と呼ばれる彼は必要なはずよ。』

『そう、ですか。』

まあ、確かに彼の力は底知れないが…、理事長がまた試したいのだろうか。

『最後にこれを』

彼女は十字架のネックレスをこちらに渡してきた。

『これは霊装の一種ですか？仕掛けは見当たりませんが』

『オルソナ＝アクィナスへの贈り物という所かしら。まあ、適当に渡しといてね。』

また面倒なことになりそうだ。

僕は彼女と共に、聖ジョージ大聖堂に向かった。

焔の魔術師の憂鬱（後書き）

違和感なく主人公を溶け込ませるのは難しい。

何度もいったかな？

１３巻に急展開があります。

当麻と高貴の道が分かれる瞬間であったりします。

まあ、期待しないでください。駄文になるかもしれません。

愛すべき日常？（前書き）

高貴が少し馬鹿になります。

愛すべき日常？

9月3日
本来なら昨日から授業があったのだが、例の魔術師が暴れたせいで、二日休みになったようだ。
いや、二日休みでいいのかな？
まあ、学園都市ですから、らしい。
……深く追求はしない。
そして現在、当麻は珍しく病院で寝込まなかったので、一緒に登校している。
「ホント、珍しいな。巻き込まれて寝込まないなんて。」
「ふっふっふ、上条さんは成長したのだよ。もう病院にはいかねえ！」
「まあ、俺らって尋常じゃない世界にいるしな。すぐに送られるかもよ」
「いやいや！送られてたまるか！！」
「まあそうならないために俺も協力するよ…。」
「助かる～！！病院には行きたくない。」
どうやら、余程行きたくないらしい。

思わず、苦笑いする。

「ちょっとアンタ達、待ちなさいよ。」

御坂の声がするけど、当麻は振り向かない。

小声で、当麻に聞く。

「どうするんだ？」

「…また、ビリビリを飛ばされるんじゃ・・・？」

「……ああ、あくまで当麻に、だけどね。」

「やばいって、朝っぱらから電撃はキツイんだけど…」

「聞こえてるわよ」

「「うわっ！」」

俺達はいつの間にか後ろにいた御坂から飛びのく。

「アンタら、アタシを何だと思っているのよ？」

当麻、

「ビリビリ中学生の御坂」

俺、

「可憐な女子中学生。」

「ふえ!?、ちょっ、ちょっと何言ってんのよ!!」バチバチバチ！

雷撃が俺達を襲う！

「上条ガード！！」

俺は当麻の背中を押した。

「ふぇ？」

呆けている当麻。

そして、

「うわわっ！」

右手で打ち消す。

「何人を盾にしてんだよ！？」

「お前が怒らせたんだろ？ビリビリはやめてやりなよ。」

「アンタがへんなこというからよ！！まったく、どうかしてるわよ……あと、もうビリビリいうなぁ～！！」

「……怒られてるぞ、当麻。」

「だから、お前だって！！」

うむ？俺は褒め言葉のつもりだったんだけど……

「いや、俺は別に……あ、」

辺りに怪しい人達がいた。

みんな笑ってるんだけど、目が怖い。

「奴がいたぞ！」

「こいつを倒せば最強だぁ！！」

「やっちまえ！！」

「「「「「おおぉ！！！」」」」」

いやはや、懲りないね。

「……先いってて。……すぐに追いつくから。」

「…とりあえず、がんばれ…」

憐れみの目でみるな。

「その…アタシも戦うわよ？」

「…御坂が関わる必要はないよ。すぐに終わらす。」

まあ、仕方ない。ここで少し本気だすしかないか。

「気をつけろよ。」

「わ、悪いわね。」

二人は先に学校に向かった。

一応、デュアルスキルの事は、あいつら以外にばれるのは、まずいから風と反射のみで戦おう。

まあこのまま登校してもいいんだけど、…校門に立たれるとなあ…。

時計を見る。遅刻決定かな。

「不幸だ。」

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　上条

「アンタ達の事は、紫穂さんには、まだ言わないのね。」

「ああ、あいつはどんな事があっても、みんなを守りたいと思っている。だから、巻き込みたくないんだってさ。」

「そう…。なら聞くけど、アンタは、アイツをどう思う？」そう言って、真剣な目でこちらを見る。

「え？…うーん、強いし、性格いいし、それにかっこいいしな。…一言でいうなら、ヒーローかな…まるで…。」

アイツには力もあるし、すげえ理想を持っているし、救われた人もたくさんいる。本当に万人にとってのヒーローだし、俺もお世話になっている。いい奴だよな。でも、

なぜ、御坂は、心配そうな顔をしているんだ？

「なら精々、ヒーローを助けなさいよ。じゃないとアイツ……」

「死ぬわよ、」

「え？」

アイツが死ぬ？

有り得ないだろ、アイツはあの海にいった時の化け物を倒したらしいし、それ以上の威圧感を感じた。どうやったら…

御坂は言いたい事を言い終えたようで、学校に向かう。

「おい！それは一体どういう…」

「…間近にいて分からないの？アイツの異常性が…。確かにアイツは紛れも無く善人よ。でも、だからこそ異常なのよ。」

「だからお前は、何を言っているんだ？」

善人だから異常？

なんだそりゃ！？

「私から言うつもりはないわ。アンタ達が何も教えないのと一緒で……。アンタも気づきなさいよね、まったく……」

わけが分からなくなって動けない当麻を置いて、御坂は去っていった。

「一体何が危ういんだ？」

当麻は首を傾げるばかりであった。

彼女は彼については言及しなかったが、彼も十分異常だ。

その違いとは、無自覚と自覚、そして、自分の命に対する価値の相違。

一方は、自分の感情に従い、生まれる行動、片方は、義務から生まれる行動。

自分の命は自分のものだと自覚しているのか、それとも、自らの命は他者を護るためにあると考えるかの差だ。

そして、その差がいずれ、両者の明暗を分けることになる。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

「朝っぱらから、運動なんて趣味じゃないんだけど…」

目の前に人の山がある。

全員、もれなく気絶中。

「…まだ間に合うかな？」

残り５分。

「うわぁぁ～！！」

反射を使い、空に舞い上がり、風を使って体を学校まで飛ばす。

そして、彼はこう漏らす。

「皆勤賞がぁぁぁ～！！！」

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　当麻

教室で現在小萌先生によるＨＲが行われている。

「上条ちゃん、高貴ちゃんはまだですか～？」

正直に言おうかな。

「えーと、腕に自信のある能力者達と絶賛バトル中でし……いや、正確には襲われてました。」

「ええ～！！？？上条ちゃん！それはどういうことなのですか！？」

都市伝説の事を話してみた。

「はぁ…、そうなのですか。じゃあ欠席にはカウントしませんね。」

これはある意味不幸かな。今頃急いで向かってるだろう…

ガララ！

「遅れてすみません！！」

いってる側からあらわれた。

「事情は聞いてるから、大丈夫ですよ～。欠席にはカウントしませんし。」

「え？ああ…そうですか…」

予想通りの反応でｏｒｚな感じになっていた。

「コウヤン～。よかったやないか。」

「ホントだぜぃ。普通なら遅刻ぜよ。」

「なあなあ、襲ってきた奴の中に女の子とかいたかにゃ～？」

こんな時でも、こんな事を聞くのか！お前らちょっとは高貴の心配を…

「いたな。スケバン風の奴が…。」

「どうしたんや？」

「いや、一撃で薙ぎ払った。ああ、大丈夫、加減はした…」

「「「「「このニブ男めぇ！！！」」」」」

高貴の一言で、クラスの男子生徒が修羅と化した。

「モテるだけでは飽きたらず…今度は攻めも取り入れたやと～！！？？」

「この男の敵めぇ！！そういや休み中に常盤台の生徒とデートしてたにゃ！！」

「「「「何いいい～!?」」」」

「おい!!待ってくれ!あれは彼女が勝手に……」

「「「「「「そっちのほうが質が悪いわぁぁ!!!」」」」」」

「知るかぁぁ～!!!!」

高貴が教室から逃げた。

「奴を逃がすな!」

「とりあえず、縄で縛って尋問だ～!」

「ふふふ、我等異端審問会の出番であるな。」

異端審問会とは、要するに彼女が出来ているこの高校の男子生徒を粛正する委員会の事だ。

あれ?　なんで知ってんだろ?

俺も襲われたりした?

体が無性に震えたりしている。間違いない。記憶を失う前に俺は…。

「どうかしたにゃ?カミヤン。」

「…なんでもない。」

関わるべからず、俺はまだ命が惜しい。

「そういえば、俺は見たぞ！」

ゑ？

「「「何をだ！？」」」

異端審問会のメンバーにクラスメイトが、

「土御門と青髪と上条が上野と一緒にＪＣとお茶をしていたぞ！」

何かとんでもない事を暴露しやがった！！

俺には見覚え無いんだけど、

上条当麻は記憶喪失であり、失う前の記憶はないのだ。

青髪と土御門は、しまった、と頭を抱えた。

青髪はともかく、土御門は何頭抱えてんだよ！　お前一応スパイだろ！

「この三人にも速やかに尋問を開始するぞ！！」

「「「「「三馬鹿トリオ侮れんな！！」」」」」

「待つにゃ！あの時はカミヤンとコウヤンにしか目がいってなかったにゃ！」

「そうやそうや！僕等はモテない男の苦しみを味わい、近くに我等の敵がいたんや！！」

ええ～！？

逃げる気か？

だが、記憶を失っているから分からない。だから嘘かどうか分からない。

「それでも貴様らがその場にいた事に変わりはない！奴らともども、粛正する！！」

とりあえず逃げないと…。

ガシッ！

「ゑ？」

二人に掴まれていた。

「逃がさないで、カミヤン。」

「そうだぜカミヤン、こうなったら道連れにゃ！」

「知るかぁ！」

二人の手を振りほどき、ドアに向かう。

するといきなりドアが開き、

「きゃあ！」

「うわ！？」

何か姫神を押し倒していたし、！？

…キスまでしていた……。

「や…ば…」

「「「「「「このフラグ一級建築士があぁぁ！！！」」」」」」

「事故だあぁぁぁ！！！！」

俺は茫然としている姫神と顔を真っ赤にして倒れている先生を置いて、逃走する。

教室内で悲鳴が聞こえるけど、気にしたら負けだ。

とりあえず逃げないと！じゃないと殺される！！

その後、黄泉川先生と災誤先生による介入で、全員（俺達以外）がシバキ倒される事で集結した。

なお、捕まっていた二人は、白くなっていたという。しかし、小萌先生に介抱されたようで、満足げだった。

その帰り、

「そういや、大覇星祭が近いよな。」

「ああ、何やら校長にえらく期待されてしまった。」

「まあ、最強の能力者だしな。」

「お前の右手の力も反則だろう。」

「いや、でも打ち消すことしかできないぞ。」

「打ち消すこと自体が異常なんだけどな…。」

異常というフレーズを聞いて、御坂が言った言葉を思い出した。

「なあ、御坂が言ってたんだが…。」

俺はあの時の話をしてみた。

「…まあ、間違いじゃあないな。俺も完璧じゃないし、あの世界では何が起きるか分からないし…やっぱり俺は少し変わってるか……」

「…何がだ？」

御坂の言ったことは正解なのか？

「人助けに精を出し過ぎるな、ってことかな。自分をおろそかにするな…という忠告だね。」

「でも、間違いじゃないはずじゃ…」

高貴が立ち上がって、時々俺も関わっていたり…

「…まあ、間違いでもないし、正しいわけでもないのかもな。……人それぞれ、ということなんだよ。」

「そういうことか…。」

「そういうこと。久しぶりに夕食は三人で食べようかな。一緒に…あ、」

高貴が何かを思い出すと、

「…なあ、お前…、昼食作ったよな？」

あ、

「…作った覚えが……ない…。」

しまった。これはインデックスの…。

「…やっぱ、一人で食べるよ。」

シュパッ！

あ、消えた。

てか、逃げた。

「俺、生き残れるのかな…」

部屋に帰る勇気がない。

これより先は、残酷な表現が含まれます。

お見せできません。

その夜、一人の学生の断末魔が響いた。

愛すべき日常？（後書き）

次はオルソナ編です。でも、オリ展開にしたいと思います。

物語は少女の狂言誘拐から始まる。（前書き）

多分今までで一番長い話になるかな。

物語は少女の狂言誘拐から始まる。

はあ、全く。大覇星祭が近いから、みんなピリピリしてんな。特に校長、その目をやめろ。鬱陶しい。

色々と、準備をしている学生達。小萌先生の声一つで準備してるとか……、まあ俺はサボるとするか。

抜け出して、町を歩いていると、

「あ！上野さんじゃないですか。御久し振りです。」

「佐天さんじゃないですか。初春さんと紫穂は一緒じゃないのか？」

「二人とも風紀委員の仕事で…」

「そうなのか」

久しぶりに会ったな、

しばらく、大覇星祭について、それぞれの学校でどうなっているか情報交換を二人はした。

「全く、どうかしてるんじゃないのか。能力の全力使用とか意味分からん。そうなったらうちの高校はなぶり殺しじゃないか。」

不平等だと思う。

「まあまあ、そんなこと言ったら、うちもそんな感じです。それに、

上野さんが本気を出せば何とかなるんじゃないですか？」

能力を持つものが優越感に浸るのも癪だな。

「……あんまり使う気になれないんだよな。優越感を持っているようで…」

「でも、全力使用を奨励って…」

佐天さん、全力使用の能力を使われていいのか？

「まあ、何か理由があれば使うかもな。無いに等しいけど……」

まあ、聞くことはしないが。

「…変わってますよね、上野さんは。あまり力を使わない能力者なんて…あまりいませんよ。」

「そういうものなのかな。」

「そうですよ。でも、いつも誰かの為にしか使ってないんじゃないんですか？」

「いや、当麻と登校中や、襲われた時に使ったけど…」

「いやそこは…何か違いませんか？」

「変わらないと思うんだよね。やってることは…どんな理由があっても、俺はどちらか一方にしか味方できない。…相手から見たら、鬱陶しいだろうな。」

俺は、正しい事をしているのだろうか？

「でも、それは町を荒らすような人達がいるから……上野さんは正しいはずですよ。…ただ頑張りすぎというか…」

「…正しいって、何だろうな…」

「え？」

「俺にとって大切なものを守るため、立ち上がってきたが、やはり事象には二面性があったんだ。そこには……」

上条勢力。

あの魔術師が言った言葉。

イレギュラーで、不安定で、そして強大な勢力になりつつある、か。

俺の行動で世界が崩れているのなら、紛れも無く世界の敵になっているのだろう。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　佐天

上野さんは、それから黙ってしまった。

私には分からない。

自分を省みないのはかなりどうかと思うけど、正しい事をしているはず…なのに、
どうして、あんな顔をしているのだろう。

それにテロ騒動で、映像に映っていたあれは何なのだろう？

黒い翼の人間と戦ってたみたいだけど……。

最初はやられっぱなしだったけど、黄金の翼がでたら形勢逆転。普通に撃退していた。

さながら、悪魔を裁く天使みたいに。

本当に彼は何者なんだろう…？

「…それでも、貴方が助けた人は確かにいますよ。……そこは、誇っていいと思いますよ。」

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

……そうだった。あいつにも言ったはずだ。

「……まったく、だらしないな俺は。……こんな大事な事を忘れているとは情けない。」

「ホントにしっかりしてくださいよ～。上野先輩！！」

「せ…せ…せんぱい！？」

あれ～！？　まあ年上だけど、何でいきなり？

「あぁぁ～！！、そういえば初春さん達と一緒に木山先生の所へ遊びに行くんだった！？」

「へ？」

「す、すいません！！今日はこれで！！」

あ、走っていっちゃった。

ｓｉｄｅ　上条

熱い、疲れる、めんどくさい。

大覇星祭なんて危険フラグ満載な行事に参加したくないんだけどなあ…。

高貴も乗り気じゃないし…。

正直逃げたい。はいもう全速力で…。

ピリリリリっ！

携帯が不意に鳴った。

「か、か、か上条当麻～！」

うん？

「舞夏？どうかしたのか？」

嫌な予感もするけど、聞いてみた。

「緊急事態だ緊急事態だぞ～！銀髪シスターがさらわれちゃった！」

またインデックスが！？

「何だって！？詳しく聞かせてくれ！」

心配だけどまずは状況を確認しないと……！

……彼女の話を聞いて、沈黙してしまった。

どうやら二人は部屋の外で世間話をしていたが、とても背の高い赤髪の神父にさらわれたらしい。

「……なあ、顔に模様があったか？それと煙草好きか？」

「……そ、そうだったぞ～！」

間違いない、あのロリコンか……。

「……うん、多分大丈夫だと思う。……そいつは俺の知り合いだ。」

「ええ！？それはどういう…」

「いや、関わらない方がいい。…歪みたくないなら…」

「う、うん。わかった。」

通話を終え、あのロリコンが指定した場所である劇場『落楽園』までいくことにした。

「……早めに課題と予習やっといて良かった…。」

そんなことを考えつつ、当麻は歩いていった。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

佐天さんが走っていったので、一人俺は当てもなく、町を歩いていた。

そんな中、

ドカッ

何かがぶつかった。

「きゃあぁぁ!?」

「は?」

その何か……あ、なんか二重瞼の女の子だった。

「す…すいません!!私急いでいて…!」

「いや、別に構わないが…」

ぞくっ

寒気がして、辺りを見回すと、男性の視線がいたい。

「すみません。それでは！」

あ、あの子もはしっていった。

「見ない顔だな。それに…」

微かだが、違和感を感じた。

あまりにも町に溶け込んでいる…ような気がする。

そういう人なのかな。

ピリリリリ

電話か。

「もしもし、わた「なあ、高貴！すぐに学園都市の中野劇場、『落楽園』に来てくれ！」なに？」

いきなりなんだ？

「ロリコンが血迷った！」

「はあぁぁぁぁ～！！？？」

どうやらインデックスを誘拐したらしい。

なるほど、血迷ったか…。……出来ればそっちの方がいいのだが…
…まあちがうだろうな。

恐らくは……また魔術絡み。

しかも、彼女の力は今は知識のみ。

ならばその用途は、限られる。

相手は腕っ節が強い今までの敵よりも厄介……か。

「…当麻、今のうちに覚悟を決めた方がいい。…恐らく今までの…
御使堕しよりはマシだが、相当危険だ。」

「どういうことだ?」

「あいつは魔術師の中でも優秀な部類だ。何も考えず、こんな行動
に出るはずがない。恐らく、インデックスの知識を使わざるを得な
い状況に、あいつは立たされたと考えている。」

「言われてみると、……だが…今度は何が狙いなんだ?」

「分からない。ただ、気を引き締めておいた方がいい。」

「分かった。何か分かったら、互いに連絡しようぜ。」

「任せてくれ。」

通話を切り、少し警戒する。

何にせよ、目的地に向かうだけだ。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　上条

俺はバスに乗って、落楽園に向かうことにした。

「ふふん♪いつもの上条さんなら財布を忘れたり、中身がないなんていう不幸が来るがしかし！」

そう、そんな目にあっていない。

「今日は不幸は休業中か？まあ永遠に休業しといてくれ…」

なんて言いながら、地図を見ていたりする。

すると、

不幸センサーに反応あり！

明らかに怪しいシスターがいた。いや、場所との不釣り合いが…。

おいおい、またしてもインデックスみたいに巻き込まれるパターンか？

「あの～」

「はい？」

「恐れながら、学園都市に向かうためには、どのバスに乗ればよいのでございましょうか？」

「いや、バスはないよ。学園都市に行くには、あのゲートをくぐるしかないぞ。」

「はあ、そうでございましたか。それはそれはありがとうございます。」

と言いながら、バス停に向かう。

「おい！？待てって！だからバスには乗っても意味がないんだよ！」

「そうでございましたね。すみませんでした。」

今度はゲートに向かう。

あれ？　あの人許可証持ってるのかな？

変な汗が出てきた。

学園都市は交通網が遮断されているし、許可証がなければ、無理なのだ。

「…あの、つかぬ事を聞きますが、許可証は持っていますか？」

「許可証？必要なのですか？」

「えっと、持ってないの？」

頭が痛い。

助けてくれ、高貴。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

落楽園には、もうすぐなのだが、

あれはなんだ？

当麻と見知らぬ修道女が歩いていた。

「…当麻……何やっているんだい？」

すると、

「高貴、助けてくれ。」

と言いながら、かくかくしか……ふ……ふあぁー。

「聞けよ！」

「というより、女運はいいな。いつも」

「絶賛不幸ですよ！落楽園に行かないといけないのに！！」

「どうするんだ？」

「ついてきてもらおうと思う。」

「そうか…」

実は彼女、何者かに狙われているらしい。

うまくいけば、イギリス清教が保護してくれるかもしれない。

そんな感じで、三人で歩いているのだが、

「「暑くないの？」」

「鍛えてますから」

「何故っ！？」

今頃のシスターは、体を鍛えることが日課なのか？

それに…何か笑顔慣れしている感じが…

まあシスターさんには、笑顔が必要なのかな。人の懺悔を聞くとか、神に仕えるとか言うけど……。

何だろう？　この胸騒ぎは……

物思いに耽っていると、当麻がヒートアップしていた。

……あのコント？、を見ていると、俺が考えてることは、取り越し

苦労なのかと思ってしまう。

緊張感ないな。いつもの事だけど……。

二人が騒ぎ、俺が悶々としている内に、目的地にたどり着いた。

……とりあえず、あえて言おう。……長かったと！！！

強襲！！天草式十字凄教！！（前書き）

連続投稿！

早く１３巻まで行きたい。ゼロランサーを書きたい。

高貴「……仕事してください……」

当麻「てか、１３巻で俺達をどうする気なんだよ！？」

傍観者「……知りたい？」

当、高「……」

強襲！！天草式十字凄教！！

ｓｉｄｅ　上条

落楽園にやってきたのはいいが…、

何がどうなっているのでせうか？

話はすこーし遡る。

ドアを開き、中に入るとインデックスとロリ……あと…誰だろ？

ていうか、シスターなのにあの恰好はいいのか！？

俺が言える立場ではないが、神を馬鹿にしているんじゃ…。

最近のシスターにはデフォルトでとくせい…『変わってる』が付いているのか？

「とうま、そこのシスターさんとはどこで知り合ったの？」

「……えーと、この人は道に迷ってて……いや、なんか追われているそうなんだ。出来たら保護してほしいんだけど……やっぱりヤラセだったのか……。」

くたびれたように喋る当麻。

「ばれていたんだ。いやね、ちょっと人捜しを手伝わせて欲しかったからだよ。ちなみに横の彼女は、ローマ正教のアニェーゼ＝サン

クティス。現場の責任者だよ。」

「と、どーもです。」

何と言うか、動きが固いな。それに、この歳で責任者か…。

「それで、誰を捜しているんですか？」

高貴が質問する。

「隣の人だけど」

「……はい？」

「彼女が！？」

高貴も驚いているようだ。

「そ。僕らが捜している人というのは、彼女の事だよ。名前はオルソナ＝アクィナス。いや～お疲れ様。もう帰っていいよ。」

「ゑ……終わり？」

「うん、そうだよ。お疲れ様。」

「……大事には至らなかったか…。少し釈然としないけど、帰るか。当麻、インデックス。」

高貴がそう言いながら、溜息をつく。

何か嫌な予感がする。

……これで終わりなのか？

まあ、これで終わるならべつにかまわな……

「オルソナ……？」

震えている。何に怯えているのだろう？

追っ手の心配はないはず……

「大丈夫ですか？……ああ…心配いりませんよ。我々イギリス清教はすぐに手を引きますから。」

ステイルも声をかける。

だが、

『いやいや、そんなにあっさりと引き渡されたら困るのよなあ』

何処からともなく、声がした。

周りを見回すと、上を見ると、風船が浮いていた。

一体何が……、

『オルソナ＝アクィナス、それは貴女が一番よく分かってるはずなのよな。こちらと行動を共にすることが、最善であるとな。』

ザシュッ！

オルソナの足場が三角に切り裂かれ、

「あっ！？」

穴に消えていった。

「天草式！？」

アニェーゼが叫ぶ。

『全く、無用心よなあ。彼女がどこへ行っても、指揮官の場所へ連れていかれると踏んでいたが、まさかこうもあっさりいくとはな。苦労が無駄にならず、よかったなよなぁ～。』

高貴は動いていない。

何か考えこんでいるようだ。

考える暇はない！

早くオルソナを…！

穴に入ろうとするが、

「だめっ！！」

インデックスが当麻を止める。

そして…その声と…穴の中を見て、当麻は思わず一歩後退した。

そこに見えたのは、鈍く光る刃。

……もし、インデックスが言ってくれなかったら……。

間違いなく、串刺しになっていた。

「我が手には焔。その形は剣。その役は断罪……！？」

……ステイルが詠唱を途中でやめてしまった！？

「逃げられたか…おい君でも探知出来ないのかい？」

「人にしては速いし、座標を特定しにくい。空間を正確に把握出来ない。…なるほど…隠密性に特化しているか…厄介だな。」

何が起こっているんだ？

……そして今に至る。

シスター達は、天草式の追跡で慌ただしくなっていた。アニェーゼが外国語を使い、仲間に命令をだしていた。

英語なら少しわかるんだけどな。

イタリア語（多分喋り方がそれっぽい）は分からない。

「ステイル。今回の事情を教えてくれないか？なぜ、俺達を呼んだのかを…」

高貴が質問した。

「そうだね、簡単にいうと、禁書目録の力かな。」

「……やはり、インデックスの知識か」

「へぇ、感づいていたのかい。そう、今回は『法の書』の原典についてなんだ」

ステイルが続ける。

「この魔道書は、とある有名な魔術師が書いたとされるものなんだよ。しかし内容が暗号化されており、誰もその中身を知らない。それでももし、解読が可能ならば、絶大な力を手にできるそうだ。それで今回、それを彼女が解読できたのだが…」

連れ去られたわけか。

驚くべき事は、

「解読はインデックスでも無理なのか…。」

知識ならトップクラスの彼女が解けないものとは…

「うん、あれは普通の暗号じゃなかった。でも、その方がいいのかも。」

「なんでだ?」

「私も詳しい事は分からないけど…」

「ああ、確か絶大な力なため、使われたら十字教の世界が崩壊し、新しい時代に移ると言われている。一説には、正体は天使の力を自在に操るものだという。」

「天使だと！？」

「……やはり天使の力は世界を動かすには十分なのか…」

「…天使の力を知ってるような感じだね。何かあったのかい？」

「まあ、神裂達も知っているし…」

「そうだな高貴。何か手掛かりに繋がるかもしれない。」

海の家での事を話してみた。

（もちろん、親父の事や、高貴がソイツを薙ぎ払った事は伏せている。）

「そんな事が…僕も知らず知らず影響を受けていたのか…」

「対峙した時、圧倒的な存在感を感じたんだ。……あれは別格だった。」

率直に感想を言ってみた。

「……相対出来るのは、天使か神だけだな。」

高貴も続いて言う。

「そんな場所にいなくて良かったかもね僕は。話を聞く限り、理不尽な存在みたいだしね。」

「とうま!!それに高貴!?」

インデックスが突然大声を出し、こちらを睨んだ。

「な、なんでせうか。インデックスサン?」

「全く!そんな大規模な魔術が世界を危機に陥れていたのに、私を置いてけぼりにするなんて……コレハドウイウコトナノカナ〜?」

「イ、インデックスサン??」

「まさか……これはいつもの…」

「そうなんだよ!!!!!」

ガブッ!!

ゴキッ!

「ぐわぁぁぁ!!関節が面白い方……いたい!いたい!いたいぃ〜!!」

「ヤバイ!マジで頭皮がかなりヤバイィィ〜!!」

俺はいつもより、強い威力で噛み付かれ、高貴は引っ掻きからラリ

アットにグレードアップし、さらに関節技まで決められ、身体が白旗をあげている状態になった。

ステイルが爆笑していた。

何、（≧≦）な顔しているんだよ！！

数分後

インデックスは清々しい顔をして、

瀕死状態の俺。

すぐ回復したけど、くたびれている高貴を見て、アニェーゼが唖然としていた。

「え、何が…？」

「いや、ただの痴話喧嘩さ。」

「何処がだ…まったく…」

「能力っていいなぁ……。」

さらに数分後、

やっと俺が回復し、状況説明が始まる。

だが、何やら緊張しているようだ、足元がふらついている。

というか、あのサンダル厚底すぎたろ！

なんて思っていたら、

「わひゃぁ！？」

言わんこっちゃない。バランスを崩して俺を掴む。

はい？

「なんで…ガフッ」

理不尽だ、受け身もさせてもらえないとは。

顔をあげようとし…た…ら……

アニェーゼのスカートが目の前にあった。

「グハアッ！」

鼻血を出して、再び行動不能になる高貴。

「きゃ…きゃあぁぁぁぁぁ～！！？？」

アニェーゼが悲鳴をあげ、

「きゃあぁぁぁ！？高貴の頭から血がぁぁぁ～！！」

平常心を失っているインデックス。

再び爆笑しているステイル。

また（≧≡∇≡≦）か…。

時間の無駄はもう避けたいらしく、ぶっ壊れている高貴を放置して、話が再開された。

話を聞くかぎり、天草式は相当隠密性に優れているらしい。人海戦術を駆使しているローマ正教の追跡網をいとも簡単に突破、足取りも掴めないらしい。

神裂のもといた組織でもあるそうだ。

なんで魔道書を狙うのかは分からない。俺はよく知らない。

しかし、神裂が元仲間のピンチに駆け付けて来るんじゃないか？

なんてことを聞いてみると、

「だからこそ、彼を呼んだのだが…」

ただ今機能不全に陥っていて、シスターさん達に介抱されている異性への抵抗皆無の純情少年を見て、溜息を着く。

「……」

……話に戻ろう。

「天草式には、にほん各地にポイントが存在しているの。それも、

自由に行き来できる『渦』と『渦』の間を通るような地図の魔術。名を大日本沿海輿地全図。作ったのは、伊能忠敬だよ。」

「あれ？　この人魔術師だったの？」

「まあ知らない方が普通だよね。えーと話に戻るね。彼は偶像の論理というものを採用しているの」

「何だそりゃ？」

「簡単に言うと、神様の力を上手く使うための知識のこと。でも、オリジナルに比べると、数パーセントしか力は発揮されてないけど。それでも、私たちにとっては結構凄い力なんだよ。」

だが、彼はこの理論を応用し、偶像を使って本物に干渉したらしい。それがこの奇跡を可能にしているらしい。それも空間把握に特化した高貴の目をかい潜るほど。

それに、ネタが割れても、距離によっては高貴も対応出来るかどうか分からない。

さらに凄いことに、彼は本物と偶像の黄金比を歪めなかったそうだ。

普通は、本物と偶像は違うし、作った地図と今では時代が違う。時代が移るにつれ、機能しなくなるはずだが、今もなお正常に稼動しているという。

スケールのでかさにイマイチぴんとこない。

とりあえずすごいんだなぁ～。

でも、初見で何処に行ったかを言い当てるインデックスもすごい。

いつもはとんちんかんな行動をしているのだが、

「とうま、何か変なこと考えてない？」

「いえ何も……」

この反応…人間やめているよ絶対…。彼女の予測通り、当たりのようだ。

というか数十分で見つかるような場所に移動した天草式は何を考えているのだろう？

話はまとまり、夜の十一時に決行するらしい。

ホント、宿題やってなかったら、ペナルティーだったな。

ついでに、やっと高貴が復活した。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

話は当麻から聞いた。

なので、今はテントで休んでいた。

当麻は何か手伝えることがないか、うろうろしている。

俺も動きたいが貧血気味で、少し気分が悪い。

何か飲み物でも買おうかな…。

ゴンッ！

「きゃあぁぁ！！」

テントの角にぶつかったかな？

天草式には攻める理由もないしな。

それに行ってはならないという、感覚がした。

やはりというか断末魔が聞こえた。

考えないことにしよう。

それと今回の状況を整理してみよう。

オルソナが解読方法を発見。

天草式に連れ去られた。

一度は奪還するも、彼女は行方不明に。

俺達と行動を共にしていたが、またともや連れ去られた。

最善な選択

奴らはこんなことを言っていた。

隠密性に特化した組織に、目立つものは邪魔でしかないはず。

奴らは一体何を考えているのだろう？

強襲！！天草式十字凄教！！（後書き）

不定期ですが、勘弁を。

公約通り、２２巻までは行きます。

焔は少女のために…（前書き）

えっと、今回は短いです。そして、少し序盤の話を修正します。目も当てられない出来なので。

焔は少女のために…

ｓｉｄｅ　上条

酷い目にあった。

まあ、自業自得なんだけどな……。

回想

「きゃあぁ！？」

「！？」

何が起こったんだ！

当麻は慌てて声の方向に向かった。

そしてそこには…

ナメクジを見て錯乱しているアニェーゼとインデックスが……えっとどう言おうかな？

……シャワー浴びてる最中でした。

やばい、やばいって

俺、社会的に死んだかな？

でももし、生き残れるなら…旅に出ようかな？

俺を見てアニェーゼは気絶し、インデックスを泣かしてしまった。

「ご、ごめん！天草式が来たかなって思っ……スミマセン！スミマセン！ワタクシが愚かでし……た？」

インデックスの目がヤバい。

何かもう、種割れ状態？

うん？　俺は何を口走っているんだ？

カブリッ

……最高の威力で噛み付かれました。

「ぐわあぁぁぁぁぁぁ！！！」

回想終了

と言うことがあり、体力を持っていかれました。

なので、今はテントで療養中です。

舐めんなよ！　インデックスの噛み付きは伊達じゃない！！

うわ、また変なことを……

当麻が場違いな事を考えている隣では、ステイルが装備を整えていた。

「……なあ、どうして高貴を呼んだんだ？それに神裂と戦わせるなんて……」

「神裂は世界に二十人しかいない聖人の一人だ。止められる者も限られるんだ。」

「……やっぱり神裂は凄いんだな……でも高貴をあいつと戦わせるなんて……」

「現状では彼しか彼女を止められない。……本来なら僕の役目なんだけどね。……でも彼は強いよ。僕達よりずっとね。……まあ、君よりさらに質が悪いけどね。」

何が言いたいかは何となくピンときた。

「……高貴の行動がそんなにおかしいのか？」

「まあね。天使と正面から戦うなんて命知らずにも程があるよ。……それに僕らが来る前まで人助けをかなりやっていたようだしね。……見ず知らずの他人の危機に颯爽と現れ、助けていく……。聞こえはいいけど、今みたいなことを続ければ、彼の世界が広がり続け、限界がすぐにくるだろうしね……」

「だけど間違いでもない筈だ。」

結果として、救えた命だってあるんだ。

「優し過ぎるんだよ。人にそんな生き方はあわない……。いつか彼は残酷な選択を迫られるよ。人を等しく助けようとするのならね。」

「平等はいいことじゃないのか？」

「すべての命は等しく価値がある。そうだよ確かに…じゃあ二択を迫られたらどうする？」

「それは……」

わからない。どちらも価値は同じと考えるなら答えは……

「すべてを「無理だよ。」……」

「悪いことはいわない。その考えは彼を破滅させるよ。手遅れにならないうちに変えるべきだ。」

「ならお前は！！インデックスの為に神裂を助けないのか！？消すのか！？」

「やるよ。」ステイルは即答した。

反論したかったけど彼の次の言葉で、そんな感情は消え去った。

「やるよ。ここで彼等を討たなければ、さらに状況は悪化するだろうから。神裂も邪魔をするなら彼女も倒す。……もし戦争になれば、間違いなくあの子は巻き込まれる。……僕はね、あの子の為なら何だってやるつもりだ。相手が誰であろうとね。」

「……」

こんな決意…俺に出来ただろうか？

「ずっと昔に誓ったんだ。『たとえ君が全てを忘れても、僕は貴女の為に戦う。何一つ忘れることなく、君の為に死ぬと…。』」
「ステイル……なら何でインデックスを巻き込んだんだ？」

「あの子の利用価値を上に証明しないといけないから…。ここにいて、無能であるなんて判断されたら、連れて帰らされるだろうしね。あの子は君達といて、幸福なんだろう？」

苦笑いしながら、ステイルは答えた。

俺は、ステイルという魔術師の本質を見ていなかった。悔しいけど、俺なんかよりずっと強い。誰かの為、それも相手が自分の事を覚えていなくても、彼女のために最後まで殉ずる。

俺は…彼女の隣にいる資格があるのだろうか？

ただ俺は、自己満足の為に戦ってるだけなのでは…

……弱気になるな、上条当麻。

俺自身に芽生えた最初の感情だろう？

そして何より…俺だった奴が望んでいたんだ。……あいつを消させないためにも、このわがままを貫き通す。

高貴の理想や、ステイルの覚悟に比べれば、本当に駄々をこねる子供のようなわがまま……。だけどそれであいつの笑顔を守れるなら……。

それでいいんだ。

焔は少女のために…（後書き）

意外に長い。

感想こないかな

兎じゃないけど、少し淋しい。

幕間　暗躍するもの（前書き）

チート三人組初登場です。

現時点では、高貴より強いです。

幕間　暗躍するもの

ｓｉｄｅ　？？？

ヨーロッパのとある洞窟。

高貴達が戦ってる場面を水晶を使い、見ている者達がいた。

「ふむ、やはりそう簡単には出さなかったな。」

水晶を眺める美しい青髪の男が呟く。

「そのようだ。彼がローマ正教ごときに奪われなければいいが…」

その横の少年が不満げな表情をする。

彼はあの時、高貴を襲い、倒されたはずの堕天使……

メリリムだった。

「それは杞憂だろう。あの場に彼を倒せる者などいない。」

こちらはフードを被っており、顔がよく見えない。だが声からするとおそらく男だろう。

「しかし、いつまで観察するのだ？いっそのこと、力を奪ってしまえば…」

「彼は我々とは同族だ。仲間にできる可能性なら十分にある。それ

にどちらにせよ、彼は世界から弾かれる。」

「その時を待つというわけか…」

「そうだメリリム。多少遺恨は残るが我慢してくれ。」

「まあ善処しよう。あいつの命を奪えれなかったのは残念だが。しかし、サタナエル。」

フードの男に尋ねる。

「奴があいつと同じ力を、そしてあいつが生きていただと?」

「ああ、確かにあの魔力は奴だ。まさか息子の中に潜んでいたとはな。」

「厄介だな。奴に入れ知恵されて、こちらになびかなくなるのではないか?」

「迂闊に手を出すのも賢明ではない。もう少し様子を見るとしよう。」「時にベリアル。」

青髪の男に、サタナエルが聞く。

「貴様もあくどい手を使う。まさか人間に天使術を使うとはな。しかも二次的とはいえ、お前の二割の力が使えるようにするとはな。」

「彼が天使の力を使い、正体がばれた瞬間、世界は敵になるからな。テレズマを調べられたら普通にばれるだろう。しかし我(オレ)の二割といってもあくまであの時の二割だ。本来の力を発揮できていない彼に

は少ししんどいかもしれんがな。」

「ふっ、彼が負ければどうする？」

「当然彼を連れて帰る。力を発揮出来ぬ状態の奴など我慢ならんからな。我がご指南しよう。ゆくゆくは、我等が主として戻ってきてもらわねば。」

「我が主が戻られるかもしれんのか？それは僥倖と言えよう。」

「我はむしろ勝ってもらわねば困る。ルシフェルの名誉のためにもな。」

ベリアルは、ほくそ笑む。

これからどうなるかが楽しみでならないのだ。

「精々踊るがいい、上野光輝。世界に絶望し、我の下にくるいつくるのか……我は楽しみだぞ」

人を超える闇は、世界を確実に蝕んでいた。

幕間　暗躍するもの（後書き）

敵になったり、利害がこれから一致するかもしれない。

彼等の目的はいつかばらします。

高貴ｖｓ槍使い！！そして、当麻はまたフラグを・・・（前書き）

まあ、誰なのかはわかりますよね。

戦闘はあっという間です。

高貴ｖｓ槍使い！！そして、当麻はまたフラグを・・・

ｓｉｄｅ　高貴

俺たちは今からローマ正教と協力して、天草式本隊が見つかったとされる遊園地に突入する。貧血による、体のふらつきもなくなり、当麻もなんだか覚悟を決めたようで、肝が据わったような顔をしていた。

「何かあったのか、ステイル？」

同室のステイルなら何か知っているかもしれないと、高貴は尋ねるが、

「僕にも正直わからないね。・・・まあいいことじゃないか。これで僕の仕事も楽になりそうだしね。」

「・・・まだ神裂さんは現われていないんですよね？」

「まだね・・・でも、そうなったら・・・悪いんだけど・・・」

「俺が彼女を止めます。しかし・・・本当に天草式が『法の書』を盗んだのだろうか・・・俺にはその理由がわからない。」

「神裂が抜けて、弱体化した戦力の底上げが目的じゃないか？組織が生き残るためには自然な流れだと思うけどね。・・・神裂の元いた組織だから迷っているのかい？」

「それもありますが・・・伊能氏の作った術式だけでも、十分だと

思うんだけど・・・」

「まあ事の真相は、彼等から話を聞けばいいだろう？　今は目の前のことをするべきだと僕は思うんだけどね。」

「・・・そうですね」

まずは彼等と対峙することから・・・どうなるかは・・・なるようになるかな？

アニェーゼの作戦では、全体の八割を使い、正面から天草式と激突し、俺たち遊撃隊がその混乱に乗じて侵入、オルソナと法の書を奪還するといものだった。

「なあ、インデックスは本隊にいたほうがいいんじゃないか？遊撃隊って結構危険だと思うんだけど・・・」

当麻が提案したが

「むう、・・・とうま。私が魔術を使えないからって何もできないわけじゃないよ。こういう場面で戦局を変えられる切り札を持っているんだから。」

切り札？　確かにインデックスには、スペルインターセプターという相手の魔術に干渉して自滅させるという魔術師とってはある種天敵ともいえる武器がある。

だがまだほかにあるのか？

「当麻、彼女がこういっているんだ、それでいいんじゃないか？

危なくなったら助ければ問題ない」

「・・・ああ、わかったよ。」

そしてしばらくして、アニェーゼが号令を出し、シスターの大部隊が動き出す。

彼女は天草式が許せないという。元々、十字教は隣人愛、他者を助けるために生まれてきたという。そして暴力が暴力を生むことをわかっているのか、わからないのか・・・どちらかは定かではないが、彼らに対して憤りを感じているようだ。

しかし、俺はまだ何も知らない。だからすべてを知ってから答えを見つけようと思う。

ドゴウッ！！

！！！・・・どうやらもう戦闘が始まったようだ。

「あれは・・・」

当麻がつぶやく。

「・・・ローマ正教側じゃないね・・・。それに人払いに刷り込みの魔術を併用しているか・・・正直これほど高度な術式を惜しげもなく使う辺り、とても洗練されているね、天草式は。・・・道理で数で圧倒するローマ正教が苦戦するわけだ。」

「俺が先頭を行く！！　当麻は死ぬ気でオルソナを見つけろ！！」

囮なら俺が一番適任だ。ステイルがいれば後は・・・

「そうか・・・。何度も言うが、彼女が現れたら君が相手をするんだ。正直・・・ローマ正教のシスターでは壁にすらならない。」

「わかった。そっちも気を付けてくれよ」

「必ずオルソラは助けてみせる！！」

そう言って、ステイル達は俺を残し、奥へと消える。

「・・・・・・・・・・・・さてと、律儀に待ってくれたのはどういうことかな？」

どうやら、アニェーゼのセオリー通りの攻め方は簡単に見抜かれていたようだ。

俺の周りには、４人の少年少女がいたのだ。おそらく『渦』を利用したのだろう・・・。気配が全くない所から急に出てきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼らは無言だ。そして時間差を利用し、各個で襲いかかってきた。

だが、高貴は瞬間移動で回避し、高貴が元いた場所には空き缶が・・・

ドゴオォォッ！！！

「「「ぐわぁぁ」」」

深く踏み込んでいた少年たちは爆風で吹き飛ばされ、地面にたたきつけられ、動けなくなった。

長槍の少女の方はカンがいいらしく、瞬時に回避していた。・・・どうやら小隊長は奴らしい。

彼女をよく見ると、あの時ぶつかってきた女の子だった。・・・世の中案外狭いな。

そんなことを考える余裕はあるのかとステイルに怒られそうだがな・・・。

まあ実際そんな余裕を与えてくれなかったようだ。

音速・・・とまではいかないが、突きの嵐が高貴を襲う。

心眼で見切る彼だが、

「（魔術に対して、反射が効くかどうかはまだわからないから、下手に食らうわけにはいかない。それにあの槍は魔力によって相当強化されているようだ。かといって人体に対しては、止まっていないものをうまく飛ばす事ができないし・・・）」

攻めあぐんでいた。

二回目のの堕天使との戦いで見せた音速の物体をテレポートできたのは、あらかじめポイントを決めそこを通過した瞬間に発動する仕掛けにしていたのだ。躱してきたからあれは可能だったのだ。・・・いくら彼でもまだそこまでの境地にはたどり着いてない。

ちなみに彼女も幾分か魔術で体を強化していたため、かなりの体力があるようだ。

あの力はまだ出すには早い。早々にリタイヤするわけにはいかないからな。

さてどうしたものか・・・・

あった。というより見慣れているじゃないか。

バチバチバチバチ!!!

体から電流を放出し、雷撃の槍を投擲する。

彼女はどうやら回避は無理と判断し、槍で掻き消した。

「馬鹿な!?」

当麻みたいに打ち消し・・・いや力でねじ伏せてきただと・・・？

ただ、反動で彼女の体が少しよろめいた。

悪いが付け入らせてもらう。

テレポートで背後に移動すると、彼女は驚いたように槍で薙ぎ払おうとする。しかし、高貴は雷を纏う左手で槍を受け止める。

ほんと、使い勝手がいいな御坂の力は・・・。

「あうぅ!!」

とどめに雷を纏う手刀でしびれさせ、何とか倒した。

・・・今度から能力での戦闘について考えないとな。

当麻たちは、うまくやれているかな？

というか天草式はレベルが高いな。・・・本当に『法の書』を盗む必要があったのか？？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　上条

なんでこんなことになったんだ～！！

俺は今、天草式の追っ手に追われている。

一対四は上条さんには無理です。というかステイル！！　逃げるなら合図とか出してほしいな！！

曲がり角をくねくね曲がりながら、何とか撒くことに成功した。・・・ステイルには・・・あいつには負けたくない！！というかやっぱりそりが合わない～！！！

・・・さてと、気を取り直して、オルソナを探さないと・・・。

ガシャン　あ・・・・・・

地面に置かれていた工具に気が付かず、蹴り飛ばしてしまった。

おい・・・この流れは・・・あ・・・・・

レイピアを持った女の子が登場～～。　どんだけ不幸なんだよ俺は・・・

何かこの状況を打破するには・・・あった！！

足元には、散らばった工具が散乱していた。

少女は当麻に突進してくる。

「いけぇ！！」

近くにあった歯磨き粉のチューブっぽいものを投げつける。

彼女の敗因は、それを避けず、切り裂いてしまったことだろう。

中身が飛び出し、一瞬だが、彼女の視界を奪う。

視界が回復した時には、すでに当麻は目の前にいた。

「くっ！！」

何とか距離を取ろうとバックステップを試みるが・・・

「おせぇぇぇ！！！！」

当麻の当て身がさく裂し、彼女は地面にたたきつけられ、気を失った。

だが、さすがはフラグ一級建築士上条当麻。ちゃんと後頭部は守るというジゴロぶりを発揮していた。

みんなは無事かな・・・

インデックスはステイルがいるから問題はないと思う。高貴も高レベル能力者だし、たぶんやられない。

あれ？　もしかして、俺が今、一番の足手まとい？？

・・・とりあえず、オルソラを探そう。・・・余計なことは考えずに・・・・

曲がり角を慎重に進む。あいつらにまた襲われるのはごめんだしな。

しかし、気を付けていたのに・・・・

ドカッ

「うぐわぁ！？」

何か黒いものが俺のみぞに入った。　いったい何が・・・・・

「むぐむぐーうんーううぅー。」

・・・オルソラ？

天草式に捕まったはずじゃ・・・

とりあえず口を塞いでいた紙を剥がす。

「どうやって逃げてきたんだ？」

「私にもよく分からないのでございます。見張りの方々が黒い影によって次々と倒されたのです。私は、戦闘の最中に抜け出し、今に至ったのでございます。」

黒い影？

誰かは知らないが、天草式以外にも彼女を狙う存在がいるみたいだ。

第三勢力の介入なら、早く本隊と合流しないと・・・・

「そういえば、貴方は学園都市の方でございましたよね？」

「そうだけど・・・・どうかしたの？」

「何故貴方はこのような所にいるのでございましょうか？　立ち上がる理由はないはずでございましょう？」

やっぱり変なのかな。オルソラは首を傾げながら尋ねる。

「まぁ俺はちょっと特別でね、イギリス清教に知り合いがいるんだ。何だか知らないけど、あいつらの手伝いをしているだけだよ」

すると若干オルソラが反応した。

・・・宗教というのは宗派によっては、相当仲が悪いのかな？

昔のプロテスタントとカトリックみたいに・・・

「えっと、ローマ正教の貴女にとって、イギリス清教はやっぱり敵なのか？」

「いえ、そうではございません」

じゃあ、何だろ？

「確認させてもらいますけど、貴方様はイギリス清教からの協力要請があって手伝う事になったのでございましょうか？」

「そうだけど。別に要請がなくても、俺はお前を助けるよ？」

「・・・どうして？」

オルソラはとても不思議そうな顔をして俺を見てきた。

「誰かが危険に晒されているんだ。助けにいくのは当然だろ？」

「・・・・・」

「やっぱり変かな？あいつの受け売りだし、一応俺もそうおもってるんだけど・・・」

そしたらすごい勢いで首を横に振って否定した。

「そんな事はございません。ですが、貴方様のような方々は、魔術の世界に関わりを持たない方がよろしいはずでございましょう。」

「まあ、そう思ってしまったから仕方ないかな。」

そう言いいながら俺はステイルから渡された十字架をいじる。
何か効果があったのかもしれないけど、右手は既に触れちゃったし、破壊されているだろうな。
だからこの十字架は、今は単なる十字架なんだよね。

「あら？貴方様がお持ちになっているのは・・・・」

「このペンダントのことか？」

何か意味があるのかな？
突然オルソラは、握手をするかのように俺の手を掴み、さらにもう片方の手で包み込んできた。

「ひとつだけ、お願いがあるのでございます」

えぇぇ！？何だ何だいきなり・・・・

「あなた様の手で私の首にかけてもらえないでございましょうか」

「ああ、構わないけど・・・・」

意味がやはりあるのか・・・・。
オルソラは瞳を閉じて顎を上げた。

・・・・よく見ると、オルソナって美人だよな～。というかまともに直視できない。

ドキマキする心を抑えようと、視線を下に向けるたのは失敗だった。

・・・視界いっぱいにオルソラの大きな・・・が目に飛び込んできた。

くっ！何を考えている上条当麻！首にペンダントをかけるだけだぞ、何冷静さを失っている！

それでも当麻はなんとかして、ネックレスをオルソラの首に巻きつけようとした。

何だこの格好？

抱きしめるかのような格好でした。

手の震えで中々連結しなかったが、なんとか鎖の連結部を繋げる事が出来た。

「お、おわったよ……」

オルソラは胸元にある十字架を指で撫でる。

「そういえば聞きたいな。何故貴女は『法の書』を解読しようとしたの？」

「魔道書というのは相当危険な物なんだろう？　原典と呼ばれるものは」

「……はい。魔道書の原典はどんな方法を使っても破壊する事は出来ないのでございます。しかし……」

「・・・別に『法の書』の解読方法が知りたいわけじゃない。何でそこまでして調べようと思ったのかが気になったんだ」

「魔道書が危険なのは、あなた様が言ったとおりでございます。ですが、その魔道書の原典がなくなれば？」

「誰も使えないな」

「その通りでございます。魔道書の力なんて、誰も幸せにしないのでございますよ。ですから私は、ああいった魔道書を壊すために、その仕組を調べてみたかったのでございます」

「でも魔道書の原典は壊れないんじゃ？」

「原典が一種の魔法陣であるのなら、その魔法陣の仕組みそのものを逆手に取れます。つまり方法によっては、原典を自滅させることも可能なはずでございましょう」「……でもやっぱり危険じゃないか？　女性がそんな危ない橋を渡るなんて・・」

オルソラは一瞬キョトンとした後、くすくすと笑い出した。

え、え、え何だ？また何か失言を・・？

何ともなごやかな雰囲気である。

フラグを立てていますね、彼。

しかし店の向かいから鈍い音が聞こえた瞬間、そんな空気は一瞬にして霧散した。

慌てて立ち上がると、視界に何かが映った。
それは赤い髪の、黒い服を着た神父であった。
「ス、テ……イル……？」
ステイルがやられた！？
彼は勢い良く地面へ落下した。
背中から地面へ激突した彼の体は、あちこちが刃物で切り裂かれたかのようにズタボロだった。
「く、そ。上条、当麻か。何をやっている。早く逃げろ！！」
「え？」
「くっく。なぁにをやっとんのよイギリス清教の神父様。おら、英国紳士の誇りはどこ行った？　この建宮斎字に見せてみろ。そんなんじゃ女の一人も守れんぞ」
両手剣を軽々と片手で握る男が笑みを浮かべながらステイルに言う。
・・・あいつがいないけど、絶望的かもしれないけど・・・・それでも俺は、オルソラ達を守ってみせる！

高貴ｖｓ槍使い！！そして、当麻はまたフラグを・・・（後書き）

ユーリ・・・ではなく、建宮さん登場！

次回も多分すぐ出します。

高貴「あれ、俺の出番は？」（前書き）

出番はありません。

高貴「あれ、俺の出番は？」

「なぁお前さんが呼べるなら呼んでくれや。英国神父相手してるより、何倍もマシだろうしな」

しかしステイルは建宮と名乗る男を見ていなかった。

その先、壊れた店舗の向こうの観覧コースで身構えている人物。

インデックス！！

「お前、守りながら戦ってきたのか……」

「余計なことは、考えるな」

血を吐き出すような勢いで、ステイルは言う。

「……よし、オルソラ＝アクィナスを確保しているね。後は隙を作って逃げるぞ。無理にあれを倒さずとも、逃げ切れば僕たちの勝ちだ」

震える足で無理やり立ち上がったステイルは、建宮を睨みながらそう言った。

建宮は、薄っぺらい声で言う。「何だってこんな所でお前と鉢合わせにゃならんのよ？　何度も説明したが、我々は貴女に危害をくわえるつもりはない。オルソラ＝アクィナス」

「確かに、あなた様のお言葉は希望に満ちていたと存じ上げてございますが、私は武器を振り回しながら訴える平和など信じられないのでございますよ」

「無念よな。ローマ正教などに戻っても仕方がないだろうによ」

肩の調子を確かめるように、建宮は大剣を握った右手を軽く振り回した。

当麻はオルソラを庇うように、無言でオルソラの前に立つ。
足元にドレスソードが転がっているが、当麻は無視した。
武器を扱う事には慣れていないし、振り回して無駄な体力を消費するなら持たない方がいいだろう。

しかし、あのでかく、長い両手剣を片手で振るうなんて出鱈目だろ！

そんな俺を、建宮は目を細めて見ながら言う。

「武術の構えじゃねぇ、霊装などもなし、魔術的記号などもなし。本当の意味で丸腰……か。ふん、素人とは剣を合わせるつもりもなかったんだが……そうもいかんようじゃねぇの。お前さんの足元に転がっている剣は浦上から奪ったもんか？」

浦上？

さっき戦った少女の事だろうか？

「お前の部下ならむこうで寝てるぞ。ちょっと服に工具用のチューブ液が服にかかってるかもしれないけど、死んでいない。」

瞬間、建宮の体から凄まじい殺気が溢れ出たかのように見えた。

「ナメてんのかテメェは。死ななきゃ何やっても良いってわけじゃねえのよ」

どうやら奴は、仲間のために怒れる人間のようだ。それは誰かのために戦えるような人間という事。

「・・・出来れば俺はお前みたいな奴とは戦いたくない。お前は誰かのために戦えるような人なんだろ。なら剣を引けよ。戻れなくなる前に」

「おいおい、そいつは無理な願よな。諦めてくれ。」

分かってるさ…、こういう奴は、諦めが悪いことぐらい。

そして、俺がまともに相対しても、勝てる相手ではないことぐらい。

俺が一人追加されただけで、どうにかなるとも思わない。

けど……だったらステイルはどうなる？

インデックスはどうなるんだ？

ステイルは身を屈めたまま、荒い息を吐いて建宮を睨みつけている。

立つことすら辛いのだろう。だが、それでも彼の瞳に諦めの色は見えなかった。

諦めるわけがない。彼はたった一人の少女を守る為だけに闘ったのだ。そのインデックスもどうなるか分からない。

それにオルソラは、どうなるんだ？

彼女は俺と建宮の顔を、不安そうな目で交互に見ていた。

天草式は『法の書』の力を欲している。

ならばオルソラは『今この場』では危害を加えられる事はないはずだ。

だけど、天草式が『法の書』の力を手に入れた後、一体どうなる？

解読法の伝授を拒めんでも・・・。

彼女は『法の書』の力なんて求めていなかった。

ただ争いの種となる魔導書をどうにかしたいと願っただけ。

こんな事を防ぐために努力してきた。

その努力を喰らう相手がいる。

己の欲望の為に利用しようとする相手が、自分の目の前に立っている。

なら、この拳から力を抜く理由など、どこにもない！

それに……あいつなら逃げるなんて選択肢は選ばない！！

俺は目を背ける事なく、ただ真正面から建宮を睨みつける。

「……なめんなよ」

彼女の努力を……汚してはならない。

建宮は、心底残念そうなため息を吐く。

「なんて目ぇしやがるんだ。そんな目で睨まれちまったら悲しくなっちまうじゃねぇの。やるべき事はわかっちゃいるんだが、こういうまっすぐな反応されると思っちまうのよ。もっと別の出会い方はなかったのかとね」

建宮はフランベルジュを軽く揺らしながら言う。

「けどまぁ、やるってんなら仕方がねぇ。今日がお前さんの命日だ」

建宮が言葉を吐き出したとの同時に、凄まじい爆音が聞こえた。

ただ地面を蹴りつけただけだ。

それなのにそれは凄まじい音と地面を刈った跡を残した。

まったく、何て出鱈目なんだよ・・・だが、それがどうした！

後ろにも横にでもなく、前へ一歩を駆け出す。

怪訝そうな顔をする建宮だが、当麻は気にせずわずかに斜め右方向へ突撃する。

「ふっ！！」

吐息と共に、建宮が剣を振り下ろす。

ただ真上から真下へ振り下ろしただけなのに、雷光のように見えた。

それは俺を真っ二つにしようとする必殺の一撃だった。

「っ！」

それを感じた瞬間、当麻はわずかにではなく、全身全霊を込めて真横へ直角に飛んだ。

それまであった慣性の力を全く無視した飛び方なため、足首に重い負荷がかかった。

バランスを崩した当麻は、横手にあった店の裏壁に激突する。

くそっ!!

「しっ!」

予め予測していたのか、建宮は驚くことなく当麻へ追撃を行う。

振り下ろした刀をそのまま跳ね上げて、真横へ薙ぎ払う。

「舐めるな!!」

やられっぱなしには・・・ならねえ!!

攻撃が来る前から当麻は身を低くしたまま、地面を舐めるように建宮へと突撃する。

こっちが横方向に逃げれば、あっちは真横に薙ぎ払って追撃をするってな!

「おおおおおおお!!!」建宮の攻撃を頭上すれすれでやり過ごした当麻は、雄叫びを上げながら建宮に向かって拳を振るう。

対処できるはずはない。

だが、建宮の姿は急に消えた。

「なっ！？」
一瞬で一メートルほど後方へ下がっていた。
瞬間移動？
真横に振るいきった剣は、すでに真上に構えられていた。
「！！！」
マズイ！
心臓が恐怖でわし掴みされたと感じたと同時に、当麻は真横へ転がった。
直後、建宮が真上から一撃を放った。
ギリギリで当麻に回避された攻撃は、そのまま地面へと激突する。
あまりの摩擦のせいか、激突したときにえぐれた土がマグマのようなオレンジ色の光を放っていた。
……魔術！
物理法則を無視する攻撃ならば……
奴のフランベルジュに触れようとした。
「違う……だめだよ！　とうま！！」
その瞬間、インデックスの叫び声が聞こえた。そして、考えなしに走りだしたインデックスを見て、
当麻は戸惑ったが、その主旨を、すぐに知ることになった。
これは……魔術、じゃない？

建宮の挙動、それは全て力技によって繰り出されたもの。魔術ではなかった。

「駄目だ、来るな！　インデックス！」

思わず叫ぶが、インデックスは聞こえていないのか止まらない。

「原初の炎、その意味は光、優しき温もりを守り厳しき裁きを与える剣を！」

建宮の剣が今にも当麻に振り下ろされそうな時、ステイルは大声で叫ぶ。

その瞬間、酸素を吸い込んで炎が爆発する音が辺りに響く。

建宮の意識は当麻から強制的にステイルへと向いた。

「くっ！」

左に大きく跳んで距離をとろうとした当麻だが、それに呼応するかのように建宮がついてきた。

不自然極まりない動作で、ぬるりと地面を滑るような動作であった。

魔術！

建宮の行動に気付いた刹那、振り返りざまに建宮の横薙ぎが襲いかかってきた。

とっさに身を屈めて避けようとしたが、脇腹に何かが直撃した。

な…にが…？

まるで硬いボールが直撃したかのように、重たい衝撃が脇腹から広がっていく。

「ぐ、は。」

自分の脇腹をよく見ると、空気で作ったサッカーボールのようなものが体にめり込んでいた。

その衝撃で、俺は強引に地面へ押し倒されて転がってしまった。

「とうま！」

天草式の術式には、派手さも強力な攻撃力も特殊さもない。

だがそれを逆手に取る。

魔術の攻撃かと思えば単なる力技だったり、手品とおもえば魔術を使う。

どのような攻撃が来るか分からない。まるでマジシャンのような攻撃を繰り出す。

戦い慣れしている。俺とは次元が違う…

後ろをチラリと見る。

そこには炎剣を構えたステイルがいたが、それを使う雰囲気が感じられない。

当麻は頭をフル回転させて考える。

考えろ…

ステイルが炎剣を使えないのは自分が建宮の壁となっているからだ。

考えろ！

この状況で誰一人欠けることなく。

何一つ失うものはなく、

皆で笑って帰るには、

一体どうすればいいのか？

その答えを当麻はすぐに出した。

「……やれ」

俺は右手を握り締めるとステイルに向かって言い放った。

「俺ごとやれ、ステイル！」

そう叫んび、残った力を全て振り絞って建宮へ突撃した。

予想通りに奴は混乱した。

背後から迫るインデックスなど建宮にとっては簡単に両断出来る。

俺がそれを止めようと飛び込んできたが、俺を叩き斬ってからでも時間は残されている。建宮にとって、俺達を倒す時間も十分確保できる対象であった。

だが、問題は後ろ。

ステイルが、炎剣を腰だめに構えたままかけ出してきた。

どう考えても、普通なら俺を貫通してしまう。

当麻は建宮の前で右腕を後ろへ振り回し、ハンマーのような拳を放とうとする。

「チッ！」

俺の攻撃を対応してからでは、炎剣の一撃に防御が間に合わない。

拳は問題ないが、炎剣の対応を誤れば死の危険がある。

建宮は振り上げたフランベルジュを水平に構え直す。

既に俺をみていない

。炎剣で貫かれる存在など、どうでも良いと考えているはずだ。

だから完全な隙ができた。

当麻の右腕に、ステイルの炎剣が激突する。

そう思っていた奴だが、俺がその予想に反して何も起こさせなかった。

起きたのは風船が割れるような音と共に、炎剣が火の粉になって消滅しただけ。

「な……？　に、が……」

「が、ば……！」

拳を勢い良く建宮の顔面に突き刺した。

そして、建宮の体が大きく後ろへ仰け反った。

崩しかけたバランスを取り戻そうとしたが、

「させるかぁぁ！」

それを許すと思っているのか？

二人分のラリアットはきついだろうな。

受けた建宮は、真横へ吹き飛ばされ凄まじい勢いで地面へ叩きつけられる。

そこで建宮の意識は途切れた。

武器として使っていたフランベルジュが地面を滑っていった。

なんとか…勝てた。

高貴「あれ、俺の出番は？」（後書き）

ディルムッドいいですねぇ～。

ｆａｔｅ　ｚｅｒｏを見てますが、彼を活躍させたいな。

高貴「まさか連れてくる気ですか？」

いやいや、

彼を他の世界にぶち込むんだよ。

高貴「いやしかし・・・」

まあ、最後があれだし・・・Ｈａｐｐｙｅｎｄを迎えるようにしますから。

高貴「そうですか。よかった～。」

まあ君も参加決定だから。

高貴「ゑ？」

物語が進むにつれて、鬱なキャラにするから。君よりね（笑）。

これは決定だから。

高貴「向こうの俺・・・強く生きろよ。」

こうき「まったく、子供を虐待なんて最低だあ～！！」

高貴「てか何で子供時代の俺が・・・」

世界は決まってない。でももうすぐ決めるかも。

ローマ正教の闇（前書き）

いやあ、久し振りです。遅くなりましたが、どうぞ。

ローマ正教の闇

その後、高貴達とも合流し、何とか天草式の撃破とオルソラ救出に成功した。

だが、どうにも引っ掛かる。

「おい」

その時、妙に焦った音色を秘めた建宮の声が耳に届いた。

俺達がそちらを見る前に、インデックスが両手を広げて俺と高貴の盾になるように立ち塞がる。

「くそ。お前さんよ、悪いがこいつを解いてくれんかな？　無理を言ってんのは分かってんのよ。けどな、このまま彼女を放っておけるはずもないんでな」

「馬鹿、何言ってるんだお前？　一番やばい人間をみすみす放すはずが……」

「お前さん、まさか本当にローマ正教へ彼女を引き渡す気か？　その後彼女がどういう扱いを受けるか分かってやがんだろうな」

「……どういう意味だ？」

「お前さんは馬鹿って事だよ」

建宮の言葉に当麻の声が詰まる。

「駄目だよ、とうま、こうき。この人は今、言葉を武器にして戦っ

てるだけなの。だから耳を貸しちゃ駄目」

インデックスの冷静な声が聞こえた。

「殺されんのよ、彼女はな」

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　高貴

「いいか、先に結論だけを伝えとくのよ。彼女をローマ正教に引き渡すな。ローマ正教の本当の目的は、彼女を殺す事なのよな」

「自分はオルソラの味方だから、拘束を解いて逃がせってか？　お前らは『法の書』を盗みオルソラを拉致した。これだけの戦闘を起こしたのだって、結局は力が欲しかっただけだろう！？　今更都合の良い話をするんじゃねぇ！　ふざけんのも大概にしろ！！」

怒りのあまり、当麻は喉を痛めつけるほどの大声で叫んでいた。

「全てを話してください。それを聞いた上で判断します。」

「そうかい。なら結論から言うが、我らは『法の書』など盗んじゃいねえのよ」

「は？」

当麻は、信じられないという顔をしていた。

「大体、考えてみるといいのよ。ローマ正教は世界最大の十字教宗派で、その数合わせて二十億人強。そんな所にわざわざケンカを売ってまで手に入れたいものか？　たかが『法の書』が」

やはり・・・か。

建宮の言葉に更に混乱する当麻。

だがインデックスは身を固くしてきっぱりと言い切る。

「真面目に受け答えしちゃ駄目、とうま」

建宮を睨みながら、インデックスは更に言う。

「天草式は女教皇を失って弱体している。だからあなた達は足りない力を『法の書』に書かれた未知の大魔術で補おうとした、違う？」

インデックスの問いに建宮は心底つまらなさそうにため息を吐く。

「逆に問うのよ」

建宮はしっかりとインデックスの眼を見て語る。

「だから、そもそもどうして力を手に入れる必要があんのよ？」

その問いに当麻とインデックスはハテナマークを浮かべる。

建宮の言葉の意味が分からない。そんな事を考えていると建宮は理解した。

そうわかりきった事だ。

「けどよ、力が無かったら他の勢力に負けちまうじゃないのか？」

なおも納得がいかない当麻は言葉に疑問を挟む。

そう思っている当麻だが、建宮は少しだけ小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「当麻、天草式の本拠地を知っているのは誰だった？」

「誰って……」

そこで当麻はインデックスのある言葉を思い出す。

『天草式の本拠地は知られてないし、更に謎なのは『渦』は二十三ヶ所しか見つかってないんだよ』

天草式の本拠地は誰も知らない。

そう、わからないのにどうやって他勢力が攻めて来るのか。

本拠地がわからなければ攻められる心配はない。

俺の言葉に、当麻は渋い顔をした。

「そこの兄ちゃんの言うとおりなのよ。我らの身内以外に誰も場所の分からん本拠地を、一体誰が攻められんのよ？」

「天草式・・・隠れキリシタンと世間一般では知られているけど、彼らは昔からずっと迫害され続けていたんだよ。それでも今日まで生き残れてるのは、本拠地の隠蔽が完璧だったからなんだよ。力云々の問題じゃないんだ。」

「話が分かって楽だぜ、兄ちゃん」

建宮は苦笑しながら言う。

だがその表情は、迫る時間制限に焦っているようにも見えた。

そうなのだ。天草式の本拠地が分からないから、そこに逃げこまれたら終わりだ。

二度とオルソラを助けだせなくなる。

だからこそ、特殊移動法が発動する前に決着をつける。

それが今回の戦闘の目的だった。

「お前さんよ、一つ確認するが『法の書』ってのがどんなモノか知っているのか？」

「『法の書』はエドワード＝アレクサンダー、またの名をクロウリー。本人が言うには『汝が欲する所を為せ、それが汝の法とならん』というのが『法の書』の一番重要な所らしいけど、何の事かは誰にもわからないの」

建宮の問いにインデックスはすらすらと答える。

「『法の書』は謎の存在エイワスによって伝授された内容を記したもので、一説には天使が使用する術式がそのまま使えるとも評されているんだよ。その威力は絶大で、『法の書』のページが開かれた瞬間に十字教の時代は終わりを告げると言われている」

「そこよな」

建宮は意味ありげな笑みを浮かべながら言う。

「ローマ正教は十字教最大宗派であり、世界のトップ、二十億人もの信徒を抱える」
その言葉でインデックスは気付いたのか、にが虫を噛み潰したような顔をする。
それを見て建宮は静かに笑った。
「それが『十字教の時代の終わり』なんて望んでいるとは思わんよなぁ？」
その言葉で当麻は気付かされたようだ。
やはりローマ正教の自作自演か。
いつの時代も変化を求める人間は、自分の立場を変えたい人間のはずだ。
「ローマ正教にとって必要なのは世界を制圧する武器であって、世界を粉々にするほどの兵器じゃなかったって訳だ」
当麻もインデックスも黙り込んだ。建宮の言葉に反論する事が出来ない。
夜の暗さが、一気に何倍にも濃くなったような錯覚が二人を襲った。
「従って『十字教の終わり』を象徴する『法の書』の力を引き出せる彼女を秘密裏に消す事にした。だが彼女もそれに気付いてたのよ、だからローマ正教の息のかかっていない場所……つまりは日本だ」
「日本で十字教の人間は僅か一割とかいうレベルだからな。ローマ

正教だけで、ではない。全部の十字教をあわせてだからな」

「だから学園都市に・・・でも、法の書はバチカンに保管されているはずなんだよ。…！！…まさか……」

自作自演ならいくらでもやりようがある。

「その通りなのよ。しかし皮肉にもオルソラの逃亡と『法の書』の運搬が重なったようなのよ。それすらも、ローマ正教側が仕組んだ事なのかもしれないが……」

「なるほど……二つをセットにしたのも『ローマ正教からオルソラが逃亡するために亡命した』と思わせないためか」

善と悪、攻と守、強奪と救出。
全てが裏返る瞬間を
当麻とインデックスは見た。

「で、これでもまだローマ正教が正しいと断言できるか？　ヤツらの手にオルソラを帰しても大丈夫だと、絶対に断言出来るか？」

建宮の問いに当麻は答えを返すことが出来なかった。
そんな当麻を見て、建宮は怒号で更に言う。
「断言出来ないなら、自分の疑念に立ち向かえ！　冷静になれば誰でも分かるだろうよ、どちらが本当の敵なのかぐらい！」
当麻は冷静に状況を理解していく。

そして、頭の中の情報を丁寧に整理していくうちに、ひとつだけ疑問に思える事があった。

「お前に聞きたい、どうしてオルソラはお前たちから逃げたんだ？」

それはオルソラの逃亡。本当に天草式が味方ならオルソラは逃げる理由がない。
だが、彼女は天草式からも逃げ、学園都市に逃げこもうと考えていた。
つまりは両陣営から逃げようと考えていた。
……どうやら、俺達の考えと……恐らくは天草式の考えは、余程信じられないものらしいな。
彼女にとっては。
「同じよな」
建宮は静かに笑った。
「今のお前さんと同じなのよ。オルソラは確かに同じ十字教である我らに助けを求めてきた」
それはどうしてこうなった、と困惑している、とても弱々しい笑みだった。
「だけどな、結局彼女は最後の最後で我らを信じる事ができんかったのよ。きっと我らはこう思われたのだろうよ」
寂しそうな音色を混ぜながら建宮は言った。
「世界最大宗派であるローマ正教を敵に回してまで自分を彼らが助ける理由はない。おそらく、彼らは見返りに『法の書』の解読方法を求めてくる」
建宮の言葉に当麻は黙り込んだ。

最後の最後で信じてもらえなかった。
それは建宮にとってどれほど辛い事なのだろうか。
想像すら出来ない、いやしたくないな。
建宮の心の辛さを。

「まったく、お門違いも良い所なの。何で我らが『法の書』など求めにゃならんのよ」
どこか遠くを見つめるような視線で建宮は言う。
彼の顔に嘘偽りはない。本当に純粋な気持ちでオルソラを助けようと考えていた。
「じゃあ、何のためにオルソラを助けようとしたんだよ」
建宮の顔を見た当麻は、慎重に問いかける。
「理由なんてねえのよ」対して建宮は秒も置かず即答した。
まるでそれが当然の答えと言いたげに。

「そんなもんハナっからねえのよ。我らは、ずっと昔からそうやってきた」
少しだけ思案顔をした建宮は、やがて顔を上げて言葉を発する。
建宮は遠くを見ながら言う。

「女教皇様は、あの方は、そういう生き方をしてきたのよ。どんな敵を相手にしても立ち向かい、理不尽に埋もれかかった人達を救いつづけた。我等は、そんな彼女に憧れたのよ。……短い時間ではあったがなあ。」
この場にはいない、神裂の事を思い出す。

そういえばあいつは、あの時も、天使と正面からやりやおうとしていたな。

「我等は少しでもあの背中に近づきたかった。だからこそ我等は力の使い方を間違えず、進むべき道へと己を導くことができた。人の強さと、優しさを実感することができた。」

「しかし、共に戦場に出る度に我等の同志は倒れていった。彼女は我等を救えなかったことを悔やんでいた。……悔やむ必要はないのにな。我等はあくまで己が意志に従ったまで。たとえ志半ばで倒れようとも、最後までその道に殉じたことができて、本望なのだから。しかし、女教皇様は去ってしまわれた。」

……俺もいつか、彼女のように絶望するときがやってくるのだろうな。

人が出来ることは限られている。……その時俺は……耐えられるのだろうか？

「誰一人味方がいなくても、例え神様が見捨てようとしても、我らは決して見捨てず救いの手を差し伸べる。それが天草式十字凄教の行動理念……だからこそ助けを求めるオルソナ・アクィナスに手を差し延べたのよ。……彼女がいつ戻ってきてもいいように…。もう誰も傷つかず、哀しまず、誰かの笑顔の為に、幸せの為に皆で立ち上がることができるような場所にするために…」

沈黙が場を支配する。

しかし、静寂を破るかのように建宮は当麻を見つめながら言った。

「お前さんは人を助けるのに『理由』を求めるような人間なのか？　誰かを助けたいという気持ちすら助ける『理由』と思ってしまうようなヤツなのか？　なら、俺の見る目がなかったって事なのよな」

「……」

「お前さんがオルソラを守ろうと俺と戦ったのは『助けたい』という気持ちからだろう？　違うのか？」

「違わねぇ」

「知らぬとはいえ、敵対してすまなかった。」

俺は彼に、いや彼の仲間とオルソラに謝らなければならない。そして、助け出さなければならない。

彼等の生き方がどうしようもないくらい綺麗だから。

彼等の願いを護るため、立ち上がらなければならない。

当麻は建宮の言葉に秒も置かず即答した。

答えは最初から分かっていたのか、建宮は静かに笑った。

「ならよ……」

次の言葉を語ろうとした建宮の声を遮るかのように、どこか遠くで悲鳴が炸裂した。

「この声は！？」

「お、る…そら？」

ぞっとするような叫び声だった。

恐怖、絶望、苦痛が滲み出ている声で…

想像すらしたくないものだった。

「お前さん、彼女をローマ正教に預けるだなんて言ったのか？　彼女はローマ正教じゃなくてお前さんを信用してたんじゃねえのよな？」

その問いに当麻は呆然とした。

考えが甘かった。

危険を侵してでも学園都市にいかせてあげていれば……

「ふざけんじゃねぇ！　こんな結末なんて認められるかよ！」

当麻は激昂していた。

「慌てるな、今のは別に彼女が死んだって訳じゃねえのよ。ローマ正教にはある事情があるから今この場で彼女を殺す事はできねえってもんよ。これだけは確実な話だ」

「何？」

建宮の言葉に当麻は疑問を浮かべる。

だが、その疑問を考える時間すら建宮は許さなかった。

「急げばまだ助かるって意味よ。逆にここで手を誤れば次は怪しい。だから約束しろ、必ずオルソラをローマ正教から取り戻して、奴らの手の届かん所まで連れて行くと！……この際だ！！我らを信用しな

くたっていい！　我らを利用したいなら存分に利用しろ！　それよりもオルソラの安全を確保する方が重要だからな！！」

建宮の目は真剣だった。だからこそ信用できる。

俺はルーンのカードを剥ぎ取るため、力を使おうとした。

その時、不意にカツンという足音が聞こえた。

視線を建宮から音の方に俺達は向ける。

そこには暗闇を割って出てくるように、二人の黒いシスターがやってきた。

ローマ正教のシスターたちである。

背の高いシスターと背の低いシスターで、見事にアンバランスな二人だと俺は思った。

片方の背の高いシスターは丸テーブルのような車輪を担いでいる。

背の低いシスターは腰にまいたベルトに革の袋を四つほどぶら下げている。

じっと観察していると、背の高いシスターが袂から革張りの古い手帳を取り出した。

ページをめくり、何かを確認するように頷いてから俺達の方へ来た。

「外部協力者の御方ですね。貴方たちが捕らえた異端の首謀者の身柄を預かりに参上いたしました。神の敵は……そちらですか？」

背の高いシスターの声と同時に、背の低いシスターが建宮の方へと近づいていく。

だが、建宮に貼られているルーンのカードに気付いたのか、彼の周囲をぐるぐると回って観察していた。

「なぁ、ちょっと頼みがあるんだけどよ」

当麻が彼女に声をかける。

何を悠長に……

「何か？」

「アンタ達が引き上げる前に、もう一回オルソラの顔をみたいんだけど構わねぇか？」

「残念ですが、ご辞退願います。シスター・オルソラの身柄は無事に確保できたとはいえ、安全とは言い難いのが現状です。我々は規則に従い人員の安全を再優先させていただきます」

出鱈目だ。

建宮が捕まっている今、何故そこまでオルソラに会わせようとしないのか。

「いや、駄目だ。納得できない。大体、さっきの悲鳴は何だったんだ？　ありゃオルソラの声じゃないのか。あいつの身柄は保護できたって、あれが保護された人間の出すものか？　とにかく会わせてくれ」

「しかし、規則では……」

「あーもう！　規則規則うるせぇよ！　アニェーゼはあっちにいるのか？　もうアイツに直接聞いてきてやる！」

そう言って当麻は背の高いシスターの肩を掴んで横にどける。

背の高いシスターは肩の力を抜くと、背に預けている巨大な車輪を自分の手前に盾のように置いた。

それを見て、インデックスの顔が急激に緊張を帯びていった。

「駄目だよ、とうま！！！」

インデックスが叫び終える前に、木製の車輪が勢いよく爆発した。

その音を聞いてインデックスが短い悲鳴をあげる。

「なっ！！」

車輪が爆発だと！

当麻は不意をつかれ、爆発の余波をもろにくらい、気絶した。

「し、シスター・ルチア。　あの、えと、よ、よろしいんですかぁ、これって？　確か……ゲストとの不用意な接触は避けるようにってシスター・アニェーゼが……」

背の低いシスターがややオロオロした様子で背の高いシスターを見ていた。

「黙りなさい、シスター・アンジェレネ。だから異教の徒などは我らの懐などへもぐらせずに、もっと早く追い払っておくべきだったのに」

背の高いシスター、ルチアは背の低いシスター、アンジェレネを睨んで黙らせる。

そして気持ちを落ち着けるかのように、口の中で何かブツブツと呟き始める。

「悲鳴などいちいち変に勘ぐったりしなければこちらの仕事も増えずに済むのに……」

ルチアの眼の色が変わっている。

その瞳はどろどろに溶けたバターのような熱に浮かされた目であった。

……歪んでいる。理念すら忘れたのか？

「そこの天草式が抵抗し、貴方たちを殺めたことにしましょうか。ああ、それが一番楽みたいです。その後に私たちが天草式の口を封じれば問題にはならないでしょう」

まるで舞台劇の壊れたシナリオをアドリブで修正していこうとする様子。

隣人愛が聞いて呆れる。

ただの狂人の集まりじゃないか。

「シスタ・アンジェレネ」

ルチアはインデックスを横目で見て、アネジェレネに声をかける。

「は、はぁい」

ルチアの声にアネジェレネは舌っ足らずに答えると、腰にぶら下げている四つの硬化袋を頭上へ投げる。

途端、大きな布で空気を叩くかのような音とも、袋の口からそれぞれツバメのように鋭い翼が六枚ずつ飛び出した。

「きたれ。十二使徒のひとつ、徴税吏にして魔術師を打ち滅ぼす卑賤なるしもべよ」

アネジェレネが夜空を迎え入れるように両手を頭上へ差し出した瞬間。

弾丸のような速度で、緑の翼を持つ硬貨袋がインデックスの体をかすめ、その足元の地面へ勢い良く突き刺さった。

「この……っ？」

インデックスが慌てて飛び退こうとして、その体ががくんと落ちた。

足元をよく見ると、地面に突き刺さった硬貨袋の口紐がほどけており、それがインデックスを地面へと縛り付けていた。

魔法を嫌悪するくせにそれを行使するのか。

少しばかり冷静さを失いかけそうだよ、本当に…。

硬貨袋は残り三つ。あんなものをインデックスの腕で防げるとは思えない。

だが、スペルインターセプターなら妨害できる。心配はないな。

そんなことを考えていると、ルチアが車輪を構えて立っていた。

「貴方は貴方の心配をなさい。少しでも痛みなく逝ける心配を」

爆発が俺を襲う。

奴は俺が死ぬと確信し、狂気な笑顔をしているようだが…

その顔を驚愕に変えてやろう。

ギュィィン！！

爆風を凌駕する烈風で破片も圧も吹き飛ばした。

「なに！？」

「まあ、あれだね。イギリスから情報とか貰ってないから当然の反応だよね。」

「貴様！！何者だ！？」

「君に名乗る名は持ってないし、正直、名乗りたくないね。」

命まではとらない。

「少し、頭冷やそうか？」

テレポートで袖の中の鉄針をシスター達の周りに展開させる。

「ね・て・ろ」

バチバチバチバチ！

「「きゃあああぁぁぁぁ！！」」

鉄針により電気を誘導し、流電させる領域を設定。より少ない電力で効果的に感電させるこの技。

生け捕りや手加減には持ってこいだ。

「すごいな、おまえさん。五和が負けたのも納得よな。」

建宮は、手際の良さに唖然とし、インデックスは出番を取られたみたいな顔をしていた。

いや、出番って…。

ローマ正教の闇（後書き）

チートだな。

対人戦なら最強かも知れないけど、相手が堕天使とかだったらきついんだよなぁ、超能力だけだと。

ところで、次の次ぐらいの大覇星祭で高貴は本気を出すべきでしょうか？

とりあえず読者の意見を聞きたいです。

ご協力頂けたら、幸いなのですが・・・

急転する状況（前書き）

遅れました。

いつも自分の小説を読んでくださる読者に感謝です。

今回も高貴は、偽善者でした～。

急転する状況

「なるほど……そういう事だったのか……」

ステイルは納得したような声で呟いた。

「道理でアニェーゼ＝サンクティスを見た途端に彼女が茫然自失としていた訳だ」

あれから高貴はアニェーゼの元へ向かったが、彼女たちはすでに撤退した後で、そこには誰もいなかった。

建宮を追撃してくる刺客も現れない。

もはや天草式は壊滅したものと判断したのだろう。

残る必要は、もはやないのだから。

「その男の言っている事が事実なら、オルソラ＝アクィナスはすぐに殺されないだろうね。だから上野高貴、今この瞬間にどこかに駆け出そうとするのはやめろ。君や彼が出張ると余計にややこしくなる」

何だと!?

「何故だ、このままだといずれ彼女は殺されるんだぞ。」

「忘れたのか？　君をここに連れてくるのにどういう手順を踏んだか」

「そんな事はわかっている。だが……！！」

奴らは俺や当麻を学園都市の人間だと分かっている。

だからこそ、『魔術』の事情に『科学』が絡むと相当危険なのだ。

ステイルはそのことを危惧している。

ルーンの罠から解放された建宮は、肩の調子を確かめながら高貴に言う。

「ローマ正教もあれだけでかい勢力だと、様々な派閥があるってなもんよ。だから外部より内部の方に大きな敵を抱えているのよ」

建宮の言葉をステイルはつまらなさそうに聞いていた。

煙草の煙を吐いた後、面倒くさそうに言う。

「今回の件は非情にデリケートな側面がある。『法の書』はローマ正教にとって脅威だが、かと言ってオルソラ＝アクィナス本人には何の罪もない。だから無闇に彼女を殺せば、世界中の同胞たちがアニェーゼの敵となる」

「そういう訳なのよ。同胞の些細な問題をよってたかってつつき回るという訳。だからアニェーゼたちも下手な事は出来ないよな」

「しかし奴らは俺達にいきなり攻撃してきたぞ？」

高貴は視線を当麻に向ける。

傷は消えておらず、痕が残っている。

そして、まだ意識が戻らないでいる。

「異教・異端の場合は言い訳ができるのさ。『神の教えに背く者は罰しても構わない』。使い勝手がいいこの一言で過去にどれだけ虐殺が正当化されたと思ってるんだい？　歴史を軽く眺めるだけでも数えることが馬鹿らしくなるほどの数が出てくるさ」

そんな・・・馬鹿な。そんな・・・そんな理由で・・・

「だから逆にオルソラは手をかけられないと思うかも。『神の教えを信じる者を殺めてはならない』からね」

「なら・・・オルソラはどうなんだ？彼女は何もしていない。ただ、争いを止めたかっただけだ。どうして・・・」

あんなに世界を想う人を傷つけるなど。・・・十字教を想って行動しただけなのに・・・

「例外もあるんだよ。・・・えっとね、教会から追い出された人間は『神の教えを信じない者』として殺しても良い事になってしまうんだよ。」

「『神の敵』とな。過去、何度も我ら一族は、彼等が襲撃する所にでくわしたよな。」

「……オルソラに『神の敵』というレッテルを貼る神明裁判を行うには準備期間がある」

短くなった煙草を捨てると、ステイルは新たな煙草に火をつける。

煙を吐き出すと、面倒臭そうに言う。

「だから今この場で殺される事はないだろうが、死ななければ多少何をされても大目に見られるだろうね」

「馬鹿な……」

ステイルの冷静な言葉に、俺は我慢ならなかった。

「人の人生を一体何だと思っている！　そんな理由でオルソラの抱えてきた大切なものを一つずつ没収していく理由など、断じてない！！」

「だから、君が動くと余計ややこしくなるって言ってるだろう」

物分りの悪いヤツだな、そう言いたげな目でステイルは高貴を見ていた。

「気持ちは分からなくもないけどね、少しは気を静めたらどうだ」

悠々と煙を吐き出すとステイルは言う。

「天草式の話が全部本当だったとしたら、僕たちの出る幕はもうないんだ」

「え？」

「いつものように冷静に考えてみろよ、上野高貴。どの組織だって一定のルールは存在する。オルソラ＝アクィナスはそのルールを破った。アニェーゼ＝サンクティスはルールを破ったオルソラを罰するために彼女を追った。言ってしまえば、今回の件はそれだけだろう？」

今回の件をそんな風に扱っていいのか？

そんなことが許されていいのか？

「君の立場で考えてみろ。学園都市が外部へ何の影響もない事件を起こしたとして、それを外部の人間が文句を言えば君はどう受け止める？　その人物の行動を『内政干渉』として見るだろう？」

「くそ！！」

「それと一緒さ。これはローマ正教内で起きた事件を彼らのルールで捌いているに過ぎないんだ。残念だが諦めるんだね、上野高貴。それとも君は戦争を起こしてでも彼女を助ける気かい？」

「……俺は…」

ステイルが言うこともわかる。そんなことになれば、どれだけの人が死ぬのか。

けど、俺は彼女を見捨てるのか？

だけど、どうすればいい？

「君は真実を知らない善良で無力な子羊たちを巻き込んでまで、オルソラ＝アクィナス一人を守りたいと思えるのか？」

ステイルの言葉に、俺は反論できなかった。

上野高貴は強い。世界に名を轟かす聖人と対等に闘えるほどに強い。

だが

個人が組織と、それも魔術の三大勢力の一角となれば、彼でもどうしようもない。

その事をまざまざと見せつけられた高貴は、ただ俯いて拳を強く握るしかなかった。心底つまらないと言いたげに高貴を見ていたステイルだが、視線を建宮の方に向けると静かに言った。

「僕は君の行動まで止める権限は持たないよ。君は君の好きな理由で戦えば良い。だが向かうなら一人で行け。今回の件にイギリス清教を巻き込もうものなら、この島全土を焦土にしてでも天草式をあぶり出して皆殺しにする」

ステイルの脅しに、建宮は軽く肩をゆすって言った。

「ま、そんぐらい分かってのよ。少年もそこまでヘコむなって」

「おまえ……一人でいくのか？」

「それしかねえならそれで行くしかねってのよ。幸いにもうちのバカどもは処刑されていない。だから狙うとすれば、移動時よな」

フランベルジュをゆらゆらと揺らしながら建宮は言う。

「集団の脆さはなんといっても移動中でな。ローマ正教がウチらの仲間とシスターを全員一度に移動させるとは思えないのよ。合わせて三百名だ、そんな大集団が移動したらいやでも人目につく」

「・・・・・・」

「だから必ず移動のために何らかの偽装を行うだろうよ。集団を少人数に小分けして車に乗せていくとかよな。そういう偽装中には集団の本来の力は発揮できないのが定石だ。だから奇襲をかけるならその時しかねってもんよ」

移動こそが最大のチャンス。

そう言う建宮だが、それは逆に移動するまで手を出せないという事を意味している。ステイルは、オルソラを抹殺する為に神明裁判をする必要があると言っていた。

そしてその間に何をしても大目に見てもらえるとも。

それが何を意味するかは言うまでもない。

アニェーゼ部隊総出での暴力。

死ななければ何をしてもかまわない。

間違いなく今オルソラは、人が死ぬギリギリ一歩手前まで傷めつけられているだろう。

俺は・・・

「……いくら我らでも出来る事と出来ない事はしっかり存在するのよ」

気絶している当麻の顔を見て、建宮は苦々しく吐き捨てるように言った。

ローマ正教の者が、捕らえた者をどのように扱うのか。

最悪のビジョンが想像できるのに、何も行動に移せない自分がどこまでも情けなく、悔しかった。

何かないのか？

彼女を救う方法は…

「う、…あれ？俺は一体？」

当麻が起きたようだ。

「上条当麻。君に一つだけ聞いておきたいことがあるんだ」

「……何だよ？」

ステイルの言葉に当麻は力無く振り返る。

その顔を見て、ステイルは皮肉げな笑みを浮かべたまま言う。

「君にやった十字架。今、君はもっていないようだが、どこへやったのかな？」

「……悪い、オルソラに預けちまったままだった。俺が首に掛けてやったらメチャクチャ喜んでたけど。あれ、そんなに高価なモンだったのか？」

少し考えて思い出した当麻は、ステイルにそう説明した。

その言葉を聞いて、ステイルは何故か愉快そうな笑みを浮かべた。

「そうか…ならいいよ。」

「ていうか何が起こったんだ？」

「上野高貴。君が説明してくれ。僕はもう行くよ。」

ステイルは、そう言うと、この場を後にした。

建宮も

「じゃあ、俺達は仲間を集めて奪還作戦といきますか～」

そう言って、闇に消えた。

当麻は話を聞いて呆然としていた。

「そんな、俺は彼女にひどいことを…」

俺だって同じだ。

人一人救うことすら、この世界は簡単にはいかないのか。

だが、人に無理なら・・・

人間に無理でも天使だったら・・・

天使化した姿で、奴らの前に出れば、

天使が神聖不可侵なものだとするならば、

これも正当化されるのでは?

「当麻、インデックスと一緒に待機しといてくれ。」

「高貴?」

「こうき？何をする気なの？」

「俺はオルソラを助ける。」

「…っ！！なら俺も！！」

「おまえはインデックスを守れ。それに誰かさんが悲しむだろうしね。」

「！？」

「でもこうきだって…！！」

「大丈夫、すぐに戻るから。だから待ってて。・・・だから俺は・・・」

決めたんだ、俺は…

「行くよ。」

ボワッ！

白銀の翼が展開される。

「まって！！」

「高貴！」

ごめんな、二人とも。

俺は声を無視し、空へと舞い上がる。

ｓｉｄｅＯｕｔ

ｓｉｄｅ　インデックス

それはさながら天使が空を舞うような…幻想的な光景。

本当に綺麗な翼だった。

あの時よりもさらにテレズマの力が強まっている。

でも、私の知識にも該当しない。

それに……

彼を一人にさせちゃダメ。

彼は自分と他人の比重において、苦悩はする。だけど、最後には他人の生を優先してしまう。

彼は確かに強い。けど、その強さのせいでどの局面にも介入出来る。つまり、とうまよりも危険な場所で闘ってしまう。

とうまよりも危ういのに・・・

でも、どうやって彼を止めればいいのだろう？

「高貴…」

とうまは、オルソラにイギリスの十字架を渡し、首に架けたと言っていた。

首に？

そして、一つの結論にたどり着く。

できる。

彼女を救うことが！

「とうま！！御手柄なんだよ！！」

「え？」

急転する状況（後書き）

正直、無理矢理かもしれない。なおこの作品に某美形槍使いは出ません。本編終了後の別作品です。戯言を言ってすみませんでした。

（父親篇は本編中にちょくちょく出そうかな。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5770w/

とある天使と幻想殺しの苦悩

2011年11月10日04時37分発行